

鹿兒島県史料集 (32)

本藩地理拾遺集 下 (大隅国・諸縣国)

鹿児島県史料集
(32)

本藩地理拾遺集 下
(大隅国・諸縣国)

刊行のことば

この度、鹿児島県史料集『本藩地理拾遺集下』を第三十二集として刊行しました。

写本『本藩地理拾遺集』（本館所蔵）は、田尻種甫編になる三巻本で、「薩摩国」（上巻）、「大隅国」（中巻）、「諸縣国」（下巻）という藩領全体にわたる地誌ですが、前年度に「薩摩国」上を刊行しております。

本年度は、「大隅国」、「諸縣国」の二巻をまとめ、下として刊行しました。

県史料集は、史料の保存を図るとともに、郷土研究に役立てることを目的として刊行しております。昭和三十四年度以来、営々と刊行を続けることができましたことは、県史料刊行委員の方々の御協力によるものであります。

本書は、宮下満郎先生（鹿児島県立甲南高等学校教諭）に編集・校訂・校閲をいただきました。ここに、宮下先生及び県史料刊行委員の方々に心から御礼を申し上げます。

平成四年十月

鹿児島県立図書館

児島正憲

解題

本書の底本となった「本藩地理拾遺集」（上 薩摩國、中 大隅國、下 諸縣郡）は、鹿児島県立図書館所蔵の写本であり、「鹿児島県」と印刷された罫紙に書写されている。いつ、誰の手によって写本されたのか、記録はない。原本の所蔵者なども一切明らかでない。ほかに写本としては、旧島津家編輯所（現東京大学史料編纂所）所蔵のものがあるが、この写本は明治二十一年二月、鹿児島県庁本を町田甚兵衛と児玉五兵衛が写本し、五代徳夫と中島一三が校訂したものである。「玉里文庫目録」にも同じ写本が見られるので、同時に二部作成され、本家と玉里家に所蔵されたものであろう。これらの写本の原本の鹿児島県庁本が、現在の県立図書館本であることは、校訂作業中に確認できた。なお、東京大学史料編纂所の島津家史料中には、大隅国だけの写本一冊があるが、この写本も作成年代や写筆者名はない。

本書の編者は田尻種甫であるが、種甫についても詳細は伝わらない。薩摩藩の田尻性は「諸家大概」によると、筑後国田尻城主の系統と、伊作田尻村の系統とがあることがわかる。「三州御治世要覧」の「御家格御政治向」には、小番式番与に田尻八郎右衛門跡があり、代々小番の家柄であったことがわかる。同書の「当時御役人」には、安永七年当時の郡奉行に田尻弥八郎がおり、これより前、宝暦ごろの「島津家分限帳」に、代官の項に、「高四十三石、外二蔵米三十八俵」の田尻弥兵衛が見えるが、種甫との関係は一切不明である。さらに天保末年ごろの城下地図には、平之町・新屋敷・上町に三家の田尻家が見えるが、これも種甫との

関係は明らかでない。

田尻種甫がいつごろの人かもわからないが、本書の内容から検討してみよう。本書の構成は、各郡郷毎に、古城址・古塁・古陣跡・番所・神社・仏閣・港・浦・地名・村名の由来や領主の変遷などを述べたものである。そこに記された年代は、鎌倉時代から江戸時代の初期に関するものが多い。たとえば寺社については、神領高や寺社高が記されており、この石高を三国名勝図会と比較すると、名勝図会では石高が消えたり削減されたものが多い。これは享保十一（一七二六）と二年の内検に際して、薩摩藩では寺社高の引揚げが行われたからである。このことから、はじめは本書の成立は享保ごろかと考えていたが、元文四（一七三九）年の重富郷設立の記事もあり、さらに鹿児島県の津口番所には、安永五（一七七六）年三月建立、と記され、安永三年に発見された穆佐郷の古塚について、川上親敷が書いた「穆佐郷古塚記」も採録されている。もっとも年代に、本書では安永四年であるが、「旧記雑録」では同六年の違いがある。以上のことから、数は少ないが、安永年間までの記事が集められているので、田尻種甫は安永年間までは生存し、本書もそのころ編さんされたと考えてよいのではなかろうか。

本書が安永ごろに成立したとすれば、すでに島津重豪の開化策が始まっており、本史料集27の「明赫記」の解題にも書いたように、藩の修史事業とは別に、民間人によって書かれた史書があった。得能通昭の「西藩野史」、清水盛富の「三州御治世要覧」、平田正表の「明赫記」があり、史書に類する記録として、橋口兼珍の「三曉庵主談話」、清水盛香の「盛香集」、伊集院兼喜の

『薩陽落穂集』、毛利正直の『大石兵六夢物語』、徳田邑興の『島津家御旧制軍法巻鈔』などがある。いずれも江戸時代の初期を理想とするもので、本書もこれら一連の書と考えたい。

その理由として、各郷の古城址の項では、合戦の経過が記されており、月日まで克明に記されていることも本書の特色であるが、合戦の焦点は島津忠良・貴久・義久・義弘・家久の勝利にあてられており、編著の目的が、これら近世島津家の武将たちの功績をたたえるためであったのではないかと考えられる。だからこそ、享保ごろまでの史料を多く集め、以後は最小限にとどめたのである。

郷によっては簡単なところもあるが、全藩域にわたって、個人でこれだけの史料を集めるのは大変な苦勞であったに違いない。種甫は編さんの経緯を書き残していないが、種甫自身が記録所に勤務したか、あるいは友人に寺社奉行などが居たのではなからうか。寺社についての特色は、再興棟札などをよく利用していることである。

近世後期に書かれた文章の多くは、書き下し文で書かれているので読みやすいが、本書には近世前期の史料が多いので少し読みにくい。たとえば、会敵戦白坂は、敵に会い白坂に戦うと読むように、簡単な文章でも漢文体になっているので注意したい。

最後に、薩摩藩の地誌に関する史料としては、天保十四年に編さんされた『三国名勝図会』があり、地域史研究の基礎的な史料になっている。本書は分量的にははるかに及ばないが、両書に共通する部分もあるが、大部分は享保以前の史料であるから、近世前期の本藩の地誌を知るにはよい史料といえよう。

例 言

一、本史料集には、鹿児島県立図書館所蔵『本藩地理拾遺集・中下』（大隅国・日向国諸県郡含琉球国）を収載した。

二、原稿作成に際しては、底本として県立図書館本を使用し、同書を写本した島津家編輯所旧蔵本（現東京大学史料編纂所蔵、黎明館史料課史料編さん室所蔵コピー本）によって校訂した。

三、印刷に際しては、割注などできるだけ底本の体裁に従ったが、一部字数を整えたところがある。

四、印刷に際しては、底本によって新・旧字体を使いわけた。また変体仮名はすべて通用体の平がなに変更した。但し、江・者・茂・而については、活字を小さくして漢字を用いた。

五、片カナのルビは底本に附されたものである。

六、本文には適宜、読点・句点・並列点などを附した。

七、不明か所・難読か所は□で示した。

八、本史料集の作成にあたり、黎明館史料編さん室より史料閲覧の便宜を与えられた。

九、本史料集の原稿作成は、甲南高校の宮下満郎が担当した。

〔注〕 上巻と中下巻の校訂者がかわったので、校訂の方法に若干の違いが出たことをお詫びします。上巻の桐野利彦

先生は、底本を忠実に書写され、三国名勝図会と比較して校訂されたが、中下巻の筆者は、島津家編輯所本の校訂を参考にして、明らかな誤りは本文中で訂正した。なお、本書の底本はきわめて写本の質が悪いので、誤記・宛字は判読されるよう希望します。

目次

大隅国

菱刈郡	馬越	1
	曾木	2
	本城	3
	湯之尾	4
大隅郡	桜島	5
	牛根	7
	垂水	8
	大根占	10
	小根占	11
	佐多	12
	田代	13
	内之浦	14
肝属郡	高山	15
	始良	16
	大始良	17
	鹿屋	18
	花岡	19
	串良	19

高隈	21
百引	21
新城	22
熊毛郡	
種子島	23
馭誤郡	
屋久島	25
始羅郡	
加治木	26
帖佐	28
重富	30
溝辺	32
山田	33
溝生	33
糟吟郡	
市成	34
恒吉	35
末吉	36
曾於郡	
財部	40
福山	40
敷根	41
国分	42
清水	46
桑原郡	

諸縣郡

勝岡	山之口	高城	穆佐	倉岡	高岡	綾	野尻	高崎	高原	須木	小林	飯野	加久藤	馬関田	古田
.....															
71	71	69	68	67	66	65	64	64	62	62	60	57	56	55	55

日向国

吉松	栗野	横川	日当山	踊
.....				
51	50	50	49	48

琉球国

都之城	松山	志布志	大崎	国
.....				
72	74	74	82	85

本藩地理拾遺集

中卷（大隅国）

大隅國八郡

菱刈郡 馬越 曾木 本城 湯之尾
大隅郡 櫻島 牛根 垂水 大根占 小根占 佐多 田代
内之浦
肝屬郡 高山 始良 大始良 鹿屋 花岡 串良 高隈 百引
新城
熊毛郡 種子島
敷謨郡 屋久島
始羅郡 加治木 帖佐 重富 溝邊 山田 蒲生
嚙喰郡 市成 恒吉 末吉 曾於郡 財部 福山 敷根 國分
清水
桑原郡 踊 日當山 横川 栗野 吉松

本藩地理拾遺集

大隅國統日本紀曰、和銅六年四月乙未、割日向國肝環、増於大隅始羅四郡、始ヲ置大隅、武備志、阿思求、
一大隅國守護代阿蘇谷大炊介久時久經公御代也、同公之六男之久時迄此職止、
周廻一百拾五里十一町四十間四尺

高十七萬八百三拾三斛四斗五升壹合

一自府城南、至大隅國大隅郡佐多鄉限、海路程三千四里余、
一本田貞親入道靜觀賜大隅國守護職云々、
一大隅國前代為内裡領之時、隅州政所・守護所・調所三職、預差下之者之裔之有之由、高間二被及候、末略、

朱右近衛前久公御下國之時、調所前讃岐守沙弥隨意、天正四年

丙子六月廿六日、伊勢因幡之御申次を以罷出、御土器被下、
廣榮之二字八月半被下候次第、書付之内ニ有、栗野衆申調所
勘左衛門文書、○大隅に任はてゝのほらんとしけるを、大貳
さたことまたしととめけれハ、よめる、

津寺在墓

住の江のまつらんとのゝなけきつゝ心つくしにとしをふるかな

菱刈郡

馬越 惣廻七里三拾五町貳拾九間、

一康安元年九月廿六日之記ニ、隅州馬越藤四郎行家居住ス、自家
系図忠宗公御代、

一馬越太郎重隆或隆氏重妙嫡子也、得殿親重妙之護改氏、馬越之子
孫世々專此地、

一菱刈民部太夫氏重元隆、依軍忠當代再領此地、但應永之頃、
一城、山城也、

永祿十年丁卯十一月廿四日、太守父子自將莞栗野・踊・湯尾、
忠平白飯野直ニ到馬越、義久主揚於旗諏訪山、貴久主到德邊、
使忠平為前鋒攻馬越城、辻大藏左衛門・有馬軍弥左衛門・久留
軍兵衛欲越城壁、城主井手籠駿河守・同兵部少輔・同弥四郎進
出、三子即打殺、諸軍怒之而欲登城、忠平主又提三尺劍殺敵有
數、財部傳内左衛門尉・東郷兵部少輔・阿多掃部介・宮原右京
亮・新納刑部太輔・伊集院美作守・有馬奉膳兵衛尉、各進テ壞
城壁、井手籠父子獲及士卒貳百余人首、我兵村田右衛門尉其外
有名戦死士多振威四方、於是此夜曾木・平良・湯之尾・羽月・

山野・平泉・青木・市山互攻、棄壘去ル、

一永禄十一年正月七日、大口・高城兵堂崎ニ出張ス、于時太守貴

久公當城ニ御座候故、義久公・忠平公馳向玉ふ、貴久公制し玉

へとも、若武者等先を争而懸合、一戦ニ利を失引退、川上左近

將監久朗三才飛田渡瀬ニ返合戦、忠平公も自身相働、久朗深手

を負、故危難を遁れ玉ふ、伊集院久治も戦功有り、久朗事二月

三日死ス、於鹿、

一其年之孟蘭盆、貴久公渡御川上久辰宅、御発句、

とけし名よ入ての後も秋の月

右、古城記并自家文書ニ有、

一黒坂寺 吉詳山妙蓮院 祈念所 真言宗大乗院末、

一長寿寺 萬松山 菩提所 臨濟宗正興寺末 高石石

一諏訪大明神 祠宮長谷川氏 祭神一座 建御名方主命、

一吉詳山妙蓮院 黒坂寺 大乗院末、

一萬松山 長寿寺 臨五山派 正興寺末、

一吉田若狭守朝清天文・比志島堅物範貞国貞之・寛永・菱刈半右衛

門重榮重秀、自家系図半右衛門重廣譜中、外記、

一重廣五歳喪父、是故叔父大膳亮隆秋為家継代矣、頃年一族又背

守護之命、党相良氏屢拔城略地、使一門他家之勇士守在々所々

之要害、馬越城者井手籠駿河守・同氏兵部少輔・同孫中助拌焉、

永禄十年、太守貴久公・義久公師軍欲拔馬越発栗野、忠平公出

飯野云々、永禄十二年己巳正月廿日、蒙和睦矣、叔父大膳亮隆

秋献大口之城、當家之木領杯拾か所被収公矣、此時鶴千代倚頼

于邪答院氏、蟄居、

一陣之尾 一諏訪之山 一華立尾、此地陣場并合戦場也、

菱刈郡

曾木 惣廻拾三里拾九丁三拾壹間半、

一古城記云、道鑑公御代元亨之頃、曾木彦太郎直茂領之、菱刈氏之

庶流也、

一曾木三郎重茂得父重妙之護領也、世禄記、

一相良・菱刈・入来院・邪答院・東郷凶徒等合策、永禄戊辰三月

廿三日、攻曾木城主、其地者（説）筑前守也、佐多常陸守久政又

蒙會曾木城、故凶徒等不得陷此城、刺党徒即打殺數十領引退、

相良・菱刈凶徒過馬越城下、発鉄炮到市山欲遂戦、則新納刑部

太輔忠元雖未傷、差我衆進出、吉田治部少輔・西田主馬允卒諸

軍、會敵戦白坂、其後敵引退、

一天党ケ尾秀吉公此所御陣之儀者、此所之大河洪水也、其節歳久公ら録

天正十五年午五月下旬、秀吉公通路之時、天党ケ尾ニ陣し玉ふ、

秀吉公泰平寺発馬有之、平佐・山崎・宮之城等巡見有、新納武

藏守大口太守公之御下知ニテ、此御陣ニ参拜謁、秀吉公忠元之

忠勇を感じ、長刀并道服を給ハる、其夜當地を発し肥後地ニ趣

く、于時忠元、羽月之内園田迄往馬を扣、大駕之通行を待、秀

吉公見之、使騎馬之士徴之、忠元下馬大駕之傍ニ蹲踞ス、其

時自ら持玉ふ団扇に一柄を賜る、夫ハ殿下ハ平和泉之上場を過

て、肥後ニ入玉ふと云々、古城記之説、

一長野城薩州伊佐郡邪答院之内今属、

邪答院新兵衛尉洪谷之・守之、永禄十一年五月廿五日攻之、比志

島宮内少輔・同彦四郎振勇氣欲登城郭、鎌田尾張守政年亦同挑

戦、于時邪答院代突出、交刀鎗大奮戦、我兵仲俊坊・貴島源五

郎・税所宮内少輔・深野五六・村原新介・同左衛門五郎・上床

源之助・加治屋右衛門尉・岩下主殿助・尾上五郎・肝付權助加治
木之等戰死、又者露勇威之際、寄々得勝利城陷也、

一諏訪大明神

棟札、永祿十年丁卯七月吉日、大檀那原重豐、大願主渋谷長門
守藤原重周、當地頭久留木千代太郎丸、

一金山 在長野

寛永廿年癸未、以大老命停山堀也、

寛永十一年庚辰、有好事者、二月十二日遊此地、領潤邊旅、穿

彼流則得砂金二百兩、得金八内山與右衛門尉也、示大老、六月

廿五日、阿部對馬守重秋召伊勢兵部少輔貞昌、流穿二窺之云々、

奉其命穿之遂而得砂金、故同十六年辛巳八月廿八日、献砂金九

百八拾九兩余、翌年壬午正月十四日、賜金山於光久、北郷佐渡

守同金山宰也、

宗廟、祭米三升五合

一惠瀬大明神 祠司長谷川氏、祭神不詳、

一西瀬山 無量壽院、觀音寺、真大乘院末、

一谷陰山 廣徳寺 師岡派大慈寺末、開山法燈國師

一忠昌公御代、菱刈左兵衛佐重時、當代再領此地、

一永祿十二年己巳八月廿六日、太守義久公以御證判為本領之故、

菱刈靄千代拝領也、

一長野城

元弘之旧記ニ、渋谷千代重丸領分那答院太郎丸名長野宿と云、

道鑑公被圍此城合戰有、敵方渋谷石見權守重棟・同弥四郎重春

・東内三郎・西岡弥二郎等也、

一滝、此水落て出干臺川、終ニ入滄海、深底不知何尋、

菱刈郡

本城 惣廻拾貳里九町貳拾六間、

一天正之比、菱刈半右衛門領之、旧記ニ有リ、

一城 太郎山ノ城ト云傳フ、

大手口北に有、水の手口南ニ有リ、東西同斷、巖之切岸に今城
之跡等顕然たり、

上井日記

一天正二年甲戌十月五日、此日菱刈本城より使兩人江被仰出候、

上原長州・拙者御使申候、於護所申出候、如此臺、菱刈之事

俾多候条、可被絶家義ニ、国衆を崩候而者如何之由、御一言迄

ニ而、今之孫三郎殿那答院へ御座候つるを召被出候而、如常時

菱刈家本城へ御残候、然ニ、頃日野心之世間風傳候、実不実ハ

無御存知、如此世間申候ハ、一定菱刈家為被成間敷候間、何

方へも仕合之處ニ可被成御縁易之由也、彼兩使者被申事に、蒙

仰候条々、尤之子細と、罷歸り、一々ニ可被申聞せ由也、とあ

り、

一藤原姓菱刈氏者、大織冠鎌足十七世、宇治左人臣頼長三男、左

中将隆長之男、三位中将隆之三男重妙近十判官也、家傳云、重妙

初登叡山薙髮、後奉得白川帝之綸言還俗、且拜戴綸言、賜隅州

菱刈兩院七百余町也、牛屎太郎、古昔曰菱刈兩院、太郎ハ隅州菱刈

郡内也、而謂菱刈兩院と本御説而不改候、且又、建久三年頼朝

公再賜兩院安堵之御下文、故同四年十二月本ノマヤ、弟彦四郎

師重下向菱刈而領知、于而始定號於菱刈、世々傳領之而、為履

弟師重領同郡入山而号入山、子孫不詳、

宗廟、祭米三升五合

一諏訪大明神 祠司小倉土佐

高岩石

一露上山

一太良山

一現王山

一城山

一檜橋女家集之内

湯之尾

菱刈郡

耳露寺 真大乗院末

曹源寺 禪飯野長谷寺末

正覚院 時宗 相州藤沢山末

大林寺 時宗 相州藤沢山末

統日本紀、孝謙天皇天平勝宝七年五月丁丑、大隅國菱刈村ノ浪浮九百三十余人言、欲建郡家、詳、

忽廻五里廿六間、

一城山、通路拾間余東二有、

大隅・薩摩のなかに、ひしかりのはいま近く、といふこ

とをよみしに、

春の駒をうちいて、ミレはあさこひし

かりのハ今は近くなりけり

又同したひを

たかゝひといへはいつくとみちとひし

かりのはいまはちかくならずや

一御霊大明神 祠宮田上氏

祭神一座、崇鎌倉権五郎景政靈、○旧記曰、大隅国鎮守御霊三

十八社大明神、正平二年、湯田村紫尾降と云々、湯田村謂何處

歟不詳、

一藥醫山 吉祥寺 蓮臺院 真大乗院末

一河福山 高源寺 禪僧昌寺末

一文祿四年乙未之秋、有三洲諸家所領交替之台命、以故、入来院

又六重時^{十四}目も亦去旧領入来院て移此地、是所替、国老伊集院

右衛門太夫忠棟入道幸侃之奸謀也、以後慶長十八年癸丑、入来

院伯耆守重國^{十五}代目ニ安堵本領、

一三郎坊相印重妙、後白河帝令大膳太夫成忠卿、為勅使蒙 叡遣

俗、且拜戴院宣、賜大隅國菱刈兩院^{牛屎・太良兩院、在七百余町、}

重妙賜菱刈院時、幼年之故未能下向者、厥后建久四年癸丑、右

大將頼朝公再賜安堵之御下文、故十二月日、弟彦四郎師重得出

京都、翌年甲寅正月十二日、下着菱刈郡太郎院、知行於本城・

馬越・湯之尾・曾木^{太良院}・大口・羽月・平和泉・山野

等、重妙以菱刈為家号、弟師重領入山、故号入山彦四郎師重、

自家系圖五代彦太郎重信譜中

一千茲、小松之裔有土佐守平宗夷者、以平族故、頼朝公之預重妙

重妙介抱之采地廿町^{羽月ノ内十町、平和泉ノ内五町、山野ノ内五町}、為食邑附與宗夷、從

重妙到隆平四代之内、宗夷其子正蘇・正忠・正濟・正久相統旗

下守節義、重信幼稚之時、忘重妙之高、忍波一族樹党口重信、

襲取大口、掠領山野・平和泉等、因茲、重信及一族催多勢攻城

戰野、倣先例、請援兵於相良氏、兼初入大口手裏與相良氏焉、

故ニ相良氏卒軍馳越於牛屎院、与重信俱攻夷波党、備不為不変、

別備与大口於相良氏、從是無束記去ト云々、

一白国初菱刈氏領也、

一文祿年中、入来院家轉旧領入来院、賜此地、到慶長年中、又本

領安堵、

一横川院三十九五段十大^{本ノママ}

菱刈郡百卅八町一段

郡本賜大樹殿御下文、三郎房相印知行之、建久八年六月惣田教注

進案之内ニアリ、

右、宮内社家隅元治右衛門文書、

大隅郡

櫻島又曰向島 惣廻九里三拾壹、四拾五間、武備志ニ向島、

一 旧記云、養老元年丁巳、隅州向嶋涌出、

一 旧記云、文明八年丙申九月十二日自午刻、隅州向島方白砂七日降也、其内十九日未刻方莫ノ晴ニ成迄と有、

一 旧記云、和銅元年、一夜出現、謂神跡月読尊、旧記云、文明八年丙申九月十二日、向之嶋燃出悉焼、都合田死不知数、島之東西地涌出式里計、連本島、

一 福昌寺年代記云、文明八年九月十一日、向島神火飛火、焼人畜舎屋不数知、砂灰降近国、大地震動山西南涌、周廻二里計、

一 旧記云、文明三年九月十二日、向島野尻村神火燃、同七年八月十五日、向島黒髪村神火焼燃と云々、

一 旧記ニ云、寛永十九年三月七日晚、向嶋神火起、

一 古日記云、文明八年申九月十二日、向島神火燃出、人畜舎屋焼亡不数知、沙灰降近国、又島東西地涌出三里計、連本嶋、五日已前大地震と云々、

一 元正天皇靈龜二年、白山権現顯座、四年大隅国向島涌出、

一 続日本紀、廢帝御宇、天平宝字八年十二月、是月西方ニ有聲、似雷非雷、時常大隅・薩摩兩國界、炯雲晦冥奔電去来、七日後乃天晴、於鹿兒島信余村之海、沙石自聚化成三島、炎氣露見、有如治鑄之為、形勢相連、望似西阿之屋、為嶋被埋者、民家六十二区、口八十余人、是年兵卑ス、仍米石千錢云々、

一 同紀ノ称徳帝紀云、己丑天平神護二年六月大隅國ノ神造新島震動シテ不

息、以故民多流亡ス、仍加賑恤云々、

本朝文粹十二 櫻島忠信落書 按古事記、有忠信赴大隅任、然不記何代、

陽春詔勅多哀榮 半盡開眉半叩頭 官爵專非功課賞

公私寄致贖勞求 除書文待貢書致 直物遲期獻物収

故大閣賢婦衆望 左丞相倭損皇猷 忽逢魚水恩波濁

共見駿河感淚流 雖向和風櫻獨冷 被露暖露橋先抽

近臣貧欲世間歎 外吏沈淪天下愁 費用金銀千萬兩

沾沾山海十二州

此落書諷ニ刺其時政、然未レ知ニ件々指ニ何等事ニ也、彼因ニ

此落書一任ニ大隅守、則不遇ニ其譴ニ而蒙微録乎、抑亦左ニ降

西海窮遠之地ニ乎

一元龜三年之比、肝付・根占等之凶徒、為破野尻藤幡者在、然處

ニ、家久を初數輩、赤水村・當村迄警衛有、故凶徒退去ス、

拾遺和歌集

大隅守さくら嶋の忠信かくに、侍りける時、郡司かしらし
ろきおきな侍りけるをめし、罪をかかんかへんとしハへり
ける時、おきなよみ侍りける、

老はて、雪の山をはいたけとしもと見るにそ身ハひへにける

此歌ハ宇治拾遺集にもあり、是には、おひ有とかしらの雪

はつもる、ともあり、又清輔か與義抄序云、大隅守櫻嶋忠

信、郡司の翁をめしかんかふる時、よみてゆるさるゝ歌と

あり、

一天正十三年、向島地頭川上源三郎と有 見上村日記、

櫻島をみてよめる 細川玄旨法印

はれ残る霞の中の山松や雲を根さしに誰かうへけむ

いにしへに誰かいひけんさくら鳴つくしの海にふしをうつして

遊行尊通 此歌浄光明寺塔司漢信院ニ有、

島をふし愛を清見の寺にして洲崎のかたハ三保の松原

櫻嶋にて 義久公御歌に

春にこそ櫻島ともいひつらめ時雨るころハ紅葉ならまし
名にめてゝ其ハ冬ながら櫻島花にもまかふ雪のあけほの

家久公四季戀の御詠歌のうち春

いつの間に春立来ぬと名にめてゝ花の梢もさくら島哉

藤野村

元龜三年九月比、中務太輔家久為肝付凶徒を防、構陣列此所、

然処、去不来、

諸家大概記云、慶長六年夏四月、義弘公當村へ藤崎氏所江
御蟄居被成而月、関ヶ原の罪を謝し玉ふと有之候、子孫于今藤
崎正兵衛桜島郷士ニ而候、藤崎氏元祖者、氏久公御代之比、藤
崎佐渡守橘廣妹と申者、薩州へ参候と見得申候、夫方直ニ桜島
ニ罷居候哉とアリ、

白濱村

文祿元年七月十八日、於瀧ヶ水歳久公御生害之時、船を白濱へ

着給ふ、

一御飯屋 在横山村

福昌寺十一世天祐和尚より、島之絶頂ニ塔婆を真鍮ニ而打せ、
御先祖様御為、又々衆生菩提之為とて建立、其内ニ忠昌公殉死
之奈良原助八、法名関月道三と有之、御家ニ殉死者助八初二而
候、忠昌公御自害之節、福昌寺路傍楠木之下ニ而、廿五歳ニ而
殉死なり、

桂庵詩集

島陰漁唱云

十九日、歴ニ七里原ニ、南方有一嶋、曰、向島、文明丙申秋火起
焚島、烟雲簇也、塵灰散也、青茅之地忽變ニ白沙堆、滄桑之
嘆不レ克レ蔑于懷、作是詩、

列火曾燒一島来 桑田碧海惣休猜
去年潤底草深處 七里平原沙作堆

七里原次玉洞翁韻

山似崑崙最上巔 風吹猛火起雲烟

平岡七里沙如雪 草樹何愁白髮前

雲龍寺 在小池村

大旦那 光久公御子外記殿、於赤水御死去被成、御牌石塔有之、
右御懷者、當所脇村之上民与申傳候、尤御懷之石塔位牌も有之、
右為御佛物料、御買地ニ而、薩州古田内廿石余有之、所郷士高
之内ニ相込而有之由、

一善福寺 在赤水村 一海雲寺 在野尻村 一寶光寺 在有村

一大源寺 在瀬戸村

一有村之海濱出温泉、称觀音湯、尤宜也、海邊諸所堀之、皆有温
泉、

但安永八年亥十月朔日午下刻、桜島燃出、地震鳴動如雷、夫

有村潰民家悉破、于今温泉有藤野村、

一瀬戸卷大明神 社人野神田沢右衛門、

一西寿寺 武村之内堀田村有 萬年山 禪福昌寺末 綱久公御位牌有、

一釣江寺 西道村ニあり、

一上井日記云、天正十三年四月廿七日、此日向嶋御馬追ニ御渡海
候、御供之由被仰候間、其分ニも先於御棧敷、御三献如常、御

盃川上源五郎殿地頭ニ而候間、祝言ニ頂戴、從夫馳而御牧立ニ
籠候節、野狼類出候間、中絶候を、去年以來又々被召立候間、
馬數漸拾六疋、取駒老疋、印指一疋ニ而候、立出ニ若衆杯名乗
候而被出候、御一覽也とあり、
榮松御安時集云

大永三年癸未二月作三首

島陰見桜花

山名櫻嶋海之涯 万朶如雲又似霞 日暮春風吹作雪
此華亦称不香花
春入島陰含夕輝 櫻華開香興何微 明朝風島亦何恨
片々改觀成雪飛

海中櫻嶋古猶今 二月花開入句吟 此夜官遊類不貴

明朝風雨作寒林
宗廟、祭米三斗五升
一五社大明神 社司国生五郎左衛門

所祭 彦火々出見尊 一説火閼降尊 イニ月夜見尊

一弁財天宮 社司国生式部

一摩利支天 社司国生式部

一海岸山 金剛院 潮音寺 真大乗院末

寛永十五年之春、太守家久公逝去ニ付、路湯延陀丸貞徳翁

ういたみのこと葉の歌に、

桜島ありとしき氣は西のうみにやりて手向る浪のはなかな

大隅郡

牛根 惣廻十里拾貳町三十八間、

一道鑑公御代曆應之比、牛根兵衛五郎道綱莫称院成長入道 圓也家臣預之敷、

此道綱後屬阿久根家有軍功、

一 永正之比、池袋氏領之、○天文年中、本田紀伊守薰親領之、後
以牛根与肝付、○天正二年、肝属兼統臣安樂備前守牛根城終下
城、○天正八年、鎌田尾張守政年領と、田布旋二宮文書ニ有、

○同年、三侯御陣之時分地頭ニ鎌田尾張守政年、○新納家九代
近江守忠時領之、

一 建部大明神 棟札云、天文十五年、當城主本田薰親、

一 諸家大概云、天文之頃、紀氏平山之庶流ニ小川尾張守武明と申
人、牛根之地頭被下候とあり、

古城記云

一 牛根城 玄佐自記 自家系圖ニ秋初ハ伊地知縫殿介季見也、

肝付省鈞裔族安樂備前守を籠置、よつて天正元年十二月十四日
々、太守之御舍弟右馬頭殿御大将ニ而、数千騎平常岡に張陣
攻之、翌二年正月三日、肝付勢催多勢、高隈之太山を越、牛根
之城之前茶園ケ尾今垂水に陣す、我兵見之、彼所ニ為陳ハ則味
方知無利故、島津圖書頭忠長・川上上野助久倍下知して是を
攻、敵大ニ恐而引兵を於高隈山、狼狽而退散下大隈、右輒此陣
を攻取、即此陣ニ人衆を御置、其比落書、弓モウシ子モヲレ欠
トソヒキカヘテ甲ヲ拔ハヤカテ安樂、同十八日方平常之御人数、
牛根濱之方取詰、從茶園ケ尾方内城之切岸を堀破、作道事夜白
三日也、城内方投石衝走、或茅ニ火を付堀底ニ擲、雖防矢方便、
十九日之夜、城主備前守降参、翌日弟彦八郎を質ニ出ス、故ニ
蒙免許下城、則新納武藏守男刑部大輔城内へ被召籠、肝付之番
衆ハ及日暮下大隈へ被送遣、淨光明寺其他三人、御
使として此砌到肝付、廿二日武藏守
モ城内江入而、廿七日城いわるあり、從昔日雖為謀計・智略・

孫吳之術、堀峯但之岸作道類古今無双、是偏ニ新納武藏守以下知、逆瀬川奉膳兵衛尉・木村筑前守・久留半五右衛門尉調達之編、天道之恵叶神慮之擁護もの歟、此日太守義久公ハ早崎ヲ御歸陣也、

一二川 元龜三年二月廿九日
遭兵卒令亂入此地、

當時ハ鎌田尾張守政事一所拝受之地之故ニ、此地寺を立、号喜翁院、諸家大概云、建部姓池袋氏ハ、古來牛根二川之邊を領申候哉と存候、邊田七人之内ニ而候、上代ハ差而見得不申、忠昌公・忠治公御代杯ハ繁申候様ニ有之候、子孫何者とも不相知候、朝鮮征伐記云、備前中納言秀家、慶長五年九月十五日関ヶ原合戦敗統之後、當国へ落來、二年當地ニ有、義久公訴給候以後、八丈島江遠島、長船十右衛門・山田伴助供奉、其後伴助ハ再薩州へ下り為御家臣、御譜云、備前中納言秀家休復來當国、居隅州邊地、慶長八年六月趣京都、桂太郎兵衛忠詮為警衛、

二川之内

一飯牟禮坂百引越之坂也

聖業記、氏久公出良之敵ニ而、山傳之百引のことく御越被成、イ、ノ牟礼山をメシノ御馬、轡も首せぬ様ニとて、紙ニて御包せられ、二河ニ御下りト而、其時山の案内者仕候者ニ、御判令

ニ有、夫より鹿兒島ニ御渡海とアリ、
宗祭米喜七升五合

一居世神大明神 祭神不詳 社官山口氏

一高岩石

一江南山 東光寺 華藏院 真大乘院末

一喜翁院 喜翁院權垂水心翁寺末鎌田尾張守政年入道寛柄建立之、
政年法名喜翁勝觀庵主、天正十一年未七月八日死、

大隅郡 往古真光坊舜清、從豊前国下向領垂水、新納家九代近江守忠勝領之、

垂水 忽廻十一里九町四十九間

一本城主 伊地知氏居城十二丁海濱・終原相餘、應永十九年三月、為御田緒地賜之、伊地知縫殿介季豐之代、

天文十四年、周防重武ニ給垂水、

一垂水 石井源右衛門平義仍領六町中ノ候、

一田上 梶原氏領六町濱平銀口、文祿年間敷根中務太輔領之、

一高城

一下之城 伊地知実興降後期下城、應永十九年壬辰八月鎌物伊地知縫殿介季豐五ヶ所總今号垂水、

一天文十四年、いち、周防守重武拜領垂水、

一慶長二年、給種子島嶋津右馬頭次久、同四年、轉種子島於此地以來世々領之、

一金藏院 いち、太郎左衛門尉重輔建立、

一福寿寺 在本城、いちち太郎左衛門尉重豐建立

一小濱 牛根境

一海濱

河上大明神 額ニ河頭大明神と有、棟札、永正六年二月、大旦那平重周、

一中俣今宮大明神 棟札、大旦那平朝臣義仍、大願主平義詰、

本垂水城ハ、當麓より北廿町計有て、濱辺ニ而候、城大手ハ南、河田駿河守移地頭之節建立之、釈迦堂大手之邊ニ有、右馬頭征

久種子嶋より繰易ニ而、當所へ大手之下ニ屋敷構候テ居住ニ而

候處相悞、久信代、只今之屋鋪へ移居候垂水之号を以、所之忽

名ニ為被仰付由、後ニ大山有之候得とも、古來片城ニ為被構事

ハ無之、屋敷構迄也、尤山と屋敷之間、土屋敷有之候、

一垂水城、明應年間、石井源左衛門平義仍守之、征久事、文祿二

年五月十一日、常城与高麗へ出陣、忠仍事、慶長九年十二月十五日、下大隅ニ被移候、

一田上壘、文祿四年八月、敷根中務少輔頼賀去敷根下大隅田上ニ移る。

城ハ當麓ヲ東廿町計ニ有、古平梶原氏居城、石井建立之諏訪宮より十町余り東ニテモ、文祿四年、一所衆繰易之節、敷根中務少輔頼賀敷根下當城ニ移ル、慶長四年、當城ハ高限ニ移ル、此地モ征久居城ニ用意候得共、余り迎土故垂水を居城ニ定ム、地頭吉田若狹守願清若狹守願清之、此地山本ノマと成り、屋敷ハ道法十九丁、

本城・高城・田上三城、皆近辺ニ而候、當麓方東ニ而モ、本城ハ高城ハ十町許、田上城モ高城・本城方十町余モ差渡有之候得共、間ニ山有之故、廻候得ハ少近候、尤山を隔候故、兩城方見得不申候、三城三方ニ有り、高城ハ東、本城ハ西、田上ハ北ニ而候、本城ハ伊地知氏代々居城、天正年間、伊地知重興代ニ致降參公領と成、本城大手北向、城内偏移城之腰、福寿寺と申いち、氏菩提所あり、城下ハ皆土屋敷ニ而有之たる由候、

一高城 勝久公御代、肥後大和守盛治入道慈清、或四面共守之、其後賜伊集院竹山、城下守之

高城ハ肥後氏居城之由、古老咄に申傳候、北東ハ川流達、大手ハ西之方ニ而モ、四方堅固之城ニ而候、新城迄ハ領したるか、新城黒石田権現棟札、文明八年四月廿一日、大旦那肥後平盛高と有、棟札歳霜を経古ひ候而、言文字不詳、高城方新城ハ近邊、併海手を通候得ハ間遠く、古来ハ如此垂水も余多ニ而領し候得共、其後いち、氏都而領し候節、天正年間、没収ニ而候、

一平崎陣

小濱城方北谷越ニ而、□四五丁も可有之牛根境之高岡也、サツクハ平の上之、當城御内与申下田御座候、本營ニ而候半と考候、早崎ハ別而高キ所也、當分ハ畠地ニ而候、廣キ所ニ而モ、天正元年七月廿三日夜半、肝付勢山背之經路より寄来、火を山背ニ舉急襲来攻戰之故、味方難儀之由、山続なとハ無之、此邊ニ早崎に相並ふ高キ岡なし、如何様陣の後より攻登りたる歟、

古城記云

島津中務太輔家久在陣、家久手を碎働キ、敵を追拂玉ふ、喜入小四郎久統手を負、平田美濃守常宗・同左馬介・木脇刑部左衛門等戰功拔群也、異、本城主いち、美濃守、其外之兵發行候と有、

玄佐日記

七月廿四日之夜、早崎之御陣後山之方敵異忍、廿五日之朝、西之口へ多人数被差寄、箭軍鉄炮互ニなり候時節、從御陣半分忍上陣屋放火、已危處ニ、御舍弟中務太輔殿不及是非、御腰物拔持、敵數百人之中へ切入、余多打伏、御身ニも切疵掛り疵不知其數、往拜深御手ハハケ所也、然處、喜入小四郎馳続、兩所手負為高名、爰に中書御披官纔一兩人、或者打死、或ハ數ヶ所之手負、御敵相落遁其難給、此時當陣ニ而年を越し給ふ、

年の矢のはや咲そむか梅か香に千里のこしす春ハ来ニけり

一小濱城 被早崎、早崎御陣有故也、元龜三年比、城代伊地知美濃守守之、海濱之上三方ハ千仞之斷巖、大手ハ西之方濱之上ニ而、東一方野頸

ニ統申候、城土居六重有之、元龜三年九月廿七日、守護方之人數北之方少尾筋有之処より攻登候由、古老も中傳候、尤野頸ニも城戸有之、伊知、周防介重興口肝付之党とベ同氏美濃守を籠置、依元龜三年九月廿六日、左衛門督歳久御大將ニ而攻玉ふ、

先桜島ヲ瀬戸を渡、早崎ニ着陣ス、頓而小濱を攻落被号早崎陣、其後諸所へ凶徒に對し迫合有而、此處ニ而越年也、太守義久公も指宿まで御出陣、肥後平次郎・桑波田源太郎・川野玄蕃戰死、伊集院源助久治有戰功、

一 崎山城

肥後彦太郎種顯・同舍弟種久引合故攻落、海澤名之内崎山与申村之上ニ有、近代城構之跡ハ無之、高キ岡ニ而候、
文和四年六月五日、肥後彦太郎種顯・同弟彦次郎種久等令同心、畠山匠作直頭引入凶徒於城内之旨、氏久公不移時尅馳向彼城、同十二日攻落云々、

一下城、天正二年より伊地知重興拜領せ住之、濱平ニあり、南之方廿町計ニ有之、経佐界也、指而要害之跡も無之候得共、東野顯之方ハ少堀切あり、内に畠地アリ、字ニ堀切与唱候へハ、古城ハ別儀無之候、

心翁寺末寺
一臨海庵 在海澤

鹿屋 上名村 持切 皆共朱書直札
大始良 野里村 持切 末吉南之郷村
知覽瀬々村
かのや 終原村 加久藤川北村

右旧領之故、前々之通垂水江被召付被下度旨、享保九年辰正月廿四日申上候處、同年八月十四日、願之通御操易被仰付、終原被召付之旨、種子島彈正様被仰渡候、

崇
一上之宮手貴大明神 社司谷口氏 祭神不詳、
高四拾九石余 領主高津備前殿惣高之内々寄附
一如意山 法智寺 成就院 大乘院末
高白三拾石式斗九升 禪清水橋殿寺末
一宝嚴山 心翁寺
一浦二 海澤 終原

一古堡 市来村之内ニ在、海
川田駿河守義朗垂水地頭之時住也、當分
山也、

大隅郡

大根占 惣廻拾三里貳拾九丁四拾五間、

上古、根占三郎成威守之、建久之比、根占掃部次郎藤原之義明

守之、但盛威ハ此以後歟、祢寝氏世々領シ置、天正年中石見守、

祭米武石六斗七升五合 宗廟川上大明神 祭神不詳 社司永江氏

一旗山人明神 麓方東寺里半計ニ有、在池田村、
普賢明小根占園林寺末 高壹石 米壹斗四升五合
一竜樹山 天松院 麓方東八丁計ニ有、觀音

一説法山 慈海院 報恩寺

一浦 三之濱、麓之手前ニ而候、人居五六十間、人數三百人計、

鳥井戸、河上大明神之下人居、拾間計、

一辻之堂 御上様御領之節御建立之由候、只今御物修甫ニ而候、祢占家臣鳥濱氏降守當城、由緒不詳

一高城

此城當所之本城ニ而候、祢寝領之時も居城ニ取構之事ハ無之由、出城ニ而捨之由候、麓方ハ北ニ而候、海辺へ差出候嶮岨之岡ニ而、東之方ニ堀切有之、御通路筋より十五丁、

嶋津御庄、大隅方祢寝院大祢寝内瀬筒村地頭職、為給分所宛行也、任先例可領知、并先知行代地事、關所次第可致其沙汰之状如件、

永享五年五月十九日

好久

富山殿
妙覺律師高清男
一祢寝氏、元祖沙弥行曲清重、依北条遠江守時政執奏將軍家頼家公、給御下文下向當地、其以前義利重延領之、

一古塁、御通路筋ヲ、由緒不詳、
道法五十間、

一高麗入、琉球入之節、此處方御旗竿御用為有之云々、

一神川城、麓方西、神川村ニ在、南方海邊通路筋、伊地知縫殿介

季豊入道久安歟初自家系図ニ在、大手口城門之跡有海邊、惣

高岸有、以上、神川城、河野氏
通村記之也

大隅郡

小根占 惣廻拾五里四町貳拾壹間、

地頭、蒲生備中、市来八左衛門、其外略ス、

一祢寝氏世々領之、

一慶長五六年之比、地頭代官川上右京、

一鬼丸大明神、慶長十三年戊申十月四日、地頭代官相良勘解由

祢寝右近太夫重長崇之由、毎歳三月十六日祭祀有之、麓方東之

方半里計有、

一國見城、南小根占北之山、是ハ大祢占也、

大正二年三月下旬、奉命喜入家父子三人守常城、本城辺ニ而

御合戦有之節、當城方死し戦死也、

一塩入掙、瀬脇之上ニ有リ、

傳祢寝家本城也、由緒不詳、御假屋方道法三十一町、

一南谷城、麓方南之方半里許、有川南村之内、風呂城共云、此城

祢寝氏代々居城之由候、

高岩石、イニ寶
一寶山 光寿院 東漸寺 大乗院末

天台宗
一極楽寺

一清淨山 園林寺

越前興福寺末、禪宗山城山五拾門之内通幻派下不見
派御飯屋方十三丁

祢占左馬介清平菩提所、清平事應永廿四年九月上旬、於薩州河
邊松尾城戦死、因茲當寺を此所ニ建立ス、法号明山安清大禪定
門、

竜伯公御詠歌 正文園林寺ニ有、

橋山 慶長十五年十月廿二日

いにしへ重長といひし人の、温州の橋山とて植そたてをかれし
所に行て、これを詠す、

法印龍伯

時ならぬ冬まで残る木の花ハこれまこと世のやとの橘

右場所ハ、川北村庄屋役所有之地ニ而、元文之比までハ、蜜柑

古株残有之候へとも、只今古株も無之候、

龍伯公御光儀之時

松杉の立ならひたる古寺ハ分入て見心そ見けれ 龍伯

尋入ておく山寺ハ岩木さへ心あるへきけしき成けり 忠通

杉むしの木間の紅葉冬かけてけふを待ける法の場にも 久正

冬枯を如何なる松のみとりこそ妙なる春のしるし成けれ 如有

凍るより岩根の水の音絶て猶静なるおくの山寺 住房

古寺の砌の松の風触れてさながら法の声を聞哉 重位

おほけなき袖を備えて古寺の玉しく庭と成にける哉 住持閑道

宗廟、祭米五斗貳升五合
一諏訪大明神 祭神健御名方主命

鰐口銘曰、奉施入隅州弥寝院諏訪大明神御寶殿、大旦主建部忠

清并伊氏女十方族主、願主快順、鑄土吉次、

一愛川、川南名之内南谷城之西之方ニ而候、

天正二年、古戦場ニ而候、○天文元年午十月廿六日、勝久公祢

寝ニ御越、翌年四月廿四日御帰府、

古城記云

一称寝、称寝氏世々傳領之地也、右近大夫重長、肝付ニ同意シテ
太守ニ叛といへとも、天正元年春方肝付か党を離て、太守ニ降
参、依之、肝付勢寄来り、横尾ニ而合戦、利を得る也、○天正
二年三月下旬、肝付省釣斎・伊地知重興・伊東義祐引合寄来、
小根占本城麓ニ乱入して、村市を放火ス、太守喜入季久を將と
して、川辺之人数を差添為加勢被遣、岩屋口ニ而相戦、敵数百
人を打、故ニ敵退散、季久弟図書・忠通・小四郎・久統戦死也、
称寝右近將監重長背守護方事當、依之、宝持院薩州鹿兒島為使僧、
以八木越後守昌信副之、到令調和儀、宝持院先到小称占入東漸
寺、昌信蔵出身祖應乘夜供入東漸寺近、住持即述和儀之事告之、
称占重長こと則召出、昌信学中ニ臨而談密儀、重長云、吾背太
守雖非本意、又与兼統相隔則滅亡在近、是故不能降、昌信公足
下息年幾計りや、某告公可婚約、重長改色欣然有之喜色、遂滞
留数日、昌信弥述和儀、重長云、然則可奉仕云々、依之、昌信
揚帆帰り、告件調儀於公、依之、新納武蔵守忠元・上原長門守
尚近・伊集院下野守久倍以議定、称寝重長遂降公旗下、于時天
正元年癸酉三月、薩隅之兵を進而、令人称寝城、

大隅郡

佐多 惣廻武拾壹里四間、

一建久之比、佐多新太夫高清守之、其後伊与房領之歟、
一應永之比、称寝右馬助清平領之、
一初佐多太郎存盛住于茲、桓武天皇之流四位少將資盛之孫子、兵

庫頭国盛之男野上田伊与房時盛、源氏ニ推れ當国ニ下り、隅州
之領主となる、男建部姓氏を建部と称する事者、當国江下向之
時、近江国建部大明神ニ詣而深被祈しハ、何方ニ而も身をしの
ひ、一國一郷之主ともならハ、其所ニ社を崇め奉るへしと云、
其人承久兵乱宇治川ニ而打死、夫々佐多之家断絶、其跡を木場
某令知行と旧記見へたり、其後御一族より佐多之領主と成、天
正年間迄佐多伯耆守領之、

一建仁三年七月三日、將軍家前左衛門督頼家及北条遠江守副狀ニ
而、称寝五ヶ所を給而令下向、

一建治二年之文書ニ、佐多十丁御家人郡司清純下有、

一嶋津三郎左衛門尉忠光初師、賜隅州佐多初号佐多、文和二年五

月十一日、尊氏公賜知覽院佐多家三代豊後守氏義代 永徳元年
六月一日、称占氏掠取佐多城、田代伯耆守親久移知覽城、五代

豊後守忠遊一代住佐多城、寛正三年四月十一日死、五十四、
高高石 真大乗院末 伊佐敷村 曹官林寺末

一蓬萊山 醫王院 来迎寺 一曹源寺 在同所、藥王山

一雲勝庵 伊佐 有西方 一清源寺 在馬籠村

一文殊院 在同村 一西方寺 在大泊浦

真御崎權現の別當 一極樂寺 在同村

一延命院 在邊塚村より海部八丁計ノ所、

一稻半禮大明神 在伊佐敷官行

一川口三栗 但今郡村之内 永享七年六月九日、好久方田代肥前守江為本
祭米二五升 領之間宛行と有之、

一崇廟御崎六所權現 社司山名佐渡

一伊座敷又次郎領地を馬人とも二廿貫文ニ買取、受取称寝家ニ有
之由、称寝越右衛門古跡見ニ佐多へ差越候節、本田半右衛門殿
へ咄候由亥四月十四日直ニ帖也、

一邊津賀村之内ニ城と唱来候所有、拵之城と唱来由、ヘツカ行司
前田六郎左衛門カタル、東之方高キ岡之下ニ城山有り、祢寝氏
之居城之由申傳候、三四十年前迄ハ城門之跡抔ニ為有之由、
今ハ樹木茂リ不相知候、

一同所ニ鬼丸大明神之祠有、濱ガ東廿町余ニ有、
當所之崇廟
一十三所大明神 在邊塚村、濱ガ八丁計ニアリ、祭神忍熊皇子、
一邊塚村、應永之比、祢寝右馬介清平領之、

一御崎六所権現 所祭事代主命・表津少童命・中津少童命・底津
少童命本殿ニ鎮座、穂祠旧殿、

濱之宮、大己貴命、右出雲国秋鹿郡佐田之神社同御崎ニ勧請ス、
昔瀬崎ニ鎮座、其後穂崎ニ鎮座有り、中山王国征伐之時、樺山
安藝守久高再興と云々、

一古堡 在馬籠村、往古号野頸城、

傳稱、祢寝重長格護之城にて、城代薬丸長門守守之ト云々、

大隅郡

田代 忽廻拾壹里三拾町拾三間、

一國初、田代次郎兼盛住于茲、伊与房時盛二男也、佐多盛
義なり、

一應永之比、祢寝氏右馬助
清平領之、祢寝領之時、地頭野間武藏守、

一建治二年之文書ニ、御家人七郎助友トアリ、

一若宮大明神棟札、大旦那建部頼清、大願主建部頼安、文明十七
年十一月六日、

一三所権現棟札、永祿八年十月、大旦那建部重長、
曹圓林寺末、高四石
一宝光寺 妙淨山

○元龜三年三日棟札云、大旦那祢寝重長、

○御南月庭妙秋大姉御牌有、
祭米、七升五合
一崇廟北尾六所権現 祭神不詳、社司迫田四郎右衛門

産物

一硯石、黒めの石ニ而候、

一華瀬、麓ガ南拾丁計ニ有、

拾町計之一流の滑ニ而候、水波如花、河号花瀬、

しけりおふ藤や躑躅の華瀬川咲比いかに水の白波小森氏政方
入道一山

嶋津御庄大隅方田代村一圓、并佐多内川口三栗事、依為本領所
宛行也、早任先例不可有相違候、領知状如件、

永享七年六月九日
(前) 好久

田代肥後守殿

高石 一如意山 滅勝寺 宝寿院 真大乗院末

一古堡、号勝在麓村、曲輪三ツ堀切等于今存せり、平山城也、

一本城原田城、傳稱、祢寝家格護之畢也、由緒不詳、

一上田壘、御飯屋ガ一里、應永五年比、田代宗次郎久助已来、

小手取 代々領之、同十七年三月、從元久公為久助本領地拝領

之、元龜三年之比、祢寝重長領地ニ而、重長守護方へ降伏之後

為公領、

一本瀬之川上五六丁之所、鍋淵とて四重ニ落瀧有、兩岸樹木茂リ
て絶景也、

一右鍋淵ガ四五丁川上、鶴戸之岩屋有、廣サ十四五間、深サ十間
計、前ニ瀧落て洩アリ、瀧之上七八間ノナメリニテ、又瀧アリ、

兩岸ソハタチ、蕨トシテ物スマキ所也、此岸上地方之宮アリ、

肝付郡 式千三百廿石七斗九升七合、大隅之内内之浦、文祿四年忠棟ニ給す、

一肝付河内守兼統入道省鈞死去、永祿九年丙寅、永養寺焼香、墓大慈寺門外ニアリ、

一天文・永祿之比、河内守兼統・左馬頭良兼領、世々肝付家領之、到天正年間、北郷時久亦領之、爾後伊集院忠棟亦暫領之、文祿四年、御檢地之上云々、八万石之内也、大正四年方守護領ニ相成候、
一肝付一郡、對伊集院右衛門大夫忠棟入道賜之と、文祿四年從秀吉公惟新様江御朱印有之、

内浦 始高山之内 惣廻貳拾五里貳丁拾七間

一高屋山上陵、彦火々出見尊、無陵戸、是則神代三陵之一員也、北方村ニ有、旧名小串村と云、

一彦火々出見尊崩日向国高屋山ノ上陵、祭米三斗五升
一崇廟高屋十二所大明神、毎年九月九日祭礼、流鏑馬アリ、陵を指て国見嶽と云、

但社司宮地山城

所斎祭 彦火々出見尊

神代卷一書曰、初火穢明時生兒火明命、次火炎盛時生兒火進命、又曰火酢芹命、次避火炎時生兒火折彦火火出見尊、凡此三子火不能害、及母亦無所少損、時以竹刀截其兒臍、其所棄竹刀終成竹林、故号彼地曰竹屋、時神吾田鹿茸津姫以下定田、号曰狹田、以其田稻釀天甜酒嘗之、又用淳浪田稻為飯嘗之、

一兼良公神代卷纂疏曰、竹屋ハ地之名、在日向国歟、

一神代講述云、高屋山陵ハ今大隅国肝属郡鷹やの郷也と云、

一古老傳云、當社ハ往昔在山上曰国見陵、其峯去麓三里、斷崑統ニして輒不能登嶺、故中古已來勸請于是地、号高屋大明神、是則彦火火出見尊之降跡、神孫紹運之靈也、孰力不仰崇哉、

一天文五年十一月十一日上梁、又大檀那兼統、一棟札云、永正二年六月一日、大檀那伴兼久、

一天正十八年二月廿七日棟札、鳥井建立、大旦那北郷左衛門時久入道一雲并忠虎、

一岸良 正平十一年四月廿八日、從氏久公比志嶋彦太郎範平ニ賜

此地、與本云、内之浦内、明應四年二月二日、新外城ニ立、其後又内之浦一所ニ成候、明曆四月十四日、地頭伊東肥前、

一寛永十六年卯六月廿七日分外城ニ、至同廿年末七月まで、或

明曆三年酉九月十八日共、兩説難決、地頭東郷藤兵衛と有、一貞享二年高辻帳頭書ニ、内之浦・岸良、只今被為分候得共、古

来高山之内ニ而候間、高山郷と御書仕候と有、然者貞享之比迄者岸良分外城ニ而候、

一諸家大概云、岸良氏ハ古来岸良を領し、是も岸良之弁済使ニ而候、元久公より被下候御証判なと所持申候、代々肝付家ニ致隋

身、其後昵近ニ為罷成と見得申候、岸良藏之丞其孫ニ而候、

一津口番所、白他国之商船所聚要津也

高岩石

一貴福山 高陸院 感應寺 一乘院末

高岩石

一將軍山 長泉寺 臨關山派大慈寺末

一旧記ニ、寺社御前附分条下、同寄郡内地人拝領分、肝付郡百卅町二段三丈一、入道殿拝領、貞和二年五月、

一小林山 玄忠寺 開山運譽上人、浄土宗不斷光院末 文祿二年開基、

依朝鮮御祈願運管建寺云々、

肝屬郡

高山 惣廻廿里八間

一肝付河内守兼久事、文明十五年二月廿五日、十五才ニ而落於高山城而、同年九月廿三日、再入郡肝付郡云々、

一天文七年戌正月廿六日、肝付氏領之、肝付氏落城之後、文祿年中より伊集院忠棟領之、其後為公領、

一肝付領之時分、地頭葉丸出雲守兼持、

一文明十九年三月廿六日、兼久住城高山為沒落、

一加世田城 地頭飯屋方三拾町有、東南大河有、西田地ニ而堤所々ニ有、号本城、飯屋方本城大手口迄壹里拾式丁三拾間有、

肝付氏元祖伴兼貞、初而長元元年九月九日、賜肝付院肝付を領し、其子孫左馬頭義兼代守護領と成、其身左馬兼口世々之住城也、十一代兼忠嫡子左衛門佐因兼、文明六年甲午三月朔日、弟為周防守兼連本城沒落、後同十三年八月十五日、於帖佐總禪寺裏自害ス、兼連之子三郎四郎河内守兼久、同十九年三月廿六日再為沒落、于時十五才也、

一肝付河内守義兼落退之後、大野正左衛門殿御地頭、其後村田雅樂介殿居地頭ニ而彼為移候、河内守一学退後、御南様從忠良公為拝領之儀、故從御南様日新院へ御寄附也、

右、高山より申出候永祿十年之差出ニ有、

一瑞光寺福昌寺末 開山春嚴祖不和尚永廿一年甲午十月廿八日昇ス、

應永九年壬午二月廿八日開基、施主天決儀公大禪定門家之人々、

瑞光寺へ竜伯様御參禪御法話、其後當寺へ被下御書、

先年依京儀寺領悉致勘落、瑞光寺事も久無祿之義候間、少分之地附之幸、右目録在別帳、將又於門派大切意話相傳之儀、近來感悅之至候也、恐々謹言、

長月廿五日

瑞光寺

龍伯

一高山新留村之内柳井谷門高式拾石御寄附、慶長十九年七月廿五日、御家老三原諸右衛門尉重種・伊勢兵部少輔貞昌・比志嶋紀伊守國貞・町田勝兵衛尉久幸目錄有、

一波見村之内ニ帝釋寺と唱候所有、古帝釈寺之寺蹟なるへし、于今其邊基石坏有之候、

一加勢田城、建武之乱ニ度々御攻之、同三年五月六日より六月十日迄、毎度合戦有之、其中水手夜打之時、川を渡抽戦功と、郡山弥太郎頼平・祢寝弥二郎建部清種等か日安ニ有、城主肝屬八郎兼重・同彦太郎兼隆也、此時軍奉行本田左衛門久兼、水手軍奉行中条左衛門人道祐心と云々、味方大将嶋津六郎資久・大隅助三郎忠国也、○永和三年八月三日より忠昌公攻之給、新納忠武依後詰公利を失、十月十二日御退去、城主肝付兼久・其子兼興也、

祭米五斗式升五合
一崇廟四拾九ヶ所大明神 在新留村、社宮守屋氏

祭神三座、天照皇大神、左天手力雄神、右萬幡姫神、寛永二年

七月十三日、吉田兼苗方四拾九ヶ所大明神之御神号之箱を納社

内、神主大中臣重持、永正・天文・天正・元和・慶安・寛文・

元禄年間等之棟札多し、

一高拾石
一摩尼山 五大院 高崇寺 真一乘院末

一神護山 昌林寺 臨関山派大慈寺末 開山剛中和尚 大滋寺 二代

一羽見村

正平十一年四月廿八日、從氏久公比志嶋彦太郎範平ニ賜此地、城山之御寄口
一新正八幡宮、仁禮頼仲靄ヶ岡八幡を勧請ス、應永廿九年壬寅建

陣場と申傳ふ、不詳、

肝付郡 古昔始良平太夫良間領之、元暦・文治之比人也、

始良 惣廻拾六丁拾壹間、

天文之比守護領之、
一肝付氏世々領之、應永之比右馬介清平領之、又幸侃暫領之、

一吾平山上陵

彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊、無陵戸、

一鷗戸窟、在上名村、神代三陵一員也、

窟廣サ百二十坪、中央ニ有社檀、社檀之下井如有、其深不知幾尋、又社檀之脇ニ有塚、

神代卷曰、天之彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊崩於西州之宮、因葬日向國吾平山陵、

傳稱、此窟則葺不合尊之陵也、吾平・始良割目中央之社檀を号鶴戸権現、日州鶴戸者葺不合尊降誕之地也、後葺不合尊ヲ奉崇号鶴戸権現、當窟之社ニ又通、日州之神名曰鶴戸権現、三代三陵之一員也、

一文明十二年八月廿七日棟札、大旦那河内守伴朝臣沙弥兼忠、

一末次城、山城、上使方御用ニ付所方申出候、

廟堂靈場也
一合粒寺、正長二年己酉創立、開山仲翁福昌三代久山、妙榮大姉仲翁公御母堂

御牌并御妹御牌有、

右開山福昌寺三代仲翁和尚、開山所之故、御母堂妙榮大姉并御妹之御牌御建被成候、和尚於當寺遷化之由、又者伊集院之内於

德重村遷化之由、而說申傳候、

祭米三斗五升
一宗廟正若宮八幡宮、長久四年未建立と旧記ニ有、祠官坂本氏、

祭神四座、玉依姫・應神天皇・神功皇后・仁德天皇、

立、

城山内

一五社大明神 肝付家之靈を崇む、永祿四年辛酉建立、

右同
一熊野三所大権現、永祿元年、河内守兼統建立之棟札有、

一西之宮大明神、前田村、弘治二年丙辰吉造宮、大願主河内守兼統棟札有也、

一宇内大明神、野崎村、永祿十年造宮、伴氏良兼之棟札有、

一黒丸大明神、宮下村、肝付家靈を崇、文永二年壬戌造立、檢見崎幡广守棟札有、

一諏方大明神、西方、天文廿二年丑建立、伴氏良兼代、願主伊勢守兼清と有、

一三所大明神、前田村、沢永山、天正五年乙丑造立、伴氏兼紀と有、
一川上五社大明神、後田村、片野由緒不相知、天文廿三年甲戌造立、

伴氏良兼代造宮、願主檢見崎常陸介兼業と棟札有、

一六所権現、波見村牟礼山、文祿五年丙申造立棟札有、由緒不詳、

一諏訪大明神、右同村牟礼山之内磯之山、右同年造立棟札有り、

一乙子大明神、右同村邊候、由来不詳、忠棟氏天正拾六年戊子造立棟札有、

一天神社、新留村上市、永享十三年造立、願主伴氏兼持と棟札有、

一二所大明神、後田村、井戸神大明神社地之内、天文年中勸請、永祿十一年戊辰造立、伴兼清代也、

一歳之神、右同村、

一古城、新留村四拾九所大明神之上、

肝付家之持城也、弓張城之名付、麓明屋方三四町計、

一古城、野崎村之内和田ニ有、

一柳井谷之上、本城々西北之方谷也、谷越五六十間有、忠昌公御

高三十六石
一摩尼山 下手院 幸田寺 真大乘院本
高十二石
一宝陀山 含粒寺 福昌寺末 但御佛龕米三石六斗
一清地山 玉泉寺 臨下野羽次泉道寺末寺玄翁派

肝屬郡

大始良 惣廻拾式里七町五拾五間

應永之比、祢寢右馬助清平領之、氏久公御在城なるへし、

一國初祢寢小太郎義明鎮之、祢占又号富山、後天文十五年丙午二
二日^{イニハ}兼統領之、肝付氏領之、榆井賴仲攻取之、康安之初、氏
久公攻取之為居城、後移志布志、又咲隈拾三年御在城ニ而、後
又御在城、於此地御逝去也、

此御逝去之所御系図ニなし、可糺と、此条種甫按ニ不審也、
文祿・永祿之比、肝付河内守兼統・同左馬頭良兼領之、

一元久公御在城、後移鹿兒島清水城、

一山之藥師棟札、永正五年十二月、大旦那兼重、

一岩戸大明神^{祭礼}不知、永祿二年棟札、願主鳥越刑部左衛門藤原岩吉、

一南村歲實大明神、慶長十一年十月棟札、且越鎌田又七郎政次と
あり、當村之地頭か又者領主歟、

一新八幡宮、内城方南之方三四丁計可有之、地頭高と、棟札、太

旦主建部兼重并伴氏女、大旦那建部重就とあり、年号不見、

一元久公御誕生之地也、其跡ニ氏久公右八幡宮御建立被遊候、神
躰金之鏡ニ氏久と有之、

御系譜
一氏久公、嘉曆三年戊辰誕生、母大友因幡守親時入道道徳女也、

被補大隅国守護職在城薩州鹿兒島、後移大始良、又移日州志布
志、

右同
一元久公、貞治二年癸卯誕生大始良、母伊集院長門守忠国入道道
忍女、

聖榮自記、元久御誕生所大祢寢院大始良、時内城氏神岩殿八幡、
御袋伊集院大隅守息女と有、

一西俣城、應永之比、祢寢清平領之、天文元年十二月廿八日、肝
付氏責取、

天正元年、内城同時ニ落去候、三月十八日、太守肝付与此地ニ
戰玉ふ^在西、^保村、^村肝付家方御手裏ニ入、時久豊公方祢寢氏ニ賜之、
又牧山名も忠国公より賜之、

一氏久公御責取、本田信濃守重親ニ被下候、

一聖榮自記ニ、本田重親ニ西俣七十五丁給、御傍ニ有と有之、
一末次城、釐小路方右之方、内城方概西之方へ當中候、

右、末次氏住城也、氏久公御代、末次六郎入道守之、

一氏久公當城御責取、山田加賀守忠経ヲ被召置候、

一内城、當城者榆井賴仲居城ニ而、後氏久公御在城也、通路筋方
釐小路假屋之方へ通る左也、

一凶徒肝付八郎兼重之弟肝付五郎九郎致居住候處、同所濱田・横
山・宍目・大始良四ヶ村之長、氏久公へ内通仕候儀五郎九郎聞
付、横山城を責候、濱田氏ハ逐戰死、宍目氏ハ漸遁出候而、路
邊之林内へ隠居、五郎九郎勝軍ニ而致油斷帰候處を、宍目某、

五郎九郎を馬々下へ切落打取候、

一氏久公大始良城御攻落被成候、次ニ同所西末次御責落被成候、

此時當所市場ニ而御合戦有之候、右市場ハ當士小路之上東二三

町余ト畠ニ而御座候、古米町屋を市場と唱申候、

一天正十六年、奉尊命、堀孫右衛門尉某者於日州福島移、大始良

城警衛四年也、自家系図ニ有、

祭米吉升五合、

一宗廟岩戸大明神 杜官黒木氏

一迫林山 宝勝院 照山寺 真大乗院末

一瑞雲山 龍翔寺 臨関山流大慈寺末

開山玉山和尚

氏久公御夫婦并御姫様御石塔有、

一茶臼城、西俣村庄や役所方南方、

一古戦場、麓小路并内城方東之方、

一本田か城、右同村庄や役所之上、

一志々目村、忠国公御代、志々目藤藏領之、

一西俣城、天正元年癸酉二月十日、欲討肝付兼統之凶徒、義久公

者在薩州指宿城而、遠々進薩隅二州之軍勢祢寝郷、議謀而後、

十四日 公之兵進而到于肝付之封疆、于時春雨無晴候間、故不

得戦、高州浦鹿屋之内多得漁父之船、同十八日衆兵進而到西俣

村處、凶徒出向拒之、右馬頭征久從隅州兵進其勢如疾風、嶋津

図書頭忠長ハ從薩州南方之軍、川上上野守信久・樺山兵部大輔

規久・上原長門守尚近・肝付彈正忠兼寛・野村兵部少輔・鎌田

外記等大力戦以破、故敵破軍而多得之、明はや祢寝重長在我陣

中揚凱歌、既而重長詣指宿謁公、又從公候鹿兒島遊細言ヲ給者
朝日也、

肝属郡

鹿屋 惣廻拾壹里貳拾壹町五拾八間、

一應永之比、祢寝清平領之、

一久経公之御代、津野四郎兵衛尉鹿野屋院地頭と有、如何様、忠

久公御下向之時も津野氏領之歟、其後肝付家五代五太郎兼石之

二男宗兼得父譲、領鹿野や院并濟使、以鹿や為鹿号世々領地頭、

四代孫鹿屋周防介忠兼入道玄兼ハ、元久公之執事也、應永七年

之正月從元久公拜領、其後享禄三年癸子五月三日、肝付河内守

兼興領之、子孫及省釣領之、到天正年中、伊集院右衛門太夫忠

棟入道肝属一郡を給り領之、後ニ嶋津相模守忠仍領之、文禄四

年十二月廿七日、忠仍移當城居、寛永年中外城ニ有、

一終原村、今属垂水、長享三年伊地知虎太郎領之也、

白貫大明神、鏡銘曰、應永三十六年六月一日、大旦那伴氏沙弥

玄兼、

一應永卅五年十一月十九、権現棟札、大旦那沙弥玄兼、大願主伴

兼言、

鹿屋院之内垣見八町分之事、為料所宛行也、

永享七年十二月五日 陸奥守

祢寝出羽守殿

鹿屋院之内下之名下村并分、當中村池上名并分、田上名為本領上者、地頭領家職、一曲所宛行也、

應永七年正月廿五日 元久公御判

鹿屋周防守殿

宗祭米二斗五升

一狩長大明神 祭神不詳、

一豐岳山 兼岡寺 醫王院 真大末

一池上山 安養寺 禪清水楞嚴寺末

一高洲、應永之比、祢占右馬助清平領之、

一天正之比、十五世祢寢右近太夫重長、依軍功天正之初賜當院、

一笠野原重細工人、朝鮮人住居比所、薩州伊集院郷苗代川村、

朝鮮人數十家被召移候而、焼物細工いたし候、

一千鶴城、麓町并假屋邊方大概西之方ニ當る、

一古城、右麓町方大始良之方、邊路之側也、古城場と申傳候、

一下村・池上・田上村等為本領地、應永七年正月廿五日、從元久

公鹿屋周防守忠兼へ拜領也、

肝属郡

華岡 惣廻四里三拾四町四拾壹間、

一宝永四年亥九月廿六日、御高五千石、周防守殿御拜領、其後享

保九年六月十五日、繼豐公以御判物、給一所之地高五拾石、

大隅國大始良之内木谷村者、為其方知行之處、今度一所之地

申付候条、至子孫全可領知之状如件、

享保九年六月十五日 御花押

島津周防守殿

此節大始良之内木谷村壹所之地被仰付候、然者、漸々家来ど

も召移、一所之動も可有之候處、木谷村少高之間、右木谷村江差添、大始良野里村高之内八百石方限を以、周防守殿持高二繰易被仰付、山野迄も木谷之内へ被召付候条、此段可被成御承知候、以上、

辰六月十五日

伊集院藏人

正一位 一當座大明神 社司鶴田能登、祭神一座 瓊々杵尊

高三石領持高之内 寄附、一龍池山 明王院 山崎寺 真一末

一惠海山 禪定寺 菩提所鹿屋安養寺隔庵

一享保十年乙巳七月廿六日、新外城二成、

一觀應三年甲午二月廿四日、祢寢右馬介清有発軍、楡井遠江守頼

仲与堂所備拔於下大隅木谷城、花岡ハ元来大始良之内ニ而、号

木谷村、享保九年六月十五日、從繼豐公嶋津周防久傳賜一所之

地、

肝属郡

串良 惣廻拾三里拾壹丁四拾貳間、

一正平年間、田代二郎領之、其後北原又八郎兼延領之、

一大永四年甲申十二月三日を領之と、兼興譜ニ有、

忠貞公御譜 一肝付氏領之、到天正年中、

一古城之記云、忠久公御下向之時分ハ、北原家領地歟、北原又太

イニ兼延 郎延兼と云者アリ、應永之比歟、

一元久公御代、串良院主平田右馬介重宗と旧記ニ有、其後ハ北原

氏ハ日州真幸院郡司となつて、代々知行也、

一正中之比、串良院地頭津野四郎兵衛尉と有、

一明應四年四月十五日、豊後守忠朝襲取候、此時陣之尾ニ而合戦

有之、

一諏訪大明神、棟札、文龜三年七月廿六日、大檀那忠朝・地頭忠康、

一永正五年正月廿五日、平田右馬介串良城去渡于新納肝付、

一明應年間、平田右馬介兼宗領知之處ニ、忠昌公命ニ依て、嶋津豊後守忠朝攻取之、大永四年九月廿九日、肝付河内守忠興攻取領之、天文・永祿之比、専肝付氏領之、

一天正六年、嶋津図書忠長去鹿籠移此地、同拾六年、去此地移宮之城、

一文和三年、氏久公が常地地頭を田代七郎後三肥道清ニ給、其後正平十二年、串良院半分被宛行御文書有、其後肥前守以父統而令領之、

一陣之尾

明應四年、古戦場也、

聖泉

一串良も頼長計取るや、串良之内北原と云在處ニ比丘尼所アリ、一忠久公之御代ハ、北原又太郎延兼領之、元久公御代、平田右馬助重宗串良之城岩廣、明應四年四月十五日、豊後守忠朝襲取之、永正五年正月廿五日、平田右馬助串良城去渡新納肝付、肝付家到天正年中領之、天正六年、嶋津図書忠長自鹿屋此地ニ移、同十六年ニ到領之、文祿五年が伊集院幸侃領之、

九百拾五石九斗壹合

岩廣村

式百石

細山田之内

文祿四年、以御給地細川幽齋ニ賜之、三千石之内也、

慶長四年五月九日、朝鮮軍功ニよりて賜之、

一崇廟大宮大明神 祭神一座、月読尊 社宮宮地氏 建立年号不詳、

神領高式石八斗壹升貳合余

一井手神、青龍權現 三所権現

高三石八斗余有里村

一大塚山 醫王院 成願寺

天正之比改号ニ而、旧寺号高山寺、開山永傳法印、建立年間不

知、

一瑞雲山 安住寺 禪福山大安寺末 在岡崎村、

開山勝嚴祖薩禪師 此寺古ハ三峰山幸善寺ト云、

持明様 貫明様 琴月様御牌有、

一宝樹山 志福寺 時相勝沢山末、

一岩廣村 久豊公御代、串良城主ニ而當地居城也、左候而、勝久

公御没落之時被収公、平田右馬介重宗領之、

一十五社大明神、有里村ニ有、祭神追而可考、建立年間不詳、天文・元龜之比の棟札有、

一諏訪大明神 在岡崎村 祭神右同 建立年間不詳 古鑑宅兩社内ニ有、

一稻荷大明神 元龜元年庚午十一月六日、義久公御建棟札有、

一大塚大明神 新川西村 本社武藏国秩父権現・妙見大菩薩兩社

勸請也、

一船手、右同村、傳稱、肝付領分之節船手也と、唐人町之下之方

大川入口有之、此所今古市と云ふ、

一龜龜岩、在岡崎村 當城中丸ニ嶋津図書領忠長居住也、明應四年

乙卯四月十五日、嶋津豊後守忠朝奉忠昌公命責之、城主平田右

馬介兼宗乞降下城、則串良一円賜忠朝、故ニ使平山越後守忠康

叔父守之、永正十七年庚辰八月朔日、肝付河内守兼興省鈞以大

軍攻之、城代越後守邇久打出退散ス、大永三年癸未八月七日、

新納遠江守忠勝志布志合縣忠兼ニ、発大軍海陸共ニ塞通路、是

故ニ忠朝不得救此急難、同四年九月中旬、忠朝和睦として、以當城讓新納安千代忠常忠勝、忠勝救士卒之命、同月廿九日、再兼興攻之、城代島津六郎三郎忠吉忠朝以下之兵戰死ス、雖然、忠勝出援兵不救之故ニ忠朝甚憤、從是新納家与豊州家為仇讐之初也、

一 大塚大明神

右勸請ハ、本田次郎親經下向之時、依畠山重忠之命勸請与申傳、其後肝付家再興、慶安之比、嶋津図書頭再興申傳候、鎧壹両本田親經奉納と申傳有之候、

肝付郡

高隈 惣廻九里拾六町十一間、
但本の宗廟ハ申良之内

一 田代肥前守以久領之、法光寺建立と有、氏久公御代也、

一 天正年間、肝付没落之後、伊集院幸侃領之、

一 萬治四年十二月々寛文四年十二月迄、申良地頭伊集院十右衛門、此代外城二分ル、

一 享祿三年霜月、新納近江守忠勝領也、

一 永祿二年、肝付河内守兼統・同右馬頭良兼領知ス、

一 同九年、肝付家方河越丹後守平重実地頭ス、

一 大野伊賀守源加地頭歟、

一 慶長四年、下大隅田上イ幸頼方敷根中務太輔頼幸移居於此地、于時八月也、

一 池八龍王棟札、慶長三年二月、當日那二位法印細川幽齋、千八百八拾九石四斗五升、

一 文祿四年六月廿九日、太閤御朱印を以細川幽齋ニ賜之也、外岩廣村・細山田村合三千五石三斗五升三合之内也、雖到慶長四年

領之、朝鮮御軍功ニよりて、慶長四年正月九日、以感狀賜之五萬石之内也、

一 明曆三年酉九月十二日々寛文四年辰十二月迄、其以前申良相付

候、無地頭、仁禮民部左衛門、
祭米三斗五升

一 宗廟中津宮大明神 社司吉岡駿河 祭神不詳、

棟札云、大旦越伴家兼統、法名省鈞・同息男良兼并伊勢勤九殿、

當地頭川越丹後守平重實、永祿九年丙寅三月廿六日之棟札有、
高雲石

一 高雲寺 觀音院 淨聖寺 真一末
高雲石

一 法持山 法音寺 漣清水傍嚴寺末

肝属郡 平房昔加世田城、當郷有村名百引無郷名、

百引 惣廻八里三拾五丁五間、

一 文明・永正之比、藤原美作守忠常領之、

一 應永之頃、祢寝清平領之、

一 天文十一年壬寅二月々領ス、
永祿・天正・弘治
元龜之比 肝付兼統領之、

一 加世田城、本名、平房村之内、天文十七年二月三日々知行於平房村、

一 或記云、宮方肝付八郎兼重・同彦太郎兼隆當城ニ楯籠、建武三

年、貞久公被攻しと有、

一 當城者、久豊公御代文明年中、藤原美作守忠常開基城へ在番、

新納左馬介・宮里道隨、元龜年中肝付家方川越重忠・同名丹後

守入替在番、其後島津豊久・同左馬頭・又四郎・比志嶋紀伊守

・伊集院幸侃在番ス、
自系

一新納家七代近江守忠武、陷百引平房領之、

一 島津豊後守茂引平房領之、天正之比歟

一 礪山権左衛門久高ニ、竜伯公賜百引と系図ニ有、年号不詳、
一 平房八拾石、伊集院右衛門太夫ニ賜る、八万石之内也、
文祿四年六月廿九日、御檢地之上、以御朱印百引千七百五拾六
石五斗壹升八合、

一 石牟礼大明神 在平房村、傳稱、當社ハ伊勢天照大神宮と崇、

文明十七年乙巳十一月十八日上梁文曰、大檀那藤原美作守忠常
崇祭米壹千七百五合、

一 利大明神 社司石塚氏 祭神不詳、

高壹石

一 宝圓山

高壹石

一 慧日山

高壹石

一 德祐山

高壹石

一 善福寺

高壹石

一 善福寺

高壹石

一 善福寺

高壹石

一 善福寺

高壹石

一 善福寺

高壹石

一 善福寺

高壹石

一 善福寺

高壹石

一 善福寺

高壹石

一 善福寺

高壹石

一 善福寺

高壹石

一 善福寺

高壹石

一 善福寺

高壹石

一 善福寺

高壹石

一 善福寺

高壹石

一 善福寺

高壹石

一 善福寺

高壹石

一 善福寺

高壹石

一 善福寺

高壹石

一 善福寺

高壹石

一 善福寺

高壹石

一 善福寺

高壹石

肝属郡

新城 惣廻七里三拾貳間、

一 享祿三年霜月十六日、新城崇廟神冬大明神 社司郡棟札、大旦那
山内内棟札、

伊地知重武、

一 永祿六年、伊地知重興、

一文祿三年、伊集院右衛門太夫忠棟領、

一 慶長十五年、島津相模守忠仍領、

一 黒石田権現棟札云、大願主平盛高、文明八年四月廿一日、大旦那肥後藤内左衛門尉、

一天正二年十月十七日、此日奈良原狩野介殿承事ニ候、新城へ移候處、拙者を頼候つる間被仰下候、ふなまと申候而三反之堀屋御座候、是を被下候へ、それなくハ小島と申候、是も三反之處ニて候定也ともアリ、地頭鎌田出雲守圖書介なるべし、

一天正二年八月廿九日、此日鎌田圖書介と被申候、此度新城へ相越、役所配之上、三十ヶ所計餘ニ而候、猶々移衆被仰付候へと被申候と有、松桜此時方外城ニ為取立所ニ而ハ有間敷哉、

一 城山有之、濱方東ニ而候、此所ハ新城様被成御座候、其後寛文七年、島津又助忠清^{于時廿九日}私領ニ被給候、夫々世々為食邑也、

寛永十八年八月十五日、新城様御遠行、殉死畠山助兵衛、

一 久章母堂、義久公第二之御女、島津主右衛門彰久室ニて、新城被成御座、法名嗣月淨珊庵主淨珊寺殿、御在世之時ハ、俗ニ新城様与奉称候、

父嶋津大和久章、伏誅以後、賜亡父遺領、家嫡島津玄蕃頭忠記、為弟久章夫人者中納言家久公女、

一 淨珊寺 撐月山 麓方北三丁計ニ有之、

一 妙蓮寺 法華宗

一 宗廟神貫大明神 祭神不知、

一 此地、上古伊地知氏領地之内也、慶長四年、嶋津右馬頭以久賜垂水之時、此処も又同領内ニ而、島津守右衛門尉彰久之妻^{義久第二之相模守久信母堂、俗ニ者新城様、彰久子相模守久信之}御女、相模守久信母堂、俗ニ者新城様、彰久子相模守久信之ニ男大和守久章住之有、故久章正保二年乙酉十二月十一日被誅居

住于茲、其孫大和守久章領之、右故久章伏誅之後、總其後嗣收公此地、雖然、家嫡嶋津又助忠清、嶋津玄蕃頭忠紀為弟、賜故祖母之遺跡於忠清、寛文七年、嶋津玄妓久倍、忠清嫡子賜一所之地矣、

熊毛郡 淳和天皇大長元年、停益教合熊毛郡為一郡隸大隅國、上古多嶺或為多祢、本郡西南大隅海上大一島也、

種子島 惣領廿九里

一武備志日本考島名部云、種子嶋他尼、竹島他計、自山城羊馬到三島三、都而六十六ヶ国之名を嶋名之部ニ載し、同於日本図ニ種子島、

一淳和天皇天長以前者不接国郡、有能滿・益教ノ二郡如二島、自大長元年録大隅國ニ島右嶋ニベ、各立候也、

一統日本紀曰、天長五年六月丁酉、多祢島熊毛郡大領外從七位下安志佗等二人、賜多祢後国造姓、

一天武天皇十年壬八月丙戌、遣多祢嶋ヨリ使人、尊貢多祢國図、其国去京五千餘里、居筑紫南海中、切髮草裳粒、稻裳ニ豊ナリ、

一タヒ薙テ両収、金毛支子シカゴ、及種々海物等多シ、

一日本地理志其略曰、多祢島在海上、為大隅之附庸、

一統日本紀三卷、高野天皇宝龜三年八月庚戌、以從五位下中臣習宜朝臣阿曾麻呂為多祢島守、

一上古、高野入道・野間入道・熊毛入道在島シテ島主タリ、此時ハ鎌倉領之地頭大浦江某鎌倉ニアリ聴政務、其代官上妻氏在島して寄貢税、

一種子島氏元祖肥後守信基、太政大臣清盛公之二男安藝判官基盛子左馬助行盛之長男也、父行盛出都之時信基幼也、母懷之隱身

邊境遂避其難、而後蒙北郷遠江守時政之慈恩潛住鎌倉、停頓時政為養子号肥後守時信、時政以執奏賜種子島、是時種子島地頭大浦江氏也、時信有所思、乞請大浦江氏之藤氏并幕紋島甲之内、揚葉蝶、

因而以為家嘉例、故時信号信基二世、信哉三世、信貞四世、真時五世、時基六世、時充七世、賴時八世、清明九世、時長十世、幡時十一世、時氏十二世、忠時十三世、惠時十四世、時堯十五世、時次十六世、忠時十七世、久時十八世、信時十九世、

一左近太夫久時代、文祿四年六月廿九日、以御檢地轉旧領之三嶋島津右馬頭ニ、賜久時ニ知覽之地を玉ふ、慶長四年、再賜本領種子島、此時屋久島・惠良部島暫為借地、後終為公領、

一文祿四年六月、以御朱印島津右馬頭ニ玉ふ、五千式百六石四斗八升 大隅熊毛郡種子島十四ヶ村

山役川役此米 外百石永良部 十六拾六石壹斗四升合 十四ヶ村

類聚國史八十七則法部 老万石之内也 一廢帝天平宝字五年三月己酉、茅原王坐以刃難人賜姓龍白真人流

多祢嶋、男女六人復合相隨、茅原上者三品忍壁親王之孫從四位下山形王之男、天姓凶惡善遊酒肆、時與御使連麻呂轉統、忽發

怒刺殺屠、其後完所置胸上而贈之、及他罪伏明白、有司卷請其罪、帝以宗室之故、不忍鈞法除名配流、

一弘仁三年八月癸巳、流僧良勝於多祢島以与女同事也、一延曆廿二年八月辛卯、右京人正六位上長倉王配多祢、以言語不轉也、

一統日本記、聖武天皇神龜六年十一月丁丑、人唐大使從四位上多治比真人廣成等來着多祢嶋、

一右同廿六ノ卷、高野天皇天平神護元年正月戊戌、大宰大貳從四位上佐伯宿祢毛人坐逆党左遷多嶋嶋、

一文祿四年乙未秋三月、蒙家各所領之地有更替台命、久時轉種子・屋久・惠良部三島而拜領薩州知覽院、慶長四年六月、有久時本領安堵之命下給種子嶋、屋久・惠良部其外之諸島為御借地、然居代官承公用年久、久時卒、後慶長十七年夏、自鹿府為代官中村与左衛門下嶋為一島之判事、自此為公家之有矣、

一慶長元年、自知覽渡朝鮮、

一太守氏久公出師於肥之後州、合戰菊地肥後守武光、此時有七將、賴時亦其一將也、是期太刀戰而終、貞治五年丙午四月十六日、戰死於肥後州日之岡、此時代為島津家旗下歟、不詳、

一硫磺 竹島 黑嶋

播广守時長代、筑前博多船、自惡鬼納坂帆之時、來竹島籠浦繫纜時、暴風急吹逆浪為山、巖險欲崩非分之所、乃竟沒海底、一人亦不免死、是奉達太守貴聞之處、依倭者纔無故見沒收於硫磺黑嶋三嶋矣、

一左近將監備時二七島之内臥蛇・平二島給ふ、好久公證文有、

一左近將監時氏迄八律宗也、寛正六年、濃州沙門本能寺淨光院日良下着、種子嶋久正應仁年間、日良弘法華宗、時氏聞法談數座、於茲信心增進改宗門、三島種子・屋久・惠良部共始皈依法華、

一文明元年、時氏建立本源寺山号古以淨光院日良為開山、

一同七年、慈遠寺再興、

一長享九年十一月、本興寺日増上人下島、是洛陽本時氏謂令兩寺住持為改宗依達南本寺洛陽本興寺、時氏再□法□、

一久時代野久尾方移内城、号岩峯

法
一吉祥山本源寺 本願寺末 一本法寺 同 一妙泰寺 同 一蓮勝寺 同

一本成寺 同 一法淨寺 同 一妙久寺 同 一慈遠寺 同 一妙昌寺 同

一善福寺 同 一本善寺 同 一本內寺 同 一本妙寺 同

一妙泉寺 同 一妙久寺 同 一慈遠寺 同 一妙昌寺 同

一本隆寺 同 一本進寺 同 一遠妙寺 同 一滿德寺 同

一妙法寺 同 一本進寺 同 一大專寺 同 一隆興寺 同

一應永之比、称寝右馬介清平當地半分領、十代之家督也

一正平十八年二月十七日、指宿家文書二、指宿能登守忠勝・同弟左京亮忠元・同弟掃部介忠平兄弟三人江、親父彦次郎忠篤入道成榮之讓狀有、征西將軍官方令旨有之由相見得申候、

一種子島加駕守重時世十三末子左近太夫直時父子及不和合戰を挑、直時八根占方二与党、此節重時訴太守貴久公、依而新納伊勢守康久を大將二而被遣屋久島之城、重時自種子島逃來訴捧所領三島種子・屋久・惠良部、然とも不執之而本領令安堵、父子之降榻を止給ふ、故二属すか、

一天文十二年之秋、有南蛮南竟之船來着于種子島西村、時船客將來鉄炮矣、日域未有此兵器、種子島氏十三代加賀守惠時見其器之奇、而以為兵器之由也、故求之而学其術、更窮蓋奧得百発百中、功群臣拳学焉、只今鉄工習製之道傳布于世、自是倭朝用鉄炮始于此此島也、

一天文十二年癸卯八月廿五日、種子島西村之浦西南蛮船來着、于時西村之宰主織部丞と云者也、同廿七日己亥、入船於赤尾木之湊、船中大明之儒者五峯、牟良叔舍、喜利志佗孟太杯云者也、此時初而鉄炮式挺持來、藥和合之法家臣篠川小四郎学得候、其翌年、蛮寄再當島二來、其中老人之鉄匠有而、島民金兵衛尉清

貞と云者法を傳、新ニ鉄炮數十を製、依此後近國傳て習之、又島住士松下五郎三郎と云者、異國渡海之節逆風ニ而、船を依豆ニ漂流ス、然ニ海賊有之、船中之器械を為取、時ニ松下某鉄炮を放而射之放互、當國人見而為奇徴、慕而學者多く、是カ日本國中押並而炮術を習ふ、依此島を鉄炮之世ニ傳ふる初とす、本朝通記拔書

人皇百六代、後奈良院御宇、將軍義晴代、天文八年、始自蠻國傳鉄炮、

今歳八月、南蠻之船一艘漂着隅州種子島、所乘之蠻賈百余人、浦人問之、言語不通、時ニ大明之儒者五峯使者登汀、島主兵部時堯出迎え、以杖書砂曰、滄浪之客何人リ乎、五峯亦以杖書答曰、吾是明國儒官者也、蠻國賈人依來朝適為同船、蠻人素不知禮義、食不用箸匕、飲不用盞盃、且不知文字、唯近禽獸、于時蠻賈之長牟良叔舍、白所持之鉄棒発火驚雷鳴動、聞者大駭、時堯以為軍用之大器不如之、厚幣深志求其術、叔舍感其志、以鉄術及藥方鉄鍊移鑄之充術悉傳時堯、以鉄炮三挺送時堯、時堯大喜、以鉄炮送島津義久、以其術傳根來寺僧侶杉坊者、於是義久亦以所送之鉄炮献柳宮、杉坊者來東州廣傳其術、自是炮術大流布天下云々、

駒談郡
ナクサ

或駒路郡トモ有、淳和天皇天長元年、停能滿合駒談為一部隸大隅國、
屋久島 惣廻式拾里三拾丁
イニ三拾五里イニ廿六丁

山一、八重山嶽 上古、掖ク杉或為夜久・益救・邪古・邪久
川一、安房川 等と云、属嶋永良部嶋、惣廻六里拾八丁、

温泉、有功験、

一推古天皇紀云、掖玖人三人婦化、按ニ、此西南之小島タルニ由テ、此朝ニ始テ婦化スト見ヘたり、

一統日本紀云、文武天皇御宇、多嶺・夜久・菴美・度感等人、從朝幸而來而貢方物、又云、聖武天皇神龜五年共有、天平五年六月丁酉、益救郡之大領外六位下加理伽等ニ一百三拾六人、賜多嶺廻能滿郡少領外從八位上栗鷹等九百六拾九人、自居賜直姓、
一一品寶珠權現

延喜式神名帳所謂、大隅國駒談郡一坐小益球神社是也、
但社邊を一品か浦と云、又此所を宮之浦と云、

一應永十五年十月八日、從元久公種子島氏八代左近將監清明為忠節之賞賜屋久・永良部兩島、併領本領種子島、十六代左近將監久時一琢、文祿四年轉屋久・種子・永良部三島而拜領薩州知寛院、慶長四年乙亥、爰再賜種子島、此時屋久・永良部二島ハ暫為借地、終為公領、從是世々種子島皆島全領之、

一統日本紀十九・廿ノ卷、孝謙天皇天平勝宝六年正月癸丑、大宰府奏、入唐副使從四位上吉備朝臣真備船、以去年十二月七日来着益久島、自是以後、自益久進茄漂蕩着紀伊國牟婁崎、

一種子島家譜云、時堯命肥後時典・上妻家説、築屋久長田城矣、一右同、久豊公乃種子島清時ニ、硫磺・竹島・黒島三嶋加玉ふ、一文祿四年六月廿九日、大隅公以御朱印嶋津右馬頭ニ玉ふ、

高千九拾三石
山後浦役此米
三千六百三拾四石三斗八升
永良部村
屋久島

一應永卅一年、忠國公口州海江田城御出陣之時代、清明舍弟因幡守時真八月參進鹿府、時有遲參、鑑依風波難逆海上、不任意之旨今度遲參、不依大小身不去所領不可有對顔云々、苟時真為名

代去清明之所領、詔無本意依奉行大寺治州・柏原豐州因催促、

不得止而獻惠良部奉謁 太守久豊公、

川因幡守日記

一寛永十年癸酉、諸國へ上使被召下候、九州へハ小出對馬殿・堀

織部殿・能勢小十郎殿被下候、此間略、喜入久右衛門・相良全

助・川上因幡相付中、九月九日大泊御出船、屋久一艘之湊へ御

着、同十日永良部へ貳三人御渡候而、其日屋久長田江御着、同

十一日又如一艘御廻之由被仰候處、川湊を浪沙を上そきこさき

候故、御船出事遅とて、陸路を御越え地頭五代少左衛門ニ、其

外諸役人衆振廻ニ而候、幕・屏風・杯船ニのせ、一湊も被廻候處

俄ニ雨風あかり、船四艘打わり候得共、濱へ打上候故、人々け

かハなく候、末略ス、

法

一久本寺在宮之浦村 一仙正坊 一本蓮寺楠川村

一元照寺平内村 一顯寿寺長田村 一蓮花寺

一本隆寺 一玉林坊 一本満寺吉田村

一本行寺志戸子村 一本佛寺安房村 一本慶寺

一本経寺 一本信坊原村 一本寿寺平野村

一中間寺 一隆泉寺湯泊村 一岩勝寺平内村

一本行寺在永良部島

錦貝 夜久の斑貝、今按ニ本文未詳、但俗説ニ、西海ニ有屋久

島波島外所出也、

三條院御製

こきませに色をつくしてよるかひハにしきの浦とミゆるなりけ

り

右、和名抄ニ有、

一番鎮五ヶ所、所謂宮之浦・一湊・長田・栗生・安房也、

一兩權現宮之浦 住吉神社志戸子村 矢筈八幡宮一湊村

一瀆神宮權現宮 蛭子宮栗生村 八幡宮栗西村

一權現宮尾間有温泉 一盛久大明神崇平家主馬判官靈也、石塔有安房、

一明キ大明神小瀬田村 横山大明神楠川村

一天満宮楠川村

一宮之浦嶽 長田嶽 栗生嶽

右之三嶽、勸請一品法珠權現、

始羅郡 和抄始作始非也、今為始、山ニ蔵王嶽・岩野嶽

加治木 惣廻拾四里貳拾九町三厘半

一正平十二拾月五日、渋谷党籠當城、對師久公及合戰、公請援兵

於牛屎院左近將監高元、

一國初、大蔵姓加治木八郎親平、文治四年、右大將家賜加治木安

堵之下文、世々領之、明應四年七月二日、太守忠昌攻之、翌年

二月、加治木大和守久平左衛門落城而阿多ニ移と云々、大永七

年丁亥五月六日、當城主伊地知周防守重貞、同新左衛門重兼依

逆意、忠兼公之命を蒙、日新公誅伏し給ふ、享祿三年本ノマ廿三日、

肝付越前守攻取之下云々、其後天文十九年四月、以此地自貴久

公賜肝付越前守兼演入道、到文祿四年領之、

一慶長十二年未冬、惟新公自帖佐移居加治木、

加治木本日記一慶長十三年中二月廿日、惟新公平松加治木江御移被遊等にて、

御屋地為御覽加治木へ御越被遊候、左候而、加治木町藤崎伊与

所ニ而御并當被召上候、御座ニハ種子島左近左補、

高拾四石五升 靈鷲院 本誓寺山と云、義弘公御牌並御影像有、

天文十六年建立、開山運譽上人、初筑後國善導寺住職、

右江家久公御光越、運普法誡御聴聞ニ而、御詠歌ノ短冊家久、身にしめる法の教のあわれてふさなから驚の深山成けり
右之依御詠歌、靈鷲院と号候、

一椿窓寺江家久公御光越之時、浪ニ織かくるにしきハ礪山の柏にさらす花の色かな

一土屋

聖栄 加治木土屋と云所ニ、要害如くニ陣構、禮部持之處、不

知人夜ツトメテ仕落、

一畠山治部太輔構要害候、土器官ハ能仁寺之上黒川嶽ニ、古石垣に今残り有之、古昔ハ嶽之下土器官候半間、此外一ツ村三ツありたりと、古老之傳、古石垣所々にあり、能仁寺上より白濱権現上迄所々石垣残り有、

一天文廿三年五月廿九日、伊集院大和守忠朗父子黒川崎ニ陣取、肝付越前守・蒲生・渋谷之三家對陣之所ハ、黒川崎能仁寺上に今陣か平と云傳、肝付方の陣取之所を今陣と云傳、小陣と書候由、考ニ、古陣なるらん、黒河を隔忠朗陣ヲ西之方也、段土村と申民家有、

一天文十一年三月、日新公・貴久公欲攻當城、生別府之城方御発向、吉原ニ御陣之由、北原兼考或祐兼 真幸院ヲ入、溝邊高松城坂口ヲ五町計坤方ニあり、當時土屋敷有之邊也、吉原之御陣と申ハ、城より南六町計も有之所ニ而、今は畠地也、

一天文廿三年八月廿九日、渋谷・菱刈・蒲生卒手勢加治木城ニ向候、城主肝付三郎五郎開城門、網懸橋ニ而戰とあり、古昔之網懸橋ハ只今の橋ヲ少川上之方ニて、川之流も昔は當橋方上四五町方東之方へ流廻、川下ハ今之所ニ而ありたると、古老云傳、

同日ニ清水・宮内・長濱卒等馳來市場戰、清水士市來彦六、長濱の卒中村舍人戰死と有、只今市場と云所なし、むかしは城下近町有之、地下東之方郷田と云所ヲ城坂口之邊まで町屋あり、城坂口方西之方市場ありたると古老云傳、

大隅国加治木郷之事、所宛行也、但小濱六町者付長濱ノ城守、此外者早任左右、可被安堵之状如件、

天文十九年卯月吉日

京都妙山寺末

肝付越前入道殿

一大平山 安国寺 尊氏公御建立、一國一ヶ寺、

一本誓寺 開山雲峯老人江御宛の短冊の御詠、

義弘公

昨日ハ花入一送り給りし儘一首

月雪のあかるき色もわすれしのころのはなをかさしてや見

古城記云

山田聖栄自記ニ見へたり、

一忠昌公御代、日置美濃守并宮内之社家相共ニ御方ニ参り、當所本安国寺破レテ城の坂口まで攻入と云々、七月朔日の事なり、年号不詳、文明七年歟、

一大岡様御藏入分 大隅国始羅郡加治木の内

一式千三百五拾五石九斗六升八合

木田村

貳百五拾九石壹斗六升八合

高井田村

六百六拾八石四斗貳升六合

西別府村

貳百三拾三石四斗五升八合

日木山村

此三字 貳百七拾三石六斗四升七合

段土村

九百拾壹石七斗貳升四合

小山田村

七百貳拾石九斗六升七合

佳例川村

竹子村

溝邊村

崎森村

文祿四年御檢地之上為御蔵入、御代官石田治部少輔、慶長四年朝鮮御軍功給五万石之由也、

一岩野原、天文廿三年九月、平松合戰之時、右馬頭忠將隅州之勢卒帖佐二堯向、此所ニテ合戰有之、

院御宇寛弘三年之比、宰相経平関白頼忠か三男當所江配流之時、奈良

5. 勸請、

一宝現大明神 社司竹下氏、

慶長三年比八帖佐平松方鎮座云々、例祭十一月十八日、
高三拾石兵庫殿持高方寄附
常永山 雷寿院 春日寺 慶長十年、義弘公御建立、

高常永山 福寿院 春日寺 慶長十年、義弘公御建立、開山弘
一常永山 福壽院 春日寺 慶長十年、義弘公御建立、開山弘
高常永山 福壽院 春日寺 慶長十年、義弘公御建立、開山弘
高常永山 福壽院 春日寺 慶長十年、義弘公御建立、開山弘

一松齡山

牌、家久公・綱貴公御牌、其外御女姓様かた御牌立、正覺院様

御牌・御石塔有、

高三拾石七斗
一萬齡山
勝窓寺

一萬齡山 勝窓寺、臨関山派京都妙心寺末 往古萩原寺と云、中興開山

鳳山和尚、

一大永六年、肝付兼演攻取加治木城、天文三年甲午、兼演移于加治木、

一天文十八年己酉五月廿九日、太守貴久公遣伊集院忠朗・樺山善久將士卒於陣黒川崎討乎、我兼演及蒲生・邪答院・入來院・東郷共二對陣防戰、于時嶋津尾張守忠親・北郷讃岐守忠相以謀介謝罪、太守散其憤矣、同十九庚戌四月、賜加治木郷安堵之御

判、

一 地頭イち、周防守重貞、左馬介 重次子大永七年五月六日歟、

一土器間
一黒川崎
一網掛橋
一岩野原
一安国寺日

城下邊

右諸所、古戰場也、

一天文十八年五月廿九日、貴久公伊集院忠朗を遣し攻玉ふ、黒川崎二陣ス、渋谷・蒲生、肝付以安ニ加勢ス、毎日追合有、十一

肝付・渋谷・蒲生降を乞、北郷・菱刈之吹拳ニ而頻ニ愁訴ス、

因茲其罪を宥さると云々、其後天文廿三年八月廿九日、渋谷・蒲生・菱刈小勢催多勢逼當城、城主肝付三郎五郎兼盛子以安出

向網掛川一戰得利、時三清水・姫木・日當山々加勢有而、市場
二而も迫合有之也、

一太平山 安国寺 臨濟崇闌山流京妙心寺末 康永年中創建、開山
嵩山大本禪師、將軍尊氏公依御願、一國壹ヶ寺御建立之内、隅

州之一寺二而候、

一後藤墳 在木田村之内
岩野原路傍、

五年未七月廿一日、義弘公逝去シ給ふ於加治木、于時種清聞於

公ノ逝去、則欲到加治木、公之近臣聞殉死之事、不及到加治木

直二於此所追跡殉死ス、故有此号、

一新正八幡宮、祭神不詳

始羅郡

帖佐 惣廻八里三町貳拾六間半、上古正宮領、東鑑作帖佐

一建久九年之比、郡司高助と有、

一 国初、平姓肥後房良西領之、建久八年交名注進案云、官方肥後房良西トアリ、

一大永之比、島津下野守昌久領之、

一大永六年、邊川筑前守合心実久本城・新城を構櫛籠、忠良公奉勝久公之命攻之、十二月七日拔之、総善寺口之嶋津善左衛門を岩元寿齊打取也、其後嶋津下野守昌久を城代ニ居給ふ、昌久又加治木伊地知周防介ニ引合謀反ス、故ニ同七年六月六日、忠良公發兵兩人を被屠殺也、

一大永七年丁亥四月、從忠良公肝付越前守兼演ニ邊川村拝領、

一天文廿三年、渋谷氏掠取平松岩釵城為押領之地、貴久公打之、忠平主守給、

一 明應四年六月廿九日、加治木大和守掠之、七月一日引退、

一 永祿八年、賜嶋津又四郎幸久、

一 東鑑云、元久元年甲子九月十七日、大隅国正八幡宮寺訴申事、被經沙汰、是故、右幕下之時、掃部入道寂忍為止宮地頭之處、

寺治部子細被停止其儀訖、其後三箇所補三人地頭之間、造宮之功難成之由云々、依今日所止彼地頭職等也、帖佐郷地頭肥後防良西荒田庄地頭、

一 平山城、上古平山左衛亮武一守之、岩清水別當守清之子孫、

山北六郎種頼萬得名地頭、馬部入淨賢云々、廣元朝臣奉行也、

一文祿四年卯月十二日、以御朱印薩摩国知行割仕置等可被仰出候間、在番之儀、又八郎其外家老之者江健申付、無油断出船口要之旨アリ、此字從義弘公於朝鮮應其命、則歸朝詣洛仕、載朱印所領、薛洛帰国、踰年翌年慶長元年、再派朝鮮仕候、

一 弘治三年、地頭鎌田刑部左衛門政年入道寛柄、

一文祿四年秋、義弘公栗野、當地江移給ふ、慶長十二年冬ニ到御在城也、年数十三年也、旧記ニ、同十三年戊申十二月三日、加治木へ御移と有、

一 平安山鐘銘

奉施入大隅国平安山阿弥陀寺檀鐘一口^{四十八貫}、弘安五年五月、石清水了清全師慈運、

一 願成寺、千鉢阿弥陀之内二鉢、義弘公御作、裏ニ御印影有、

立像、長四寸、三拾毫鉢ハ裏ニ女大施主宰相とアリ、十八鉢ハ嶋津兵庫入道女と有之、

一 慶長五年九月十五日、関ヶ原合戦敗統、義弘公伊勢路を経、同十八日、棚部屋道与か宅ニ一宿、同廿二日、大坂乗船、同廿九日、日州細嶋江着船、宿于島津氏、十月三日、到富隈謁龍伯公、同日帰城帖佐、同六年四月、屈居向嶋藤野村、

一 慶長五年、義弘主関ヶ原方雖帰入當城、義久公聞之怒曰、義弘与家康公在以誓文相約矣、陣石田三成之募者、一口両舌之誠、所以為士之恥也、其後九月廿八日、寺沢志摩守正成・山口勘兵衛尉直友書を義久公・忠恒公ニ贈る、十月十日、井伊兵部少輔直政又書を忠恒公ニ贈而、関ヶ原一件之事を述、義久公見彼書其怒猶甚而与義弘不会、故義弘公遍廻盤居向嶋有ト、

一 龜泉院、膝ツキ栗毛之塔有、碑文曰、中五右衛門国明施主種子島藏人忠平公於木崎原柚木崎丹後守を御討被成候時、為召候御馬ニ而其時両膝を折、首尾能御打取被成候故、膝付栗毛と御名付、八十三迄存生仕候由、右馬死候而、當寺へ御葬被成候、

一 建昌城、西餅田村、旧銘瓜生野、

一 高雄城、鍋倉村有、嶋津豊後守忠廣居住也、

一 萩峯城 畠山直顯執事野元藤次秀安籠城、氏久公之軍開責候處、溝辺之城ニ氏久公之執事本田信濃守重親籠り、畠山之軍又責之、両城共ニ難儀ニ及候、両方互ニ和談を以困を解候、義久公御嫡女、嶋津豊後守朝久室、天文廿三年甲寅誕生、母北郷左馬介忠孝女、義弘公被成御座候御城跡ニ被御座候故、奉称御居地様候、寛永十三丙子十一月十一日卒、法名号寛清正直、八十三、

一 諏訪大明神 在船津村、

棟札、大旦那藤原貴久、弘治二年丙辰六月廿九日、當地頭三原遠江守重秋、

一 崇廟住吉大明神 社司藤田氏、

一新正八幡宮、社司藤原氏、弘安年中岩清水法橋于此御建立、

一 稻荷大明神、例祭霜月廿一日、

右稻荷大明神者、朝鮮国御戦死之御稻荷ニ而御座候處、其節御供爰元祈願所増長院住持頼雄法印、於彼地御靈骨置入、此地江御渡、惟新様依高命高雄城ニ社頭御建立、稻荷被遊御勸請候、

慶長三年戊十二月廿八日御棟札御座候故、写差上申候、御靈骨之儀者、社檀之下へ奉納為有之由申傳候、御神領高壱石壱斗四升三合御寄附、其上御祭料米式石五斗被仰付、毎年十一月廿八日御祭り有之候處、元和年中、神領高井御祭料為被召上由御座候處、然共御祭之儀ハ所中志を以、毎年作法之通、右當日相動申候、

棟札、大願主、大行事樺山美濃入道、慶長三年戊十二月廿八日、大檀那藤原義弘朝臣長寿御武運長久故也、

棟札裏書云、小行事竹内備前守、奉勸請稻荷大明神、於朝鮮国御戦死故如斯、依之藤原義弘朝臣御下知、

一心岳寺境内ニ茂稻荷御建立有之候、是も高麗戦死之御稻荷ニ而御座候、竜伯様国分被成御座候時分、別而御信仰被遊御座候、元来ハ從御物十一月十三日御祭り有之候由候へ共、當分ハ寺役ニ相勤候、

一 帖佐城守嶋津下野守昌久、加治木城守伊地知周防介ニ合勢へ起謀反、享録二年正月廿二日、邪答院重武本城・新城を責落ス、一日當比良惣陣とも云、一狩集、一星原 一平松川原 一池鳴之邊、一高樋 一八牟禮、一白銀、此諸所古戰場也、

一 弘治元年三月廿七日、大守兵衛向帖佐、高尾城ニ責入、敵首得一百余員、同四月二日之夜、凶徒帖佐及山田・蒲生新掎拾退去、仍公領被成、同七月廿五日、於帖佐合戦、東郷・那覽・白濱を始、東郷衆余多打取候、

一 晴義御生害記ニ、心岳寺鎮守之神社者稻荷ニ而、晴義御生害之砌、其場へ出現有之、直御拜御生害被遊候由、其由緒今以て心岳寺御建立之節、右神社從輩伯公御造立被遊、御物修甫とあり、朝鮮戦死之御孤御勸請之筋ハ意違、追而可糺、

始羅郡

重富 惣廻六里貳拾八丁四拾七間半、

古来ハ帖佐之内ニ而号平松、寛永年中外城ニ立、寛文十三丑四月十三日、又属帖佐、元文四年、改平松号重富、

一 寛永十六年ハ明暦元迄ハ無地頭、

一 天文廿三年、渋谷移平松岩釵城、貴久公伐て置忠平公使守之、

一 平松城、上古帖佐氏持城ニて、其後平松美濃守武盛、横河三河守一統種族守之

一天文廿三年十月二日、平松合戦之時、帖佐・蒲生・岩釵之賊徒
会吾軍大敗、則帖佐・蒲生敵五拾余人、於是帖佐城主渋谷河内
守嫡子討殺西保武藏守ヲ、其夜岩釵委去、

一嶋津壯之助忠紀、後ハ周防肥前、越前嶋津家蹟依相統、元文二年丁巳三
月廿日、繼豊公以御證判、采地賜一万石、元文四年己未九月廿

四日、大隅国始羅郡之内、薩摩国鹿兒島郡之内、号重富是越前
国重富
之旧名也、

一脇元、天文廿三年、平松合戦之時、守護方此所を放火被成候、
建久八年三月交名注進案云、官方脇元三郎太夫正平ト有、

諸家大概云、藤原姓脇本氏ハ、蒲生種清之弟宗平を号脇元候、
是脇元を領し候故ニ而候、建武之比などの旧記ニ見得申候、其
直義朝臣の御教書、氏久公御證判之写杯所持申候、此子孫脇元
七右衛門ニ而候と有、

一星原 平松麓村

天文廿三年九月晦日、此所ニ御馬を立らる、先陣は岩釵城西門
攻寄、於此地貴久主及嫡子三郎左衛門尉義久主卒軍旅建大功、
三原次郎四郎・大寺大学左衛門尉・大山織部佐皆死候、世録記
ニあり、
一諏訪上下大明神

棟札云、當地頭三原遠江守重秋、弘治二年六月廿九日と有、

右、元禄年間寺社差出、

古城記一岩釵大明神 社司後藤氏 祭神不詳、

一岩釵城

邪答院河内守良重・入来院彈正重豊・菱刈氏・十郎三郎為清
蒲生氏等を結、
邪答院之兵を籠置蒲生、帖佐ヲ加治木を攻候故、城主肝付越前
守肝付兼演入道以安危急之由相聞得、天文廿三年九月十二日、

貴久公・義久公御大将ニて、平松之上惣陣岡日營比良御陣、嶋
津尚久大将ニて狩集陣を令守、此時焼山之陣凶徒・白銀坂・脇
元・星ノ原等ニ而時々合戦有、同十月二日、岩釵城御責被成候
処、帖佐・蒲生之凶徒二千計二手ニ成、平松川を渡り池嶋之邊
ニ扣、此時味方方々より挑戦、味方勝ニ乗り、逆る敵を追、帖
佐高樋川迄追詰、斬獲五十餘級有之内、帖佐城主渋谷河内守長
男西保武藏守を打取候、其夜岩釵城没落也、右之首共をは白銀
坂下ニ而実験被成候、翌翌三日、太守御父子三人城ニ入、御門
祝有之、十月十九日忠平公御在城也、

心岳寺、在瀧ヶ水村、大旦那龍伯公与或書ニ有、可紀、

慶長四年己亥三月、福岡伊与と云兵道者ニ地割被仰付、宮原左
近入道秋扇奉行ニ而御建立、開山抱嚴孫和尚也、十三年丙午十
一月、良等之御石塔御建立、歳久公譜中ニ有、

慶長十三年己酉十一月、龍伯公・惟新公心岳寺へ渡御有尊詠、

心岳寺ニて 竜伯公

岩木まで影ふる寺をきて見れハ雪の深山そ思ひやらる、

惟新公

夕なみに月ニ雪とを待けりはいつくハありと磯の山寺

家久公心岳寺ニ渡御尊詠有、

とふ袖ハけふ松か枝に咲藤の花の波よる池の下水

御佛を頼むものゆへ袖に散る霜の玉を手向にやせぬ 玄旨

花さけふ嵐は今はうらめしきとせの春を思ひ出せは

右馬頭久雄

一瀧か水、元龜二年十一月廿日、肝付・伊地知・祢寝等之兵船百
余艘、鹿兒府ニ難襲来、防禦稠敷故漕返此地を浸んとす、平田

新三郎以帖佐之士防之、敵船退去ト云々、

一 太守之舍弟左衛門督歳久入道晴義陰謀之疑有之、依而殿下秀吉公細川幽斎を下し糺其罪、晴義從邪答院到鹿兒島、依病氣不遂參洛全非陰謀由を申、其後暇を賜而趣歸路、脇元ニ一宿有之、家臣成合城介ニ歸路之軀を被伺、城介片岡嶽ニ上而伺之ニ、切通之邊ニ伏兵有と見取而、其趣を申、依之、家臣等評議して、勸晴義又船ニ乗セ、於此地矢射其間ニ遂自害給へと、船を進候處、打手之船多く見候故、桜嶋之内白濱ニ船を着、此地ニ到る、明レハ文禄元年七月十八日、海陸之寄手攻近く、其將町田出羽守久倍也、数刻防戦有之、歳久公御生害、原田甚次某御首を給、及家臣廿人戦死也、晴義御生害記ニ有

一 築摘之瀧、在星原ノ地、細川幽斎法印玄旨之歌

爰も又吉野に近きなつみ川なかれて瀧の名にや落覽

高老石 本書ニ落有之、兼而承居候間、即記之、追而猶是不是を可糺、大乗院末 一 岩鋸山 神宮寺 圓明院 吉祥山 三祖院

慶長十二年丁未六月十八日、龍伯公渡御心岳寺御連歌、

霜はたゝさなから玉のはちすかな

龍伯

嶋鳥の羽かせ絶ノ音つれて

又吉常久

一 瀧水山 心岳寺 福昌寺木寺

開山代賢和尚、開基年号不詳、左衛門督歳久入道晴義御切腹之所故、義久公此寺御建立、御牌・御石塔有之候、御法名心岳良空大禪伯、

始羅郡

溝邊 惣廻拾三里貳拾六町五拾三間、

一 貞久公御代、溝邊孫太郎領之、姓氏不詳、

一 永禄五年、北原伊勢守・同新助楯籠、六月三日、忠平公・歳久大將ニ而攻殺し給ふ、此地を菱刈氏ニ賜ふ、

一 長船大明神

棟札、永禄五年十一月、大旦那伴兼盛并兼有とあり、

一 鷹大明神 社司宗像氏 祭神不詳、

棟札、寶徳三年六月、貴親齋松丸、

一 延徳三年霜月、肝付兼国、

一 大永四年、肝付兼演領、永禄五年兼盛、天正九年彈正忠忠兼領之、

一 溝邊城、氏久公之御代、本田重親籠溝邊、畠山之軍開及危難之處、帖佐萩家城ニ畠山之執事野元藤次籠城仕候を、守護方々責申候、是茂危難ニ而候故、双方以和睦両城互ニ引取、命を保之通有之候、且又、肝付越前守等在城之由、于今本城・二之丸其跡相見得候、

一天文十一年春、北原使師旅発于溝邊、玉利畠已破却之際、本田之士卒救米候處、北原之兵對之、於上野廣原合戦仕、本田刑部大輔五六十人余屠殺とあり、玉利ハ溝邊城三町計南ニあり、三方は深谷、東之方ハ上野廣原ニ続き原地ニ而候、當地民家ニ而候、

一 北原兼孝、日新公・貴久公ニ御味方仕、加治木城為攻溝邊高木城ニ入、それより加治木札立ニ陣取とあり、高松城者溝邊之内せまりと申村方十町計北之方ニ有之、通路より西六七町ニ有、

野原ニて能要害之地ニて候、東之方道一筋有、于今要害之切岸
曲輪儘ニ相分有之、三方深谷ヲ東之方茂、容易多人數押寄かた
き所也、堀之脇を廻り通路有、堀外ニ古昔之弓場と云傳所あり、
當時者弓場ケ迫と云畠有、城ニ三町東之方迫ニ而候、考ニ、昔
ハ高松之通路歟、當時者其迫畠之左右の小道を通る、
高松石
一放石山 妙樂寺 大覺院真大乗院末 一瑞泉山 北慶寺福昌末

一文明十八年丙午、肝付越前守兼國在城候共、於大崎領此地、一
族・郎徒遂扈從者也、

一弘治元年丁卯正月廿八日、到溝邊、北原^{住真}幸院之徒對我軍挑戰、
未入彼陣中、以鉄炮殺敵七人、嶋津右馬頭忠將卒、大隅兵於西
原之地打賊、

始羅郡

山田 惣廻拾壹里三町三拾三間、

一山田城、享祿二年己丑正月廿三日、邪答院重武攻取之、城主不
詳、弘治元年二月八日、肝付三郎伏草ニ而得利と云々と、古城
記ニ見へたり、或記ニ、三郎五郎桶籠之、太守公被攻与有、天
文之比也、

一北山村、旧名額、

一梅北氏ハ永祿・天正年間ニ梅北宮内左衛門国兼、初ハ足輕大將
被仰付、武勇之譽有之候故、地頭職被仰付、帖佐山田之内北山
を領分、高麗入之時、宮内左衛門事企陰謀、朝鮮出陣之薩摩勢
を呼入、肥後佐敷之城を攻取、方々ニ致出張、御家危仕候儀、
傳記詳也、

一紀姓平山之一族額氏ハ、帖佐山田之内額を領号額候、永祿之比、

額兵部左衛門、豊州ニ相附福嶋へ居移、軍勞仕候、從夫以來見
得不申候、平山ハ右衛門額之子孫ニて候、

宗 一黒嶋大明神 社司川俣氏 祭神不詳

一宝珠山 勝高寺 正白院 真大乗院末

一玉城山 禪福寺 陽春院 禪福寺末

傳ニ曰、往古為鎮西八郎為朝位牌所、不知慎、中興開山泰雲和
尚、

始羅郡

蒲生 惣廻拾四里拾三丁五拾八間、

国始、藤原姓蒲生太郎太夫清直領之、其先大織冠鎌足流從三位
通基之息男教清と云、豊州国ニ下り、宇佐宮之留主職たり、大
宮司女に婚し一子を産、上総介舜清と云、此人初而下大隅之雇
ニ下向し、垂水之城を安堵、保安四年癸卯二月、大隅国蒲生・
吉田之領主と成、蒲生城ニ住、舜清一子八郎太夫恒清、其子清
直也、白是世々延及子孫領焉、十五代之城主越前守義清、其養
子十郎為清對忠兼公・貴久公奉敵・弘治三年、合戦不利蒲生落
城、御幕下ニ罷成候、諸家大概に、此時城を渡候ハ、西俣出羽
・矢上大膳とあり、

一北村城

弘治元年正月廿二日、義久公吉田迄御出馬、翌日先鋒兵ニ差向
候処、凶徒偽謀を構而合戦及難儀、弟子丸播磨守已下數輩戦死、
城兵偽て内通し、太守之軍勢をたはかりよせ打取也、

○上古、北村次郎清則、蒲生太郎太夫清直之男也守之、其後北村
三郎清範守之、比志嶋家也、○弘治二年与地頭比志嶋宮内少輔

入道笑翁齋、

一松坂城 木津志村之内、今属隅州山田、

野城也、地頭川上上野介、○弘治三年より市来内蔵介、蒲生御手三人候節、地頭被仰付候旨、諸家大概ニ有、然者、川上上野介ハ其後之地頭と見得たり、

弘治二年丙辰十一月廿五日、大守貴久公以大軍攻寄於蒲生城、

七曲馬立ニ陣し給ふ、菱刈後攻ニ依而城攻延引、翌三年四月廿日、北村塞主菱刈權頭自殺故、蒲生氏放火城裏、去蒲生退邪答院、是時誰人平有狂歌、

渋谷にはころとまらて蒲生とのちんの匂ひに袖をふれなハ

一本城、但龍ヶ城共申傳候、上使方御用ニ付、所方申出候、

岸高く谷深シ、四方絶地ニて堅固之地也、山城也、廻り里余、

大手口北、水之手口西、或人云三里廻、

一馬立、麓方北十町許ニあり、住吉池之西面上久徳村之内、弘治

二年十二月五日、守護方陣を取、

一七曲、麓方十町余計リニ有、青宮野之内、
神領高拾石、祭米五斗式升五合、初六俵但正月太殿若人用、社司頼口氏

一正八幡若宮、麓別常寺、神守寺、真大末、寺領廿石、

豊前国宇佐之正宮を上総縣清移于此地、毎年六月晦日祭事、

祭神三座 仲哀天皇 應神天皇 神功皇后
祭米五斗式升五合

一崇廟楠田大明神 北村之内 社司谷川佐伯、

毎年霜月

一東光山 佛生寺 千手院 大業院末
高七石

一大定山 禪法院 永興寺 曹能州総持寺末、巖山五哲之内通幻派下星外派、

開山量外和尚ハ、蒲生九代清種之十一男也、

一新富、天文廿三年九月、平松合戦之時、同十四日、郡山之勢此

所ニ働、敵少々打取也、

一松坂城、弘治二年三月十五日、太守大軍を以責給ふ、忠平公御

自身手を砕、御手疵五ヶ所負給ふ、御年廿二才、是敵を打給ふ

初也、同年十月十九日、再松坂城を責、終攻落シ給ふ、右城攻

之前、濱田榮林・吉井源七左衛門城ニ忍入、火を掛焼落す、城

主中村父子三人打死、其外渋谷・蒲生之人数百余人被攻殺候、

一北村境、菱刈陣、弘治二年之冬、大守蒲生を攻給ふ、菱刈權頭

蒲生為加勢、十二月中旬當城ニ来陣城を構ふ、依之、同三年四

月十五日、太守御父子・忠將・尚久以下大軍を以て着陣、然其

堅固之地なれば、權頭を始凶徒数百人斬首、此時忠平公、楠原

某と鎧を合打取給ふ、御自身ニも被負手疵候、邪答院・真幸院

・東郷・蒲生等之兵卒也、四百余人戦死と云々、此勝利を聞、

敵失勢、同廿日夜、本城之敵火を掛て向邪答院退散ス、右本城

責ニ、市来衆貴嶋助五郎・濱田藤五左衛門戦死也、

一若宮八幡宮、當社ハ、昔日後鳥羽院御宇、檢校坊能清と云人下

向豊前国、宇佐八幡宮為留主職、為大宮司賀生一子、号上総介

舜清、有故、保安四年癸卯、初而下向大隅州居垂水郷、此時宇

佐宮建此地、同年移蒲生郷隅州、勧請又此地、

噓噓郡 景行紀曰、十年悉平襲国、按、初熊襲也、襲国ハ噓噓郡乎、
続日本紀云、隼人噓噓ノ君多理志佐、

市成 惣廻八里五町拾間、

旧記ニ、大隅国小河院内一成村トアリ、

一山田氏世々領之、新納遠江守忠勝亦領之後、長祿之比、肝付氏

拜領、樺山氏領之、永正・天文之比、山田安藝守忠豐領之、永

祿八年比、肝付右馬頭良兼領之、

一天文十三年甲辰之夏、為肝付氏所慕市成、

一天正二年、賜廻・市成嶋津右馬頭征久、

一慶長十九年甲寅、樺山氏轉此地賜蘭牟田、數根中務少輔立頼七

世轉高隈賜此地、爾來不易ノ為采地、

一文祿四年六月、伊集院右衛門太夫忠棟ニ玉ふ、

高千式百九斛式斗七升七合

大隅之内市成

一新納家系図ニ、九代近江守忠勝領之、

一聖榮自記、加賀守忠種を召寄御傍ニおかれ、坂より上御打開之
初とし、一成六町少所ニ而候得共、忝も道鑑之御手を添候テ、

忝御意候而山田ニ下給候、末次ニもマキ名一所給ける由傳承候、

一成當御代迄七代頂戴仕、子孫繁昌仕候云々ト有之、

一世録記ニ云、天文十三年甲辰の夏、大隅之内一成之院有、山田

加賀守忠廣奉獻其地於貴久、願肝付某素多忠節勤、直ニ与之云

々、

一崇廟大王大明神 ^{イニ大玉} 社司霧田氏、

一稻荷大明神

棟札云、延德四年霜月五日、地頭河内守藤原忠豊・同征久、

一一成大明神 神鉢裏書 山田河内守忠豊

同藤原久親

永正五年十二月十三日ト有り、但延德四年十五年後也、
^{高三拾石余領主鶴津大膳持常ノ寄附、}
一宝城山 両足寺

一古城 ^{名乗} 麓ノ大抵北之方也、地下り之場所ニ而谷有之、西ノ

城・東ノ城ニツ有之、其間ニ通路有、虎口相記、領地之人の為

居城、按ニ、慶長四年忠真逆意ニ相遊ると、寺山四郎左衛門尉

久兼市成城在番と云々、然者則久兼守此墨者歟、

嚙喰郡

恒吉 惣廻九里三拾四町廿六周、

上古恒吉大膳亮守之、早崎大膳孫道三男種子島家なり、

一天文廿二年八月、肝付良兼領、亦新納家九代近江守忠勝領之、

一天正十二年、北郷左衛門尉時久領、

一高式千四百三石八斗壹升三合

大隅之内恒吉

文祿四年、忠棟ニ給ふ、

一慶長四年、伊集院源次郎忠真逆心之時、此城ニ人数を籠ル、六
月廿二日方追合有之、八月廿日自落城也、

恒吉城、宮ヶ原合戦左条ニ有、此場所投谷神社之辺也、其場を

鳥井之檀と云、鳥井方十間計ニ首塚有、同十一丁計ニ

北郷藏人石塔有、

永祿元年三月十九日、肝付勢寄来、北郷一雲・嶋津豊後守怒朝
加勢を以、宮原ニ而合戦、一雲利を失、一族北郷藏人及豊州家

・平田出羽守・同新左衛門、其外数百人打死也、

一宗 ^{ツルキ} 刀六所権現 棟札永正二年十二月八日、大旦那平種弘、
一投谷八幡 祭米壹斗壹升五合、在大谷村、祭神三座、

社司廣川氏、徳丸諸所其外社家屋敷有、

寄神祠祝 龍伯

岩清水なかれたへせぬ神慮行えをまもれ我国の人

首夏風 忠恒

誰か為に夏かへるまで一もとのなをく風の吹おこすらん

右御短冊二枚、外ニ附衆短冊拾壹枚有之、裏付ニ、慶長七年

卯月廿六日、八幡法楽當座とあり、外ニもあり、

一竹間山 惣福寺 吉祥院 真大末

一安居山 法泉寺 禪僧寺末

一宗慶寺、右平田安房介宗勳建立、

一恒古城、麓町之上福山口之通路より左巻町計ニあり、

伊集院源次郎忠真都城籠城候時、伊集院宗右衛門守之、落城之後寺山四郎左衛門久兼ニ命候て令守當城、

橋野川、源南郷村同山中出、到都之城合竹之下川、入去川通日州赤江浦、

噓噓郡 當所南之郷村、日州諸縣郡なり、

末吉 惣廻貳拾三里八丁四拾五間半、

豐州家・新納家建徳・文領之、幸侃又領之、又天文八年七月廿九日、豐後守忠朝落末吉城開退之後、豐州家領之、于時地頭、

父子共ニ地頭、

新納家系図ニ、五代近江守忠統、文明十八年丙午、日向飢肥於此地知之、四拾一年、八代近江守忠勝まで領地之跡ニ見得たり、

一天正之比、北郷家世々領之、

一永祿三年十月四日、上使伊勢備後守殿下着、於此地太守修理太夫貴久公御参会、

橋ノ小戸 三才図会曰、伊弉冉諸尊筑紫日向ノ小戸橋ノ櫛原前祓

除時、海底ヨリ所現出之三神、曰底筒男・中筒男・表

櫛ケ原南之郷村

筒男、是乃住吉大明神也、或云、櫛原以在筑前為正、

一櫛大明神 所祭伊弉諾尊、爰本ニ伊弉諾・伊弉冉二神と有、

○櫛ケ原ハ則為身曾貴祓除之遺跡、於是奉崇神靈、依地名奉呼櫛大明神也、社亦有小戸池、今則稍荒廢ス、屈起中央巖嵒撐天者

橋嶽也、麓ニ有真津男ノ神社、面中瀬巽之方ニ有下津方男ノ神

社、而亦下瀬良ノ方ニ有方津方男ノ神社、對上瀬三社共有九神

ノ垂跡、同所ニ真木ノ尾ト云社有而、六神ノ垂跡有、

二之方所住吉大明神 所祭底筒男・中筒男・表筒男ノ三神也、

纂疏云、住吉大明神ハ其荒魂在筑紫之小戸、和鬼神功皇后征三

韓前陰陽王體而現撰州云々、

○依三神出現之地奉崇、於此當社モ亦因撰州之地名而、通稱奉呼

住吉大明神者也、

○撰津國風土記云、所以稱住吉者、昔思長足比壳ノ天皇神功皇后之事なり、

之世、住吉大明神現出而逃行、天下不見可住國、時ニ到於沼名

掠之長岡之前、乃謂、斯実ニ可住之國也ト、遂ニ讚稱之云、真

住吉國のは二定神社、今俗ニ略之、直稱須美乃敷長岡之前ト者、

今之神宮南ノ邊是其地也、

撰津國住吉郡、筑前國那那郡、長門國豐浦郡ニ處ニ有垂跡、櫛

原ハ初三神出現之地也、以此四所之垂跡可為要地也、其外於國

々雖多住吉、此旨後世之勸請也、

天和三年、鹿兒府諏方神主佐藤氏携證書上京シ、就吉田氏出之

住吉ノ本社ニ決ス、元祿二年、吉田家ヨリ當社縁起并額ヲ書被

遣候、

三島ニモ有 続古今集 名所集日向國と有 卜部椽兼直歌

西の海櫛原の塩路よりあらわれ出し住吉の神 新後拾遺集 名所集 津守國景歌

橋の小戸の塩瀬に現れて昔ふりにし神そこの神

慶長五年三月廿九日住吉大明神の神前詠之 龍伯

木のまより頭れ出しほとゝきすあすの初音をけふしなかなむ

同年四月十一日當座祝御奉納歌

忠恒

行末もいまもしらるゝ国々のあまつ御神のめくみある世ハ

慶長十二年七月御参詣

家久

秋の色にうつる木すゑも住吉の神代の松わあらわれにけり

一手取城、通路を福山ノ方へ通る、左之方三四町計脇、田之中ニ

在之、里傳ニ云、馬場氏之人往古此城を守と云也、城主赤崎肥

前守盛信・其二郎盛義、其子赤崎泰次盛一代々宮方ニ而、畠山

修理亮直頼ニ属、世々岩川の領主也、

岩川氏住城、国合戦已後氏久公御責取被成候、

山口大明神 南之郷村、社人佐野一学 所祭天智天皇

棟札、應永十七年十一月、大旦那伴元兼

一世貫大明神 在岩崎村 本地虚空蔵

像背後文、文正二年、大旦那新納忠氏、

一光福寺 在諏訪原村

棟札、天文十八年、大旦那忠廣・忠親

一国会原 大駄櫛神社の上、通路双方之廣原中ニ並松有、志布志

江之通路を里計をは、大隅・日向兩國之境故此名云々、

延文四年己亥十月五日、氏久公志布志方末古南之郷江御免向の

時、被對凶徒相良氏・北原氏、於當所御合戦有之、御難儀ニて

御一族佐多左馬介忠直・同彦四郎兄弟戦死、公市成飯牟禮山之

嶮路を経、二川浦を鹿兒島ニ渡給ふと云々、

一天文之比、北郷家、肝付家於此所致合戦候、

爰ニ大正十一年甲戌正月六日、住吉原合戦、凶徒肝付修理亮

・同右衛門尉・肝付三河入道竹友等也、三河入道戦死、凶徒

惣敗軍也、

一 慶長十一年四月十一日當座

龍伯公

さみしさはうらみのほとをいひやりしとけん命はあらハあれ

詠松間時鳥和歌

法印龍伯

こゑはそらやすれともわきかたにまつの葉するの山ほとゝきす

同題

少将忠恒

常そなるまつにちきりしほとゝきすいく久しさの初音ならまし

右、住吉社内奉納の御詠、于今有之候、

末吉南郷西城寺之上、當分都之城梅北村之内也、

一天ヶ峯、応安六年、氏久公志布志より都之城之後攻ニ趣給ふ時

爰に陣し給ふ、二月廿八日去此所、平長谷ニ御陣と云々、

一崇諷方大明神 諏訪村ニ有、天文十一年七月廿一日之勸請歟、

社官安田氏 八月廿八日祭

一住吉大明神 例祭九月廿五日 社官高橋伊膳

一棟大明神 祭十一月廿四日 社司佐野一学 南之郷之内

一上津片加男 一下津片加男 一中津奥津男

一真木ノ男 三神所祭住吉ニ同、南ノ郷橘嶽、社司三社共ニ佐野

氏、

神領高武石寺斗五升、末吉衆中、附高諷方村ニ有、

一五位大明神 代宮司大窪七郎

一無量寿山 深川院 光明寺真大末開山不詳、中興開山圓明法印、

開基之年代不詳、

一達摩山 興昌寺 曹福末 二之方村麓ニあり、

一弥勒山 寶泉院 光福寺 時蒙相州藤沢山末 諏方方村ニあり、

一中山大明神 崇平田出羽守宗仍靈

右平田宗仍、永祿元年三月十九日、於恒吉宮ヶ原戦死之故ニ

崇彼靈、宗仍法名中山棟田居士と号、其外家臣戰死之者多々、
南之郷村

一上津瀬 三神祭神八十柱津日神 表津少童命 表筒男命

一枕之石 住吉社頭より十間計有

一右同 三神祭所神直日命 中津少童命 中筒男命

一右同 三神祭所大直日命 底津少童命 底筒男命

一上津瀬、右南之郷村之内、川添る住吉山方東之方式里余計山涯

之方也、

一南之郷村 中津瀬、右住吉より十九町、櫛之元より東之方ニ近シ小川流レ、

一下津瀬、右同、住吉より壱里計、東之方小川流る、

一桜谷、櫛ノ社より式里計東方、
上同

一橋ノ小戸、櫛神社より元水出る所を云、池ニ廻リ廿疊敷餘ニも有へき敷、

一諏方大明神、所祭 事代主命 下照姫命 棟札、建徳二年庚寅十月吉日、大願

主藤原忠明、

一新城、福山へ通る道路より右之方二町計ニ有、天文七年三月二

口、岩河新城を北郷殿被攻取、男女三十人計被取、城主税所氏

也、子孫都之城ニ住ス、其後北郷家臣ニ成候敷、

一古城、麓々四五丁計西北之方、都之城方江通る左ニ有之、嶋津

豊後守忠朝之内平田出羽守宗仍可為居城敷、伊集院源次郎忠真

都城籠城之時家族守之、慶長四年九月八日、廻合於末吉有之、

同五年三月十四日下城、此城名龜龜ヶ城と云、

一旧記云、元龜三年正月六日、肝付衆於末古二百余人打死スと有、

右戦場、岩崎村之内岩井谷之邊なるべし、此所ニ印之木有、

一平松ヶ尾、天正元年正月六日、肝付家と北郷家合戦之時肝付家

陣之東北、小川流當分田地有、城壁高シ、城中陸多陣城と見得

候、

一古城、右同所也、堀切等于今存候、志布志道路也、由緒不詳、
一子塚、平松ヶ尾南三丁計ニ有、右合戦之時、敵味方之死體を
埋候墳也、

一肝付参河入道竹友墳、右墳より南之方六丁計、例歲七月十六日
南之郷村土民等備舞躍於墓前慰靈魂、北郷左衛門入道家臣豊饒
大隅打取竹友也 人賜子孫 在志布志、此時同家臣渡辺太郎介論是争功、大隅
利運と成、

一右合戦之時、肝付凶徒屯字塚、北郷左衛門入道一雲・同讃岐守
忠虎引率手勢、發出シ伏兵住吉山ニ籠置、一手者川内登り本堂
へ引上ケ、今一手坂口豊前從兵卒大路北之別府ニ引廻ス、肝付
凶徒を中ニ取籠攻撃ツ、肝付修理亮・同左兵衛・肝付参河入道
竹友等戰死、凶徒數百人戦亡ス、

一古城、在深川村、土俗野上之城、四方田地ニて、松柏之古木重
樹下石龜ニ白骨納候而有之云々、當分郷士有馬仲右衛門屋敷也、

一櫛神社 住吉神社

右櫛之櫛原ハ上古の神跡にして、日本紀神代卷ニも相見得申候、

櫛之神社者天神第七伊弉諾尊、住吉神社者底筒男命・中筒男命

・表筒男命を往古已來崇為申社ニて、當社共ニ無紛本社ニ而候

趣、天和三年亥閏五月、神祇管領古田三位卜部兼連自書之縁起

并神殿之額有之候、住吉神社へ者、総州様御家督涯又ハ 太守

様御家督涯ニも、御番頭御代参を以白銀二枚進納被成候、

一幼享大明神、新納三郎四郎於當地切腹、崇其靈如斯号ス、六代

近江守忠明四男也、

一古陣、在深川村、所々堀切等于今存候、

噓吹郡 一山一ツ霧嶋山、日隅ニ跨ル、

曾於郡 惣廻拾六里三拾五丁五拾五間、

一建久九年之比、旧記ニ曾重郡司篤守と有、篤房之男支流也、

一國初税所兵衛太夫篤光男尉祐、大隅國税所校當城也、世々領之、

一治安元年三月廿一日、税所氏下向と云々、

一本田紀伊守重親領之、時ニ地頭北原三河守辰綱、

一諸家大概云、藤原姓税所氏姫木重親杯一族ニて候、税所者上代

霧嶋神領を司り候を税所之介と申候、曾郡邊領知仕候、元弘・

建武之比など専榮申候、文明十五年、豊州家ヲ被攻亡候而衰微

仕候、税所治部右衛門嫡家と見得申候、

統日本紀桓武天皇延暦七年

一秋七月己酉、大宰府云、去三月四日戌時、當大隅國噓吹郡曾乃

峯火炎大熾響如雷動及、時火光稍止唯見黒烟、肥後雨砂、峯下

五里六里沙石委積可二尺、其色黒焉、

一霧嶋山日隅兩州ニ跨り、其峯本日州諸縣郡高原也、東西共ニ麓

鎮座霧嶋社、此峯頂上有空竅、四時出煙、

一樓日高千穂峯トモ云、又ハ添山共ニ上峯トモ云り、亦歌ニ連日

峯とよめり、続千載集ニ、法皇御製、

神祇

傾かぬ連日の峯に天降る天の御孫の国そ我国

ト部朝臣兼弁・式兼俱ニ作る

あま入たる天の八重雲袖ふれてうつせる水や高知穂のミ子

○神代卷、瓊々杵尊大降於日向襲ノ高千穂峯矣トアリ、

霧嶋之邊一携等、総謂之高千穂、就中天係降臨之地者、日本紀

・旧事本紀・古事記之諸説、皆称襲之高千穂ニ上峯、

速日峯、三才図会云、天孫大速日瓊々杵尊率諸神降之地、名高

千穂云々、○高千穂嶽又曰、延岡近所総テ称高千穂莊云々、

一大波池

一霧嶋山、旧記曰、東西ニ有二峯而、其間六里許、尤高山也、其

峯常ニ燃起る、八町上之有禪寺、夏月ハ映山紅山石榴之華盛而

美、景遊高語呼此樹名霧嶋多、移栽于自西霧嶋至大隅ノ正八幡

宮曰り、

一曾於郡城、橘城とも云、在重久村、西之城・東之城二丸、昔ハ

税所此居城也、永正十六年十一月廿七日より伊集院尾張守楯籠

之、十二月八日、新納近江守忠武同意ニて人数を籠し、依之同

十七年八月廿一日、忠兼公着陣、十一月廿七日降参と云々、

一止上人権現社官似役上原左膳、祭神一坐彦火々出見尊

神高五百四十四石九十七石余、霧嶋西ノ御在所神社六坐、社官橋元休太夫

一野神権現 在向江村、例祭十一月卯日、社司上原左膳、

一権現 本地堂

一高拾石 橋木寺 吉祥院真大末松永村

一高三千石 称名院 念佛寺時宗相州藤沢山末 重久村

一霧嶋山 錫杖院 華林寺大乘院末西霧嶋山座主 中興開山兼慶

法印、俗姓柏原備前守橘美三男也、

一雲峯山 應忍寺福昌寺末

一旧記ニ、永祿九年丙寅閏八月八日彼岸サム霧嶋参、庄内衆三百

人焼死ス、一向宗也、

一天正二年正月、霧嶋神火動天地、

一明應四年、為將軍義材上使一色兵部太夫発防州下向此地、太守

公御對面是佳景、毎三州大乱也、自此地歸路、

- 一延宝五年、霧嶋神火、同六年正月九日、霧嶋神火起、
- 一享保元九月廿六日、本文之通、
- 一古城障有、松永村河方南二有、本城を離事五町計、
- 傳稱、豊後国之凶徒楯籠と云々、其故二而候哉、近邊豊後田と云所有、古墓共有之、此所豊後勢戦亡ト云々、
- 一掛隈城、重久村二有、
- 一松永川、源自西霧嶋之嶽出、此流全安楽川ニ入、大津川鮎多シ、
- 一天正十五年丁亥四月十七日、霧嶋之神火震動シ、黒煙之上ニ白雲霏、一日ニ三度山魏敷立、
- 一西御在所神社者、御代々御崇敬有之、御家督候節御番頭御代参二而、御銀進納有之候、

嚙喰郡

- 財部 惣廻拾四里拾三町五拾三間、
- 上古、財部六郎正信領之、種子島氏之底備也、本ノママ
- 一北郷家世々傳領之、伊集院幸侃忠貞領之、
- 一四千三百川七石壹斗壹升九合、大隅之内財部、文祿四年御檢地忠棟ニ玉ふ、
- 一天文年間、北原氏押領ス、○天文七年正月三日、北郷忠相陷財部城為居城、
- 一新納家五代近江守忠統、易日州飢肥領下于此地賜領之、四十一年也、此外末古救仁郷也、
- 一天正八年、水保御出陣之時、北郷家方内、地頭北郷掃部介宗察米五斗式升五合、
- 一日光神宮 社司蛭牟田氏 所祭天照大神 相殿加茂上下大明神高拾石
- 一小牧山 法嚴寺 佛性院真大末開山權大僧都舜海法印 開基年

- 号不詳、高吉石余
- 一靈童山 興禪寺 臨五山派正興寺末
- 一渡瀬、此所庄内乱之砌築陣、守護方々関所有、主取平田狩野介宗應警固之、其外市成軍人助武重守之、
- 一古壘、右一乱之節、伊集院甚吉・猿渡肥前守等守之、慶長五年三月十四日下城、在北俣村、山城ニて要害嶮岨之地、堀切所々ニ有、東西南之方川流、西東之川流合、南東之方ニ流而、通都之城於竹之下川、
- 一荷込之渡、ハケ代より古井江之通路渡也、此所慶長四年庄内一乱之砌、平田三五郎戦死場也、

嚙喰郡

- 肝付家領之時、米丸出雲守兼持入道孤雲、
- 福山 旧号廻、惣廻拾八里拾五町三拾四間、
- 一廻氏世々領之、廻兵部少輔久元事盲目ニシテ、嫡子次郎四郎幼稚也、其費ニ乗、永祿四年五月十四日、御系圖ニ四日トアリ、肝付河内守兼続入道省釣掠取之、使肝付治部左衛門守之、
- 一永祿四年六月廿三日、貴久公・義久公大軍被率御発向、大塚御本陣ニ被遊候、今此所を惣陣と申山、○或記云、太右馬頭忠將を馬立守之陣ハ大牟礼馬立竹山と云々、右馬頭忠將を馬立ニ陣取、諸卒をして竹原山を令守、伊地知周防守重興・祢寝右近太夫重長・兼統致徒党、廻ニ来加勢仕候、同七月十二日、肝付賊徒急ニ竹原山の陣を攻、味方難儀ニ相見得候ニ付、右馬頭忠將馬立陣より竹原山ニ欲馳向、家老町田忠林諫而止之、然共不用被馳向候、凶徒伏兵を起し忠將戦死、其外戦死七十余人也、其紛ニ省釣及祢寝重長・伊地知重興城を出て恒吉ニ退去ス、此合戦之時、大塚御陣より梅北宮内左衛門・瀧間美作守等走統致

力戦、無難肝付勢を追崩す、

諸家大概云、源姓廻氏ハ、源三位頼政之子孫ニ而、代々廻を領し繁栄仕候、文書等過分ニ有之候得共、致紛失少々相残候、永禄年間、廻氏ニ盲目有之、其子幼稚ニ候を、肝付省鈞攻亡領知申候、子孫衰微仕申候、近年迄此嫡孫廻太刀之助・倫之助と申候而有之、太刀父子共當分ハ親類家内ニ手札抔申受、昵近ニ而無之、此家邊田七人之内ニ而、上井・敷根抔相並候家とアリ、

一古城主記云

一太守元久公之時、祇肥伊豆守令居住、應永年中御上落之時、御供嶋津国部となつて、將軍義持公へ拜謁ス、此時被任伊豆守、先祖ハ源氏頼政之苗裔ニして、兵庫太郎と云る人隅州江下り、廻之城主と成、代々令居住と記せり、右兩説是非難考、

一宮浦神社、延喜式神名帳、嘯啖郡三座小、有之一員也、
一千四百七拾三石四斗七升九合 大隅之内 めくり

右、文禄四年六月廿九日御檢地也、上以御朱印忠棟ニ玉ふ、

山崎、康正之比、伊東・北原之軍勢、廻・敷根・上井三ヶ所ニ勦入引退刻、忠国公喰留被成、此地ニて合戦初り、宮内社家之人数横入ニて御勝利也、首級千三百四ツ打取被成候云々、二月

廿四日と有之候得共、年号不詳、

祭米三斗五升 一宮浦大明神 社官坂本氏 所祭天神七代地神五代到神武天皇

祭禮正月元日

高宅石余

一石上山

不動寺

真大末

開山勝岩和尚

開基年月不知、

高拾九石八斗貳升

一永泰山

大安寺

曹大真流

下西上野長源寺末希明派

心翁様御牌立、

一忠將基、馬立ニ有、天正三年亥仲冬、右馬頭征久為慈父、忠將

右塔此所ニあり、

一廻合戦ヶ原、貴久公聞忠將戦死、我師終ニ察不利、故瀧聞美作守・梅北^(高丸)刑内左衛門尉等被差遣、防戦引揚於人数、得敵首数多、於是兼統・重長・重興等敗軍して向恒吉退散ス、此合戦之場ハ、忠將石塔方東一町余、谷頭通路方北之方畠也、

一大塚と惣陣、一竹原山、一馬立、此三ヶ所陣場并合戦之場也、
一於福山陣大勢戦死之人々、町田加賀守忠林・町田軍四郎・酒匂

源左衛門・石谷因幡守・益崎平内左衛門・宇宿大学左衛門・敷根掃部兵衛・桑波田左近・多田隈源兵衛・有馬与一兵衛・海江

田八郎三郎・山内孫左衛門・坂本弥一太・岩城新三郎兵衛・福崎助八郎・中村宗四郎・池山備後・泊助六・高野左京亮・大寺

大炊介・三嶋兵庫・能勢二郎三郎^{田布}・竹下和泉・稻留石見・森助三郎・石塚雅樂・平嶺満右衛門・飛松帶刀・長田弥四郎・

木下縫殿・新納又八郎、其外坂本・武元・草摺・宮田・市来・有馬^{清水}・益田・添川等、都而七拾四人と云々、

嘯啖郡

敷根 惣廻六里三拾五町

一建久八年三月交名注進案ニ云、宮方敷根次郎延包卜有、

一居城之年間不詳、土岐四郎左衛門尉国房敷根之元祖ニ立、清和天皇十三代土岐隱岐守光貞、六代弥太郎安基息男也、自是代々敷根城を守る、文禄四年、一所衆繰易之節、敷根中務去此地、

下大隅田上ニ移ル、敷根筑前守頼寿代々嶋津之号御家の字を賜、嶋津筑前守久頼と改む、爾来世冒御家号、且土岐守頼勝二本氏

を令免許、二男已下号上岐、

宗祭本宮七升五合

一銀大明神、社司瀬戸口氏、祭神一座、日本武尊

一福如山 蓮持院真末末 一寿永山 瑞護寺 福昌寺末

開山権大僧都法印明済和尚、

一敷根城、元暦元年甲辰、土岐四郎左衛門尉国房、後鳥羽院御宇賜大隅州小河院之内敷根村、下着其地、数代居住于此、當代會乱逆之、難支而逃球麻在片傍、其子堅太郎頼房代遂參越、則如元賜敷根村領知之、嚴親国房逃球麻経三十六ヶ年而再賜當地、子孫相繼而十二世領此地、中務少輔頼賀代、文祿四年乙未八月去此地、移下大隅田上城也、

一天文十七戊申、肝付氏背太守而不出頭、たゞ出頭せずのみならず、催軍衆來侵封疆、故同二十一年壬子、以降敷根一城為標目致防戦者廿四年、而後退治肝付家、感其忠功賜隅州春花・益田之地高千石於太守義久公也、

鴨喰郡

小嶋在濱之市沖、武備志日本図ニ小嶋と有、此嶋を云り、内村湯・此湯功少々也

国分

上古作国府、惣廻拾六里拾八町五拾三間、

一天文十七年、自家久公賜清水曾小川、嶋津右馬頭忠將以久迄領之、

一慶長十六年辛亥正月、義久公御逝去、後より地頭喜入大炊入道紹嘉、

一富ノ隈城、在住吉村海邊、武士のさすかに懸し梓弓春とはいわし今朝のしら雪、城内社有、住吉大明神、稻荷大明神、忠久公、一文祿四年乙未十月、龍伯公築此城、鹿兒島本御内より移玉ふ、于今構石垣等顕然たり、

一新城、在上小川村、昔は隼人の城也云と見へたり、清水の本城

に對して新城と云と見へたり、本ハ清水の内なり、○天文十七年本田叛逆ニ依て、伊集院忠朗奉て攻之、五月廿二日より同廿四日迄攻落也、即城を樺山善久ニ預玉ふと云々、○天正四年高原御陣之時、上井日記ニ、清水新城ニ有之候、只今之国分之事也、相見得候、○慶長九年甲辰十二月、去富隈移国分新城、但新城之山下ニ御屋敷構也、

右城内ニ五社、慶長六年辛丑龍伯公御建立、社司谷口彈正、一咲隈城、傳曰、鎮西八郎為朝居城也、○觀應三年、貞久公被攻落之候、○天文十七年、本田家より財部淡路守守之、天文十七年、本田退治と云伊集院忠朗を被遣、三月廿五日出船、經海路翌日到濱市、直ニ宮内ニ抑通、此城を構向城トスト云々、宮内社家留主桑波田八内ニ三角道賀を以申入、御人數を引入と云々、一小濱、長濱と云、道鑑公御代、十郎氏純守之、一永祿之比、平田狩野介宗應領之、○天文十七年之比、樺山善久領之、

一渋谷・本田合勢而、小濱邊土ニ進來事数度也、伊集院忠朗咲隈城ニ引入、廻策陷此堡、小濱ノ兵或離或合不滅、

一上井城 上古稻入五郎弘氏領之、其子孫諏訪氏守之、三輪姓之人也、天文之比、本田家支配ニ成、同十七年、本田逆心之時、背之守護方ニ降ル、此城久満崎城と云歟、城下大山祇一社ハ上北河内也、

一節外城ニ被召立、其後又国分之内ニ加ル、

一天文十七年三月廿四日、渋谷・本田合勢之節、此地を放火ス、

一天正之比、嶋津右馬頭以久領之、

一文明十七年乙巳三月三日、豊州家より攻取之云々、

一義久公第一女嶋津義虎之室、薩州家文祿年改易之後、肥後名古

(前カ)

屋へ御滞留後、上井ノ平ニ被成御座候故、奉称御平松様候、天文廿年辛亥八月廿二日誕生、母 日新公御女、慶長八年癸卯十一月十二日上井ニ卒玉ふ、法号蓮昌妙守庵主、

右被成御座御屋敷之跡、石垣于今相残候、屋地二重ニ有之候得とも、上之重御屋地と相見得候、廣さ一反余も可有之、上井城山下測龜院之上、此寺之境内ニ而候、城大手口右之方也、一大穴持神社、在小村、神主谷口相模、大宮司宮水經清、

続日本紀三十五ノ卷、光仁天皇寶龜九年十二月甲申、去ル神護中ニ、大隅国ノ海中ニ有神造レル島、其名ヲ曰大穴持神、

至是為社、

祭米喜石^{イニ}神社、在上井村、社人斜木丹治、例祭二月初午、

九月九日、十一月初午、

延喜式神名帳、嘯喚郡三座并小トアル其一也、然由来不詳、故今誤其傳、

一古日記云、貞和五年己丑三月十八日巳時、大隅国正八幡炎上ト云々、

一貞和四年二月十八日午時炎上、一建武四回録、

一日記云、大永七年丁亥十一月廿八日、又曰、新納・本田着陣之時、社内之小舎方火起炎上、

一日記、和銅元年戊申、隅州正八幡宮立、人皇四十三代元明天皇和銅二年、顯大隅国桑原郡正八幡大菩薩、

一天文廿年辛亥九月十九日、造立之事ニ付繪言を日新公頂載、

一永祿三年、社頭再興成て、隅州正八幡宮極月十三日迂宮也、本願口秀上人、貴久公依命国分勧進ス、

一文安三年、正八幡宮炎上、

名所 気色杜、府中村ニ有り、歎の森、在同村、

春ふかき気色の森に立列て秋まで蟬の声を聞哉 家久公

明わたるけしきの森に立驚の上毛もふかく雪はふりつゝ順徳院

我為につらき心は大隅の気色の森のさもしろきかな 人丸

秋のくる気色の森の下風に立そふものハあはれ成けり 待賢院

古をしのはさらめや今とても道をなけきの森のことの葉家久公

春は華秋ハもみちのありなくに散るやなけきの森といふらん

枯にけり人のこゝろの秋風になけきの森のことの葉 遊行三十五世

ねきことをさのミ聞けむ社ニて果ハなけきの杜となる覽 讃岐

いかにせんなけきのもりハ茂れとも木の間の月のかへれなき世 橋俊家

を 大隅のなけきの森の下陰に立そふものハあはれなりけり

音にきくなけきの森を来て見れハ立添ふものハあはれ也けり 西行法師

イニ神新古今集 秋近き気色の森になく蟬の涙の露や下葉染らん 諸国行脚之時

秋近き気色の森になく蟬の涙の露や下葉染らん 諸国行脚之時

夕涼身にしむ計成にけり秋の気色の森の下かせ 從二位成経

見るまゝに移ひにけり時雨行気色の森の秋の紅葉は 左近中将朝頭

移行気色の森の下紅葉秋来にけりと見ゆる色哉 兵部卿有口

梢にはおそき緑を先見せし春の気色の松の下草 前大納言重賢

あめきりを空にへたて、すゝしきハ秋の気色の森の下風

中院通茂

一 波谷・本田合驛而、小村・濱の市両地を放火、

一字豆峯、俗曰山元門之上也、此所上古宇豆峯神社垂跡之地、當矢嶽

分之社頭此所辰巳の方四五丁計下之地ニ鎮座也、宝暦五年亥

三月に造替、同廿日寶殿柱立、同四月十八日拜殿柱立、同廿三

日御供所相立、同五月九日成就、同六月一日夜丑刻、井上宮内

并中馬采女・西郷大膳・有屋田佐平次、其外社人出會遷宮有之候、社司斜木出雲也、

一 南浦文集曰、慶長六年辛巳夏之仲、龍伯尊君相脩鑿山通江、

以欲宮府第於此地、其用人者非物情之所欲、蓋避ニ其地之低

湿一、去歲甲辰日、遺下佐多宮内少輔忠増遠至ニ洛陽扣陰陽博

士正五位上加茂朝臣在信公之室一而問中其地之誠否上、在信修ニ

鎮地鎮龜之秘法一、坐揚府第之四維於泰山之安ト云々、

一 獅子隈、内山田村に有、正福地上也、

一 平隈城、新町村ニ有、其中ニ堂有、

一 西宮四所之宮、始良庄、荒田庄、栗野庄、蒲生庄、

一 正宮十家、隈元、田口、大津、崎田、若宮、桑幡二家、三角、

神田橋兩家、○宮、鹿兒島神社、延喜式神名帳、桑原郡一座小、

○鹿兒島神社所祭、二座、彦火々出見尊・豊玉姬也、傳稱、神

武天皇創建、

古桑原郡之内、今曾於郡之内也、

○正八幡宮、在内山田村、所祭、中應神天皇、東神功皇后、西玉姬

命、座主弥勒院、御代々御崇之神ニテ、吉貴公已來御家督涯ニ當番頭御名代ニテ、白銀進納有之候、

神主、留主・桑幡・沢・最勝寺、
天台宗也

○古正八幡宮・鹿兒島神社一致稱正八幡宮、吉田家本書鹿兒島神社者正八幡有之、

○正八幡、人皇三十代欽明天皇五年甲子、始鹿兒島神社之宝殿有、

正八幡宮頭座石清水谷法寺傳有之、

一 神領高七百四拾三石三斗五合六勺五才、御祭米式石五斗、
右寺之内

一 六拾石、油田、一卅六石六斗五升式合余、修甫田

一 六百卅三石壹斗四升五合余、社家・僧家給地、

一 早鈴大明神、在小濱村、
棟礼、嘉吉四年甲子二月廿二日、大旦那藤原氏平、大願主藤原

齊平、

早鈴大明神宮へ龍伯公御參詣雨乞御詠歌、写国分住所ニ有、

本書紛失、

五月雨ハ雲かさなりて常にふれなへて田面のうるふハかりに

社殿へ奉納成ける時、雲氣甚敷雨ふるといへり、

一 石體宮 在内村 天永二年子四月二日、檢使差下、三日同廿

日迄焼候處、石體宮頭全文、

一 蛭兒社、号三宮大明神、例祭正月元日、二月初西、三月十日、

十一月初西、十二月廿六日、在内村 社人波多市太夫、

一 山崎、康正之比、伊東・北原か軍勢、廻・敷根・上井三ヶ所ニ

勤入、忠国公此地ニて御合戦、宮内社家之人數横入いたし御勝

利、三月廿四日也、首數千三百四級打取、首美見御役ハ中島伊

賀守降直と云々、年号不詳、

一 咲隈城、在内村、西宮東臨山也、西宮の社人等属味方楯籠申候、

一生別府城、在小濱上、大永六年ハ樺山美濃守倍久此城ニ移而、

敵屢懸来、倍久子善久、天文十一年、日新公御下知ニて本田ニ

去渡、同十七年、攻取之善久二賜る、沖ノ洲・大野原を加へ拜

領、生別府を改号長濱云々、

祭米五斗式升五合

一崇廟伊勢天照大神宮 社官斜木右膳、

祭米三斗五升

一富隈稻荷大明神 濱之市 社司中馬氏、

慶長二年丁酉御勸請と云々、例祭十一月初口日

祭米三斗三升五合

一大穴持 社官谷口氏、

大己貴神前ニ而雨乞

龍伯公

照るとてもことわりなりや日の本にふらすはいかて天か下とハ

一國分稻荷 座主金剛寺 社人右同人、在內山村、正福

獅子尾有 高式石五斗三升

一馬頭觀音

高五斗石

一五峯山 龍護院 金剛寺 真大末

慶長九年甲辰創建、開山覺遍法印実溪、

妙蓮大師御牌立、持明様御母堂也、

高三斗石

一文明山 龍昌寺 曹福木

西宮神之内 高四拾三石余

一宝来山 淨荒提院 西高寺 真大末 内村

慶長十年卓剣、開山石屋和尚觀請、

一補陀落山 光明院 正護寺 弥勒院末 西宮社僧

永仁年中卓剣、開山田カ應禪師、正八幡本地所三ヶ所之一、釈迦

如来、

高五斗石八斗四升余

一靈鷲山 正興寺、京建仁寺末、薩隅日五山派、

一梅靈山 無量寿院 正国寺、在內山村、律宗南都西大寺末、

元德年中創建、開山圓秀和尚、正宮本地三ヶ所之一、阿弥陀如

来格護、

一鷲峯山 勸持院 遠寿寺 御佛餉料八石、法華宗京本能寺攝州尼ヶ

永祿三庚申年卓剣、開山權大僧都日実法印実陝、妙蓮大師御牌

立、

御切米式石御佛餉料

一湖龍院 禪 同所安妙軒隔庵蓮昌妙寺庵主御牌立、御靈屋有上

井村、開基旦那義久公、開山俊済和尚竜舟軒、御平様御建立、

年間不詳、

一安界山 徳持庵 吉田津友寺末 上古天台宗、

貫明様御牌并義虎位牌立、施俄鬼料式石、天正九年卓剣、

一太平山 国分寺 禪清水傍嚴寺末

開基年号不詳、開基行基菩薩、中興開山代春、聖武天皇勅願所、

一國一ヶ寺也、代春ハ天文ノ比之人、

一佛光山 常念寺 時衆 相州藤沢山末寺

一下井村、天文十七年戊申、貴久公為忠賞上井筑前守為秋三、廿

五町を給ふ、

高百廿四石八斗式升余

一鷲峯山 靈鷲寺 弥勒院 江戸東叡山末

正八幡別當職僧都院家衆之格、天台宗靈府門首御寄附高式石、

一隈之城、自家系図、隈之城代々居住故号隈本、内村内石鉢村東

野山也、

建武四年之比、彦太郎為助守之、修理所檢校畠山直顯狀二、大

隅隈之城道鑑公ニ責落之下有、此城を云歟、觀應三年也、

一大津川、寛文五年之比、川筋直候歟、其節為水除用隈之城岩を

取築之、源出曾於郡、

一上井川、源出於国分河内村・清水之内川原西所、

一花西川、源出於清水之内、

一葉師、座像四尺三寸、箔佛、行基菩薩作、

一正觀音、座像一丈一尺、右同作、

右、国分寺古佛、當等庵壞而、元祿五年中和月寺殿落城、地頭

鳴津縫殿、

一當寺、楞嚴寺春永和尚再興ニ而、禪宗ニ成、

一高塚、在上井村、往古諏訪氏居住候所と申傳候、于今四方隴有之候、高塚山の神前ニて龍伯公、在川俣村、

梓弓春やとなりに咲はめく山口しろくにはふ梅か枝

奥山に跡たれいます神垣も心やなひく倭ことの葉

おに小松立添かけにひま見へていらかも高き神の御社

一近衛殿西国へ御なかされ、京の儀とゝのをり、御帰洛の折、大隅の冨の隈といふ所ニて御詠歌の会、

文祿五年七月十日、近衛前左大臣信輔公鹿兒島方御出船、同十日濱の市江御着船、同十一日御歌の会有、兼題

松陰新涼

立帰る名残こそあれ松陰ハ涼しき秋のやとりといへハ 杉

あつき口の影もわすれて影なかく松の下枝に秋風そ吹 龍伯

とひよるもかわらむ友と松陰にかたらふ秋の袖のすゝしき

進藤殿長治

枝しけき松の下露おちそひて初ねすゝしき秋の初風 其旨

早秋月

みるほともまたミしかよや秋といへハ月にあかなれ初なるらん

杉

薄露

ゆく袖をむすひもとめよ糸薄末葉の露ハ玉と散とも 龍伯

河霧

秋風に真帆ひく松の行衛にや分ていらまし瀆の河きり 杉

寄鏡神祇

神垣のうちゆたかにも移しおく心や代々の鏡なるらん 龍伯
右之外略之、

国分ニ移り、大中良等の夢想のありて、うたに、

慶長十九年霜月六日

今朝ハなおふりかさねたる白雪に絶ぬハ水のなかれ成けり

奥の小嶋につりさせ、酒のミてあそひし時 義久

見るふさのなかき手繩を打はへて静けき波の海士小船かな

慶長十年五月方七月迄大旱の時、雨乞の御詠 義久公

山めくる雲のさそはて雨露て大御田小田の早苗うるをや

宮内狩之馬場の松に虫付て、枯そふに見へし時御発句

夏や猶玉松かへの深みとり

義久公

○或記云、国分寺ハ八人皇四十五代聖武帝ノ天平九年丁丑、詔ヲ天下ニ下シ、国毎ニ肇テ国分寺ヲ造ル、コレヲ金光明四天王護国ノ寺ト称ス、僧ノ員二十人、同十一年己卯、又天下ニ詔シテ国毎ニ国分尼寺ヲ造ル、是ヲ法華滅罪寺ト称ス、尼ノ員十人、総テ国分寺ヲ以テ称トセリ、コノ寺ハ蓋彼護国ノ旧跡ナラン、中コト廢壊せるを以、曹洞ノ僧某コレヲ再興セシト也、

贈喉郡

清水 惣廻九里拾九町拾貳間、

一天正之比、鳴津右馬頭以久領之、

一永和二年、太守攻取姫木・清水両城、使本田因幡守親治守之、

忠国公御代、本田因幡守因親領之、其子因幡守兼親・因幡守兼

安・次郎左衛門兼親代、天文年中落城矣、

一姫木城、上井日記、天文二年鳴津右馬頭領之、大手口唱石原口、

貞久公御代、城を守ハ姫木十郎大中後姓之人也、上古より姫木の郡司と旧記ニあり、

○諸家大概云、建部姓弟子丸氏ハ、清水之内弟子丸名致領知致家号候、氏久公より弟子丸檢校へ被下候文書、弟子丸名知尾村之事、為申親之地故被下候と相見得たり、彼地代々領知仕候、貴久公御代、近年ハ弟子丸藤左衛門真幸吉田移地頭被仰付置候、弟子丸治兵衛嫡家ニ而候ト有、

○氏久公此城ニ御座候時、敵寄来度々攻合有之、御勝利也、石原口ニ御勢を取揃と云々、河保か居も而ニ東サス尾より金吾石迄敵攻入、其後味方篠峯の横人をも三合と、かんぬきの瀬戸・税所之両城合迄攻入、又敵方田間向る金吾石迄切付、度々合戦候へども、敵本田重親・河保弥太郎其外數十人被打取候、御舍弟出羽守手負れ候出、公御自筆之御状二十二月廿九日ト見得候へども、年号不詳、今案ニ、敵ハ本田重親・税所を頼、曾於郡之人數今引出スナルヘシ、然者又安四五年之比歟、

一清水城、芦原山陰朝城共云、弟子丸村・山之路村両村ニ有、此城地山下ニ征久屋鋪之跡有、

税所氏守之、永和二年、氏久公攻取之、本田氏親其子親治父子ニ預給、親治六世之孫紀伊守薫親仕貴久公、依在忠功數ヶ所賜新恩之地、威勢強太ニハ驕を増す、其子左京太夫親兼無道也、依之一族家臣等逆乱ス、故ニ貴久公治伐之、天文十七年十月九日、薫親父子没落庄内落ス、日新公則城ニ入御、貴久公ハ同十四日入御有之、一兩年御在城と云々、

湯之峯、右城責之時、此所ニ而茂合戦有之、今世俗唱山野、城北ニ當ル、木

○天文十七年三月十一日、姫木城主本田又五郎親知上井城主ニ引合、惣領紀伊守薫親ニ叛、薫親攻之失利、其後又五郎北原氏ニ乞加勢、故真幸之人數姫木ニ入守、時ニ又五郎後見同氏武部、嶋田民部守護方ニ申入、同年九月五日夜、守護之兵を招入、北原か兵を打取候、北原狩野介詰之城ニ引籠、樺山善久生別府方来り和を入、狩野介を真幸ニ飯し城を受取、是ハ清水弥逼る、此時伊集院大和守忠朗將トハ抽軍功故、地頭を下さる、

一天文十七年九月三日、外郭落る、同十二日本城落城、日州庄内ニ退去之時、柱ニ源氏物語を思ひ出し、左京大夫親兼薫親事也立馴し枕のはしをかハるイニスルナリなよめくりあふへき時しありやと

樺山安藝守善久入道玄佐是を見て

なかれ出て歸る瀬もなき水基のあとはかなくも頼世哉

一永祿七年、又四郎領、

一伊集院大和守忠朗地頭、

右二ヶ条、姫木之条ニ入ル、可敷、

一隅州曾於郡清水之内

三千六百六拾四石三斗八升八合

曾小川村

千七百石九斗六升三合

上小川之村

三百石

みなと村

五拾五石五斗四升三合

船付村小むら

六百七石五斗四升

敷根之内持富村

合六千三百廿八石四斗四升八合、文祿四年賜御檢地施石田治部

少輔、慶長四年正月、朝鮮御軍功ニ拜領、

一諏方大明神、棟札、永正十三年卯月十四日、本田因幡守兼親、

一天正八年、征久領清水・新城・上井・福山、

一弟子丸村五町、建久九年三月十二日之旧記ニ、田所建部宗房所知とあり、

一夕暮の閑、古墓有、宗像氏之人と云、通路筋也、

一清水城、五口在、大手荒原口、搦手口豊之口、札之辻有巢堂口、落水口、玄龜廣口、

一守公神社、棟札、奉造守公神宮一字、大檀那藤原朝臣義久并守護代又四郎征久、同守護代町田治部、大願主小嶋三河守源喜・繩目源七郎、永祿七年甲子三月七日、

一再興棟札、藤原家久朝臣、當地頭鎌田左京亮政徳、于時元和五年己未二月吉祥日辰日、再興奉行清生宮内少輔、

一棟札、奉再興北辰大明神、大永三年癸未三月廿四日、願主本田因幡守兼親、兩度興記馬、大工四郎左衛門尉家次、

一石原口、一寸尾、一金吾石、一條嶺、一今城、一かんぬきの瀬戸、右諸所、合戦場也、

一お陰之城、姫木城西北之方有、天神社立、又小城共云、
一簇掛城、国田村有、

竹林山 衆集院 壹明寺、真言宗 在山之路村、

開基之祖行賢上人、中興榮賢法印、天智天皇之勅願所也、境内有日枝社、社前有竹林、是所謂青葉ノ笛竹出處也、往古毎年笛竹之勅使来、在庁官人・僧侶等致笛竹繁茂令、

○當寺ニ、建仁三年十月十九日、忠久公御判之御願書有、外叔父比企判官能員謀反ス、就夫縁座而、明年九月四日ト、薩隅日三州之東鑑ニ有リ、守護職を被収公、然共公在国故、不与返逆之事明白ナレハ、如元三州之守護職被補候而、鎌倉御参觀之時節、不知不異之愛、兎国之砌、此御願書を山王宮ニ籠給ふと云々、太守、天智天皇

勅願所ニ而、笛所貢御之地繪旨、其外將軍家御判之文書許多有之候、

宗祭米五斗式并五合
一北辰妙見 祭神北斗星 弟子丸宮間可有 社司谷口弾正 例祭

十一月一日、
祭米壹石
一守公神 頼朝公 左忠久公 右丹後局 弟子丸城内ニ有、

一日吉山王 臺明寺格護 山之路村臺明寺境内ニ有、上古地主権現と云、其砌地主官ニ鎮座、于今森有、例祭九月十九日、

一佛頂山 楞嚴寺 曹能州總持寺末、我山五折之通幻派下天真派、

應永年中草創、開山天真自姓和尚、應永廿癸巳年正月十三日寂ス、

桑原郡 和名鈔、国府在桑原郡、

跡 忽廻拾四里拾六町式拾貳間、

一北原氏領之、其時地頭白坂美濃守、湯泉安樂湯・栗川湯・惠飛湯・硫黄湯

一天正二年之比、肝付兼盛領、

一西之城、持松村、

一三鉢堂村、自家系図ニ、永祿年間、肝付弾正忠兼盛為忠賞、義久公方此地を賜、

○新納忠真之食邑也、寛永十四年七月十八日、七十三、于此地卒ス、

一豎神大明神、棟札云、天文廿一年九月廿七日、大旦那北郷讃岐守忠朝・同尾張守忠親・同次郎次・曾於郡地頭財部筑前守、

一踊城者麓方半里計西南之方也、東之方野頸と申候而平地ニ続候、南西北ハ深谷ニ而、急流ニ山川城下を繞し、橋なくてハ絶而無渡之、石壁俄々と山下方見上も得ず、鳥も翔かたく候、俗説

之云傳、昔日敵寄來といへども、城中ハ少も周章せず、踊をして
いる故、踊城と名付といへり、日當山堺也、城下之谷を限、西
之方ハ日當山也、

祭米寺七井五合

一 崇廟妙見三所大菩薩 社司上原氏、

一 慈峰山 長久寺 真福院 真大末

一 日峯山 東光寺 禪福末

一天文十九庚戌、北原氏戰我動干戈來、兼統・同兼盛到踊地防戰、

二 男兵庫助兼通死之、敵遂退散と云々、

一 安樂川、源踊鹿倉、出合松永川、到国分称大津川、雖多、

桑原郡

一 日當山 惣廻七里貳拾貳町三拾貳間、

一天正年間、肝付彈正領之、○貞久公御代、中津川勘解由左衛門
守之、

一日當城、在城也、西光寺村、天文之始、本田氏三賜、同十七年

三月廿四日、北原某攻取押領ス、同年八月晦日、伊集院忠朗將

と攻取之給ふ、平良尾張戰死ト云々、

一 上井日記云、天正二年霜月十九日、大隅東郷を朝久御格護候、

是をツあけ而市成事成す様ニ、先刻口置越後守江承歟、是又由

來者其所方御詫々々トアリ、

一 佳例川村ハ肝付兼國領候歟、文龜三年、肝付兼固、大永二三月、

肝付兼演、

一 城山ハ麓方西ニ有之、四方谷合ニ而、田地又ハ小河有之、大手

ハ東之方ニ而候、古來麓方屋敷ハ當城方西之方、西光寺邊ニて

為有之由、天文十七年八月晦日、伊集院大和守忠朗乘夜闇拔日

當山城候而、北原家臣平良尾張守・白坂助左衛門已下百余人屠
殺候由候、私云、城壁之下平良氏墓其外余多有之候、城之高サ
通路方四十間有之由候、城内堀切有、用水潤沢也、

祭米寺七井四合

一 宗廟日吉山王、康治元年、行賢上人勸請、社人南条留、祭神廿

一座、棟札、當檀那大願主嶋津豐後守藤原忠朝、大工三位大夫

藤原道国、小工藤原国家、奉行日置美作守藤原俊久、于時永正

十六年己卯四月二日、

一 三光院、上井日記、天正三年十二月廿日、如常出仕申候、和光

院歳末ニ參候、取成申候、此日談儀所御參也、趣ハ日秀上人今

月八日入定被成候、為御使宮内江越被成候、其通事御申候也、

同上人自筆之物共進上ニ見得候、委ハ不存とあり、

一日當山 淨土院 西光寺 真大末 行賢上人創立 開基年号不詳、

一 満樹山 東林寺 曹福末 開山泰雲和尚 妙蓮様御牌立、

一金峯山 神照寺 三光院大乘院末、日秀上人入定家、

一 額姓左馬介久政領地、伊集院之内轉西侯、自太守家久公賜當地

東郷村、

一 かくいが城、在西光寺村、小壘・地畧二有之、城隍今通路也、東

ノ壘ニ今霧嶋宮有之、北東南大河廻流城壁、日當城方東之方十

丁計ニ有、

一 西光寺鐘銘

肥後国古保里御領善導寺洪鐘一口

右志者、為常御領本家領家地頭直人庄官口官百姓惣助成、人々

各現世安穩・後生菩提、兼又法界虎生平平等利役也、大勸進僧西

蓮、大檀那沙弥西念、弘長三年才次九月十二日、

桑原郡

横川 惣廻拾二里三拾五町六間、

一應永九年八月十六日、從久豐公賜御證判、菱刈安藝守久際領之、

一應永廿九年、北原久兼領之、

一永祿五年、攻殺城主北原伊勢介・同新介、而後賜菱刈氏、

一應永七年二月十日、元久公為忠節之賞、被宛行當院之内上ノ村

領知之、

一大永六年、樺山玄佐ニ賜之、○玄佐日記ニ、横川ノ隅城へ地頭

と有、

一宗廟安郎大明神 社司月野木氏 祭神靈軀、

一旧記ニ、島津庄大隅方寄郡、田數七百十五町八反三丈、内寺社

御寄附分、横川院三十九町五反二丈、安樂大満宮御寄附、建武

三年二月 日と有、

一承久之比、横川藤内兵衛尉時倍令居城、系圖ニ大隅国守護とあ

り、安藝判官基盛男、左馬頭行盛子、肥後守信基之ニ男、藤内

左衛門尉信行息男也、二代新藤内左衛門時盛、三代三河守時吉、

四代太郎左衛門時種、系圖ニ越後国守護とあり、如何成事ニて

越州之守護ニ被移歟、不詳、五世太郎左衛門種清、越州之守護

也、六代河内守種信、七代大膳亮種盛、八代大膳介種道、早崎

三郎左衛門号す、九代河内守種氏、此人ノ末子孫不見得、其已

後ノ横川城ハ北原氏令領地、

一伊集院久春地頭之節ハ、本丸ニ居られ候由候へ共、太平之時分

不自由故、後ニ者仙寿寺馬場と申城之麓ニ移居、于今久春父子

之屋鋪と申傳ニ而有之、

○横川城、永祿五年六月三日、使忠平歳久ヲ攻横川壘、

貴久主屯軍勢於溝邊、扶勢新納刑部太輔・伊集院源介久春等扈

從、而忠平指揮汗馬乘勢蟻附ノ攻之、城主北原伊勢介・同新助

奮出、本田刑部少輔・瀧間美作守会彼挑戰ス、忠元・久春等有

戰功、歳久又卒古田兵攻入城門、血戰ノ被疵、伊勢介・同新助

勢竭自殺ス、則壘陷獲城、將及士卒首數員、味方戦死又不少也、

則此地を昇菱刈氏也、

但此地義弘公ハ野頸ノ、歳久公ハ大手口ノ御攻被成候由候、

北原氏塚有之、杉本也、

高壹石 一安良山 真乘院 大乘院末、

高壹石 一萬鬼山 仙寿寺 禪栗野徳元寺末、

一永祿五年壬戌夏、貴久公陷横川城而昇其地於菱刈、大和守重猛

領之、

○横川壘、麓ノ有西八丁計、南方野頸相統、西東幽谷、東北小川

流大手口有、大手ノ東荒神城有、西野頸之山上ニ軍配松有、忠

平公軍配分玉ノ所也、

一古壘、号内記城、本城ノ東之方高岳也、由緒不詳、

○金山、在山ケ野、自官使堀也、

桑原郡

栗野 上古正宮神領、惣廻拾貳里拾五町七間、

一建久九年之比、栗野郡司守綱与有之、

一北原氏世々領之、永祿二年、北原兼守領之、

一永祿四年十月二日、貴久公以御證判、百二十町菱刈大和守ニ賜

ふ、

一御系圖、天正十七年己丑、義弘公飯野ノ栗野ニ移居し給ふ、

栗野院百式十町、依為望所宛行也云々、

永祿四年十月二日

貴久公

本ノママ

菱刈大和守殿

一 崇廟止若宮八幡三所大菩薩、社司木之瀬氏、棟札、天正十三年乙酉、大願主源義知、建立年間不詳、神領高式石、祭米五斗式升五合、

一 棟札、天正十三年、寶殿造営、

一同十八年、拜殿造営、

一天和九年、宝殿造営、

一 熊野十二所権現、一、觀音堂、

棟札、天正七年、大願主源義知、造替棟札、長祿二年十二月廿六日、大旦那藤原久則、大願主、

一天正十五年六月十五日、義久公御上洛、発於鹿兒嶋亭宿帖佐、

同十六日、発帖佐到着于栗野之高田、宿于此、

一 義久公到北原之領知栗野、此時北原親猷献栗野於太守、以遂参謁、故相良氏之守兵悉去飯野、御飯球麻、

一 栗野城山、文祿元年辰二月廿七日、惟新公高麗御出陣、久保主

ハ同年三月廿八日、

惟新公天正十七年方御在城ニ而候、文祿四年迄被遊御座、高麗にも栗野方御首途為被遊由候、御屋鋪之旧跡有之候、其時分本丸方二ノ曲輪ニ橋為有之由候、大手ハ西口ニ而、一二之曲輪之間を通り、本丸之腰を北之方ニ迫り候、御本丸の口ハ東向ニ而候、本二之外、御厩城・八幡城・弦懸城・松男城・権現城・新城・半助城・鷲尾城と申ハツ之曲輪有、栗野城惣名を辿ニ、葉山松男城、又男山栗野城と申俗説ニ様有之、

○上井日記、義久公高原御発向之時、大正四年八月十七日、栗野

地頭比志嶋式部少輔、八幡之御前之小路迄被罷出候、拙者者愚才次郎左衛門馬関田地頭役ニて罷居候間、彼所江今夜通可申由、三原右京亮ニて申上候而罷通候、御宿者比志嶋式部少輔館と聞得中候、委ハ不居合候而不存知候とあり、

一天正八年、水俣御出陣之時、兵庫頭様内川上参河守忠智地頭、一惟新公高麗御出陣之時節、八幡宮江御参籠、其夜雪のふりけれハ、

野も山もミナ白旗となりけり今宵の宿ハかちくりの里

一 北里城、古城記之内の、觀應三年、貞久公被攻落之ト云々、

○永祿五年方義久公栗野ニ御在城、

高宮石

一 智明山 蓮乘院 大乘院末

一 福城山 徳元寺 開山竹居和尚 開基年月不詳、蘭溪純香大禪

定門、

一 稻荷大明神 在木場村鞍之北山、

右、永祿七年、義久公御建立、義弘公御子久四郎忠清御牌所、

一 古壘、麓西在半里計、由緒不詳、

按ニ、畠山直顕状曰、在与栗野北里城謂、此城歟、称北里城名今不傳、且松男城外常郷無古壘、

桑原郡

吉松 旧名筒羽野村と云、惣廻九里三拾町式拾五間、

一 上古愛甲氏領之、後北原氏領之、

祭米百七升五合

一 宗廟箱崎八幡 所祭三座 神功皇后 應神天皇 武内宿祢

永正十八年棟札、大檀那伴久兼、願主伴兼源、

一八幡宮鐘銘云、大隅国筒羽野箱崎八幡宮、大檀那沙弥愛河并豊前入道沙弥道景、永禄元年辛酉八月廿五日、

一諏訪大明神、天文十三年、青山佐渡守照統建立、

天正十四年棟札、大旦那伴祐兼、願主青山佐渡守藤原昭統・同上野照前、

一亀ヶ城天神宮、在崎丸村、文和三年、大神元義伴久兼建立、棟札有、往古亀ヶ城内ニ鎮座、城之鎮守也、其後義弘公飯野御在城ニて、吉松御城之儀、日隅之堺目城ニ而、御念遣之場所故、當宮別而御崇敬、天正年中今之地ニ御勸請と云々、

○永正十六年己卯十二月廿三日、棟札、大檀那伴久兼、大願主万休庵主德養、藏司同名秀忠、

一霧岡八幡宮、在鶴丸村、右本丸霧ヶ城鎮守也、當城ハ義弘公御繩張被遊、被号霧三亀城候也、旧記等雖為有之、寛永十四年九月十二日焼失と云々、

一觀音堂、在般若寺境内、般若寺格護、

圓上聖人草創と云々、圓姓或性空と云、棟札、觀應二年辛卯十

一月廿八日建立、

一稻荷大明神 右同、

一日向山 九品院 般若寺 真言宗大乗院末、上古天台宗、開基年月不詳、開山性空上人、

天文五年丙申之夏、勝久公適總真幸北原氏而、居般若寺者右年矣、然而不得復去此適于郡城、又云、到豊後於沖濱

一内小野寺 新熊山 山王院 天台宗、本山人伏飯隈山末、座主愛甲相模坊、父祖光久法印相模坊之事、伊東御取合之時分有勲功而、三之山瀬太尾宮座主被仰付候、

一西之城、大永之比、新納氏領之云々、

一古松城、龟龜か城とも云、

一古松城ハ、惟新公御繩張之由申傳候、麓方東方八九町ニ有、南之丸と申所本丸ニ而候、北之丸と申曲輪も本丸同前之曲輪也、南北之方二三町計アリ、大手ハ北方ニて、東ハ吉田堺、城ノ北ハ深田ニて、吉田・馬関田・加久藤・飯野等之通路ニて候、大手ハ北東之間、小持板と云所あり、惟新公別而御念為被入所之由申傳候、

○慶城と申ハ、城山より西北之間ニ當り小高所あり、當分民家ニて候、日州方より菱刈へ通路之般若寺越之通路、是をも惟新公御念遣為被入由也、

○中城と申候而、田之中へ差出候小高キ所之尾城ニて候、是も要害之所と申傳候、本城・慶城之間ニ而、其間深田也、

一般若寺、勝久公為被成御座申、門前之内ニ奥と申屋敷御座候旨申傳候、古昔ハ勝久公之御屋敷と申儀、隱蜜為申由、古老申傳候、般若寺越といふ菱刈通路ハ、般若寺ハ北五六町なり、昔ハ吉松之内霧丸名迄日州之由候得共、隅州之内ニ中古より為被召加由候、

一筒羽野ハ、元來愛申某居焉ト旧記ニ有り、箱崎八幡之崇廟之邊筒羽野と申所ニ而候得共、當時筒羽野之境不相知候、永仁三年癸酉八月十五日、箱崎八幡宮愛申太郎左衛門景盛寄進状あり、尤筒羽野箱崎八幡とあり、右之文書、別當光照院管藏、

一天正八年、水俣御出陣之時、兵庫頭様内山大藏地頭、
一東向山 神宮寺 光照院 大乗院末 箱崎八幡座主、
一龜龜山 玉泉寺 禅般若清源院末

一箱崎八幡宮 在川西村 座主光照院、

右、義弘公御崇敬為被遊由候、貞和年中、筑前箱崎より勸請之由云傳ふ、縁起并由緒書等、天正五年之比焼失ス、

一御太刀一腰、在光照院、

一瓶子二双、在庄内、此二行、義弘公御寄進之由申傳り、

一神功皇后、在川西村、元和五年、家久公御建立、拜殿者承應二年大風ニ織倒而、本ノママ宝殿一宇光照院修甫ス、

一日吉山王社 在般若寺村 般若寺守護神云々、御修甫候者附ニ而候、貞和・觀應之比、勸音堂同村ニ建立歟、

一旧記ニ、筒羽野村四十八町五段一丈、嶋津大隅式部小三郎義久拜領、建武二年四月 日と有、

本藩地理拾遺集

下卷（諸縣国）

諸縣郡 口州、惣廻り九拾五里七町拾間半、

吉田 吉田 馬関田 加久藤 飯野 小林五ヶ所、惣名号真幸院、上古

祭米^{吉田}七升六合 草部氏領之、宮路氏歟、

一 崇廟天神宮 社司押領司代

一天正年間、義弘公御守護代ニ不被成御立、内右之諸所并栗野・

馬越・吉松・須木御領知也、

高^{吉田}石 一 南方山 福知院 觀音寺 真大末寺

一 寶涌山 昌明寺 曹飯野長善寺末 在昌明寺村

一 慶長九年甲寅、轉河邊郡内宮村、日州真幸吉田之内、正明寺村

及津留村之内を、肝付彈正少弼ニたまふ、

一 諸縣郡真幸院ハ、都而上古方真幸家領也、村上天皇之御宇、天

曆・天徳・應和・康保之比、北原周防守伴範兼領也、永祿年間、

為公領而、再給北原又太郎兼親、其後又為公領也、

一 古城^{在昌明寺村、總古北三町計ニ有、一二三九有、小城也、盧二ツ、大手口}

一 弓場地 此所菱刈表御合戰御出馬之節、勢揃之場と云傳、^{城々南}

口^方二丁計、

右同

一 稻荷大明神 一 山上小嶽 一 水天在向口村

在水流村 右三社者、白坂美濃守兼頼建立、

一天神社 傳稱、當社ハ川野四郎通安為守護神、通安下向薩州伊

佐郡那答院而、同所住境田村建當社、其子道正代移當地、為北

原家臣移於此地、為吉田郷鎮守云々、社人押領司親負、

天正十年五月廿五日、義久公當社奉納之御詠歌在社中、

陪天神於寶前詠十首和歌 修理太夫義久

立春 初春のけふ八千里の外までもみななひくへき朝霧哉

華 やとの春をよ所になしつゝ御芳野々花ハ幾日の日を送り剣

郭公 速々の月ハいつともきとなれてかへさわすれよ山郭公

萩 くる秋をしらまほしさによひよれハ萩の下葉はそよきこと

ふる

月 影すめる月には夜半のなかきをもおほへすなかもあかしつ

るかな

雪 草も木もふりしく雪の□ハけむりやさとのしるへしるらん

待恋 高砂の尾上ならぬとこぬ人を待心こそさひしかりける

逢恋 難面きを思ひ思ひて過こしも逢今宵こそうらみわするな

山松 足引の山となるより色かへぬ松のかしこき程やまたん

神祇 酒のみて八十氏人のすゑの世も和き傳ふるハ神そしるらん

一 當社棟札 大願主伴久兼、大宮司境田對馬守、藤原満元、享祿

四年辛卯十月十八日、

一 舞殿再興棟札、信心大控越藤原朝臣義弘 久保 忠恒、當地頭

藤原朝臣兼頼、天正七年己卯二月吉祥日、外二天正十七年十日

之棟札有、地頭同、

一大王社

棟札、貞和二年庚戌二月八日修造、源高秀・教國、外二文明七

年棟札有、

一 温湯、此湯治全瘡甚有驗味醪、

馬関田 上古真幸氏領之、其後馬関田文九郎、北原範兼ニて領之、

崇^{祭米}三升 一 威徳天神 社宮郷土黒木氏、天満大聖威徳天神川北村ニ在、所祭

少名彦命、

高^{六石} 一 花景山 宮樂寺 威徳院 真大乘院末、天神座主、

一 干城山 大圓寺 禪飯野長谷寺末、開山大境和尚、明主和尚

弟子也、

真幸院古領主北原氏菩提所也、北原氏塚多有、

一岡山山神社 在浦村、天正十二年十一月吉日之棟札有、

一天神社 池牟礼村有、傳稱、天文年間勸請云々、

一平野阿弥陀堂 在川北村、去加久藤德滿城西五丁計、

右、上古德滿城江安置也、傳稱、島津犬太郎久林城^{加久藤德滿}居住也、有

故切腹之後、崇阿弥陀安置於此地云々、于時殉死六人、犬太郎

殿有故、球摩^{肥後}之樣ニ被落行、難有催追手懸り、無是非此所

^{二而切腹也、竹添某介錯之云々、}

在川北村通原^{當郷土也、}

一民部塚 北原民部少輔^{民部少輔久兼三男、}於求磨境戰死之死體葬於此地、

号民部塚と云々、又曰、右民部少輔事有故、伊東義祐謀馬関田

右衛門頼之云々、孰不知是乎、

一天神社、或記曰、北原民部少輔ハ一向宗依為、棟梁平良氏^{三ノ山}居住

飯野城ヲ抑寄、民部少輔を殺害と云、又云、北原又八郎兼守^家嫡

死去之後、一族相議以民部少輔為後嗣、伊東義祐聞此由、謀馬

関田右衛門殺民部云々、

一古塚、麓北ニ有二丁計丸三ツ、大手口南ニ而口三ツ、廻り拾町余、小城也、

堀行石垣相殘也、

一古塚、城ヲ東六町計ニ有而号新城、球磨勢陣場と云傳、球磨越路之

傍也、

加久藤 上古真幸氏領之、當郷ハ元來飯野郷・馬関田郷之内ニテ、天正

年間外城ニ被召立候歟、北原氏代々領之、其後為公領、

一德滿城、曲輪三ツ、北方深谷有、惣廻り壹町計、小城也、

球磨相良氏某弟祐頼守此城、應永二年、祐頼生害、已後北原氏

悔先非、太守之交加勢而相良カ軍兵を追退、真幸院を皆領知す、

一元龜二年五月四日、伊東勢寄來攻之、于時不動寺之住持馳向有

之候、

一関所、在覆田村、肥後国求磨領通路也、

一御假や

崇 一三宮現王 社官黒木相模、別當二宮寺、

一三社、水天・妙見・荒神、社司沼田治部左衛門

元龜三年三月四日、忠平公勸請新城へ守神也、

高^{廿五石、斗九升、合六升}光林山 吉祥院 不動寺 真大末、

右高之内拾五石、幻生様御菩提料、

一瑞龜山 德泉寺 曹飯野長前寺末、

一高連山 福姓院 二宮寺、二宮社座主、宝永年中造立、大乘院末、

開山果融法師、

一二宮大明神、所祭仲哀天皇、當社者家久公御生出之神ニ而御尊

崇有之、吉貴公已來御代々御家督涯ニ者、當番頭御代參、白銀

進納有之、

一新城、在川北村、德滿城カ山涯之方也、忠平公御夫人當城江被成

御座候、家久公此城ニ而御誕生也、

一德滿城、^{旧記・馬関田}當院領主北原周防守・相良某^{肥後求}磨住^與党^ノ

對公治難有年、亦其比相良祐頼^{相良某}會弟^某於當城与周防守論論而共

打死、因茲、両家氷炭と成、周防守嫡子左馬頭久兼改前非元久

公ニ降訴ス、故援兵を當地ニ被遣、相良之人数追出、真幸院を

北原氏ニ給、

一総州家之嫡孫上総介久世嫡子左衛門尉久林、久世鹿兒島於干手

堂自殺之後、川邊江着城、合戰ニ及無勝利而、終ニ肥後州ニ出

走、其後當城江居住ス、然處ニ、忠国公被指向往討手於當城、久

林自殺、

一當地都而北原氏代々傳領之地也、又八郎兼守病死已後、一族家臣兼守か遺領を争而乱を起シ、伊東義祐・相良義陽モ又親是、于時白坂佐渡守隅州藩城主降公之旗下、倣之、栗野・吉田・馬関田手裡ニ入、自三ツ山東属伊東、飯野・西属公、然處、北原久太郎兼親北原之嫡流祖父之代出走求磨肥後國居住有年、在命而召常國賜當院、于時北原左兵衛尉兼親伯父守吉松城処ニ合心、伊東・相良・求磨之兵を城中ニ引入、依之、兼親被収公當院、被移于伊集院日置郡以後此地為 忠平公有、

一光林山 吉祥院 不動寺 大末 開山光林法印、開基年月不詳、

涼山幻生公義弘公御子鶴壽様御遺骨一靈納有之候、

一加久藤城、号新城、在川北村、本丸称御屋地、傳稱搦手口西ニ有、繪川口、義弘公御繩張之地也、義弘公御夫人宰相様當城被成御座、家久公於此地御誕生跡之杉有之候、往古杉大風三折、其後栽之木也、元龜三年五月四日、伊東凶徒經二江筋逼于當城責搦手口、於是榊山淨慶父子三人強拒之遂戰死、故敵不得破、其間二城兵突出テ追拂、故敵渡大河、北田渡瀬と云、城南六七町川向立備咸地、于時不動寺之住持以鉄炮射米良筑守、敵之其後加久藤・吉松等之兵追到木崎原也、一柿木壘、加久藤其南在式丁計陣城也、伊東氏去田原陣此所ニ築一陣云々、

飯野

一真幸院主北原兼幸、肝付家三男北原元祖右兵衛佐と号、當代領真幸院而以飯野為居城、法名明善大禪定門、二代左馬頭兼貞、三代右馬頭玄兼、四代左馬頭玄幸、天定大禪定門、五代周防守範兼、久天玄昌庵主、六代周防守或左馬頭久兼、天叟玄祐大禪定門、七代

長門守兼興、八代又五郎貴兼、九代長門守立兼、十代民部少輔兼珍、大樹玄棟大禪定門、十一代民部少輔久兼、十二代久八郎祐兼、十三代又八郎兼守、天陽昌雲大居士、到此兼守血脉断絶、雖然、嫡流在肥後國求磨郡、依公命再帰參此國、奉命為兼守之後嗣、十四代又太郎掃部介兼親と号賜當地、其後天正年間有故而被収公此地、被移伊集院神殿村、死後彼地自是忠平公居城也、

一北原氏世々傳領之地也、北原又八郎兼守病死後、一族家臣兼守か遺領を争乱を起、伊東義祐・相良義陽モ又同、此時二踊之城主白坂佐渡守城を太守ニ献し降參ス、從夫栗野・吉松・馬関田等御手ニ入、其後北原又太郎兼親肥後求磨出奔ニ而、住居を被召寄、太守公方真幸院を給也、兼親伯父左兵衛尉吉松之城を守ル、伊東氏へ内通し球磨勢を城中ニ引入候、其後謀露顯、真幸院被収公て兼親を伊十院之内神殿ニ移し、真幸ヲ忠平公ニ被遣候、依之、永祿七年甲子方此地ニ御移也、

但右之又太郎兼親ハ北原氏之嫡流也、

一桶比良、或田原陣、永祿十一年八月九日、伊東之氏族新次郎を為將此地ニ築陣城、去飯野城事南方二拾五町計、南方尾筋小徑有り、其外西北東深谷、北方飯野之方虎口一ツ有、永祿十一年八月九日、伊東修理太夫義祐合心於球磨相良氏、築一陣於此所也、

一木崎原、元龜三年壬申五月四日己巳、伊東大軍を以加久藤之城を攻む、此時加久藤馬関田之王民憂心、為敵忠平公大明寺山を傳、欲犯飯野城、故三公嚴守して備ふ、此地ニ懸合一戰勝利を得給ふ、久留半五左衛門・遠矢下総、一二を争ひ鎭を合、竹下又左衛門・瀬戸口八郎左衛門御前ニて高名す、伊東加賀守を五代右京打取也、八幡山本地原邊方名譽之

御術有之、此時伊東一族其外有名士二百九十六打取給ふ、切捨
數不知候、

一 大河原并今城、大川原麓より東北方去事一里小林之方、平地より
堅之地也、町而構今城新築要害云々、今城西大川流深谷等有、
小林伊東領之時大河原氏住之、當分ハ古昔之地ニ居住、

大河原氏世々傳領之地也、北原家一乱之節御家ニ叛伏す、依之
永祿五伊東大河原を攻、城主將堅強防之、去共以小勢城を持事
危故、忠平公之御下知にて今城ニ移ル、同七年五月晦日、伊東
今城を攻、城主九郎以下之一族を攻殺す、其後九郎姉婿皆越六
郎左衛門を以、大河原之跡ニ成し給ふ、

一 一之大宮大明神 社官黒木氏、

一 白鳥山六所権現 社司黒木権右衛門 座主満足寺、

一 狗留孫三所権現 社司出石河内 瑞山寺格護、

一 大戸諏方大明神 座主鹿兒嶋延寿院 社司黒木乗校、

一 春日山 不動産 愛染院 真大末 原田村 開基年間不詳、當寺
之事、享祿年間吉田天神宮棟札ニ見得たり、

一 兜率山 長谷寺 禪能州總持寺末 我山五哲之内実峯派、

長谷寺ハ、往古真幸院前領主草部氏之建立にて、開山明憲和尚、
能登国定光寺開山実峯和尚之弟子也、明憲日州臼杵郡田部姓之
人也、拾九歳ニ而為師皇德寺開山無外和尚、貞和五丙午參禪而、
應永三年丙子、當寺建立、施主北原周防守伴範兼、法名久天玄
昌座主と号、民部少輔兼珍か二男也、

一 完江院 禪長尊寺末、湖月公御石塔御牌立、開山梵芳永紹和尚、
開基年月不知、

一 亀城山 幻生寺 宗江院末 幻生様御牌御石塔立、御石塔ハ同所

飯屋内ニ立、開山常宝梵庸和尚、開基年月不知、

一 稻荷山 西方寺 保寿院 大乗院末、

一 成就軒 長善寺末

一 當郷ハ、天文・弘治・永祿之比、北原民部少輔領之、其後北原
久兼領之、永祿七年十一月、忠平公御領地ニ相成候、

一 白鳥山 金剛栗院 満足寺 大乗院末寺 白鳥座主 開山性雲上
人、中興開山光尊上人應永十五年五月廿七日 六世光嚴上人 寛永六年五
月廿九日化、

白鳥神社六座者日本武尊ヲ奉崇ル、其所を以性雲上人、康保年
中ニ此山ニ來て修法練行ス、時に老翁一人忽然と現シ、向性雲
曰、我ハ是日本武尊也、白鳥と化て此山ニ來住事久と云々、依

之上人山之半腹ニ靈廟を建而祭し、山を白鳥と申候者此謂也、
性雲又右寺を立テ為別當寺、其後天台之徒致退轉、中興開山師
高律師、中興之年月不詳、

一 白鳥山権現、在末永村、康保年中創立、祭所日本武尊、外五社神
名不詳、

日本武尊、人皇拾二代景行天皇第二之皇子小雄尊也、其為人幼
雄略之氣座し、壯ニ及んで容貌魁偉、身之長一丈、刀能鼎を犯

給へり、天皇之十二年秋七月、熊襲反而朝貢奉らず、熊襲トハ
日向国贈於郡之事也、八月筑紫を幸し、十一月日向国ニ到而行

之宮を起而居給ひて、是を高屋之宮と云、十二月熊襲を打事を
議て、十三年之夏五月、襲之國悉く平け給ひて、高屋之宮ニ居

玉ふ事凡テ六年也、七年之秋八月、熊襲亦反而邊境を侵す不止
因茲冬十月、日本武尊を遣し打しめ給ふ、時日本武尊年十六、

未タ總角ニタモ足玉わす、征伐無事故、強敵之川上梟師を殺し、
党類まで悉く平け給ひて、余類之一ツもなく日向国平ニ治りぬ、

末略ス、

一 狗留孫山 多寶院 瑞山寺、大乘院末寺、初天白宗、開山葉上僧正、開基年月不詳、當山麓^ノ三里山上ニ到而、其長十五尋圍七尺四方、又長事五尋ニ^ノ圍ハ相同キ自然之ニ長石、深谷之中^ノ屹立而空裏ニ聳、緣起曰、是ハ上古ニ、健盤・婆竭之ニ龍王之為ニ、狗留孫佛觀音大士建給フ石卒都婆也、山を号狗留孫、後ニ建仁寺之開山葉上僧正有中華之日、於醫王山觀音大士之蒙指示、帰朝而此山に來り卒都婆を拜し、谷傍之山巔ニ建一宮、弥陀・藥師・觀音之尊像を安置し、号三所権現、又宮之傍ニ右寺を建而為別當寺、

一 狗留孫神社 祭神麓山祇命 諺ニ彦火々出見尊、

日書曰、伊弉諾尊斬軻過突智為三段、此各化成五山祇、々々三則手化為麓山祇、玉木住、麓山ハ瑞山之儀、謂空側山、山後建拂寺號瑞山寺、亦浮邊氏僭神名也、

一 書曰、伊弉諾尊愁恨拔十握劍、斬過突智頭為三段、各為神者此三神也、又寸々ニ斬、皆成神、謁中山祇・麓山祇・正勝山祇・離山祇等也、

一 求磨陣、大明寺村之上、野陣也、球磨^ノ陣取之跡有、御當家之御陣跡も有之、大合戰迫而可考、

一 一宮大明神 在今西村、祭神齋主命、相殿天津兒屋命、姫太神、三鉢木像ニ^ノ、齋主命若冠也、

一 棟札、應永基年庚子仲春吉日、大願主周防守伴久兼、

一再興棟札、文明五年癸巳六月十五日祈立始、同十一月廿四日造畢、迂宮、大旦那長門守伴氏貴兼・立兼、

一 社頭造立棟札、大永三年癸未二月十一日打立、翌四年甲申三月廿三日迂宮、大旦那伴久兼并龜龜丸、

一 右同斷、天正三年乙亥八月吉日、大旦那嶋津兵庫頭藤原朝臣忠平、同鎌寿丸・如意寿丸并息女、當地頭有川雅樂介中原貞席、先地頭川上右京亮忠智、

一 拝殿再興、天正九年辛巳二月吉日、兵庫頭藤原朝臣忠平諸願成就、地頭有川雅樂介中原貞席、

一 諏方大明神 大明寺村 神主黒木氏、

右、建立年月不詳、當社者 太守家久公御産神、別而御崇敬被遊候而、大明寺村十三町御寄附、右高大宮司伊尻神力坊格護ニ而候、然處、忠平公栗野へ御移之時分、右拾三町被召上候而、御高三拾石御寄附被遊候、其後大明寺村阿多長寿院知行杯ニ被仰付、家臣数多召移候へ共、無屋敷故被召拂之、勿論神力坊子基前坊事長寿院門第ニ而候處、長寿院還俗被仰付候、菩提祈念坊主被為頼、座主職相勉候、從是世々延寿院住持・座主職懸持被相勉候、

一 鍛大明神 崇北原左馬頭良兼靈、祭十一月廿二日、

一 都卒大明神、崇北原氏之靈、都卒杉とて大木有之、北原又六郎寛兼又五郎、幼而蒙於父貴兼之勘氣被誅殺、崇其靈号兜卒大明神云々、但不記家督人也、

一 峯八幡、崇嶋津犬太郎久林靈、

一 妙見山、此所者永禄六年八月廿四日、伊東家^ノ伏兵を設け敵を打取と云々、此敵者北原氏之事歟、

一 播磨城、在原田村、此城ハ天正十八年、忠平公栗野御移之節、黒木播磨守実利被召置候城也、故此名有、

一 南木場、本地原、米永川内、二八坂、横尾、八幡山、田原陣、村手平山、鳥越山、野間門、脇之平、大迫、太刀洗川、三角田、

小木原山等合戦場也、

一古城、号天明神城、在大明司村、永禄五年五月、伊東之凶徒責之、

東藤左衛門^{求磨}・長倉勘解由左衛門^{伊東}・功有、城主不詳、按北原歟、

一飯野郷者、上代^〆真幸院之領主真幸次郎草部年貞真幸院郡司、

九品院般若寺施主と有、其苗裔真幸十郎重兼^{元暦文治}・同貞頼・

同貞能・同貞純・同貞季入道妙覚・同左衛門三郎貞房領之、元

弘三年五月十八日、父妙覚讓状有、

一六地藏、在木崎原、此所御合戦之場也、伊東新次郎を手白御打遊候所也、

一飯野城、麓北ニ有、南大手口、曲輪三ツ、隔谷此方江口有、從是西之原ニ

出通、畔谷筋加久藤城要路也、

元龜三年五月四日夜、伊東兵逼加久藤城、忠平公北之口^〆御出馬ニ而御統被遊候、後年忠平公城之大手口山下ニ御屋敷構ニ而為被遊御座由候、

一温泉、此湯熱氣強、洗勢甚タシ、

一大河平、此所邊路番在、

一武藏国風土記曰、白鳥神社、白雉二年辛亥五月、所祭日本武尊也、神貢五十三束三毛田云々、安房国風土記曰、白鳥神社圭田三十五束、倭武尊之神魂也、上俗祭此神得漁獵之幸、故慶雲・和銅之間、俚俗自私祭之、後告官被寄書、

小林 旧名三ノ山、公之御手ニ入候已後今之名ニ改候、

一三ノ山城、永禄比、馬関田右衛門守此城飯野ニ桶をつく、依之永禄九年十月廿六日、義久公御大將ニ而被攻之、忠平公深手を負給故、城を卷解給也、但右衛門ハ伊東義祐か姉、北原兼守か

後室也、

○伊東氏構要害欲侵飯野城數度也、貴久公曰、不逐彼凶徒有後憂、

故ニ永禄九年丙寅十月廿六日、義久公為大將、忠平公・歳久公

為副將、卒多勢而攻之、是時茂山源左衛門尉・間瀬田治部左衛

門尉・田尻荒兵衛尉・長谷場長門守・同弥四郎・愛徳十郎・濱

田右京亮・長野助七郎・塚田太郎左衛門尉・同太郎五郎・真蓮

坊・上床源六兵衛尉・田口仲俊坊・重信平左衛門尉・伊地知新

三郎尽筋力者也、此日忠平公臨于戰場、会強敵兵蒙疵属甚、故

諸軍驚失力不得陷要害退陣ス、我軍死亡者、阿多中務丞・末弘

又左衛門尉・本田治郎少輔・同姓與五郎・椎原某・阿多源左衛

門尉・中山源三等也、彼要害不陷故、忠平公殘心不少云々、

一天正四年八月廿四日、當城ニ火を懸伊東方落去ス、同廿八日

御免向、有城祝、

一鬼塚原、於飯野伊東家と御一戦之砌、柚木崎丹後守を忠平公御

打取被成候場也、

一崇廟雖守 六所大権現 祭神不詳、社官黒木氏、^{按ニ、東霧島六所同社歟、}

一瀬太尾権現

一中嶋山 普門院 觀音寺 真大末、

一愛宕山 十輪院 圓岳寺

一福城山 昌寿寺 ^{禪加久藤徳泉寺木、}

一花立口、一久保谷口、此両所、永禄九年十月廿六日、三ノ山城責之時節、花立口ニ者太守義久公・義弘公、久保谷口ニ者左衛門督歳久陣營之跡也、此合戦、公之兵敗解陣退陣、于時永禄九年十月下旬之比、於道之山^{三ノ山ナ}、奉公被閉目し人々のため、^{ルベシ、}弥陀の名号六字をつらね、吊事一念弥陀佛、則滅無量在のこ、

ろたるへし、

貴久

名をおもふ□□ころの一筋に捨しやかるき命なりけり

むら／＼に時雨る／＼けふの柴よりも昨日の夢そはかなかりける

ありはてん此世の中にさき立を歎そ人のまよひ成ける

水の淡のあはれに消し跡と／＼や漸くぬる／＼袂なりけり

立そへる面影のミやなき人の忘れかたミと残し置けん

佛ます世をいつくとや尋ぬらんよへハこたゆる山彦の声

詠永禄九年於三山打死敵花々万靈成等正覚六字

日新

何事もミな南無阿弥陀／＼なお打死ハ名をあくるかな

無益にもむつかしきよにうはたまの昔のやミの報はさるらん

悪敷よにあらゆるものもあしなれハあからさまにはあらし身の

果

南にハ弥陀観音の御座なきハ身まかる時も御名を唱よ

唯かにも誰そとはぬ誰しかも誰かハ独り誰かのこらん

ふつ／＼とふつと世も身もふつかりとふつとくやくふつとか

なしき

一文安六年之比、源久義姓名不詳領、文龜二年之比、北原氏伴兼

延領、弘治年間、平良中務太輔伴兼賢、永禄年間、伊東氏押領

之、到天正四年落城、上井次郎左衛門秀秋を地頭に居給ふ、

一山之神社、在木裏木、忠平公依御立願、慶長十二年閏四月廿四

日御願文有、其文、巢鷹於有之者、早速可被成願者也云々、

此木裏木ニ巢鷹有之處也、上代ハ八重尾氏居住、木浦木山番手

相勉、代々切米被成下候、麓ハ三里、内山路一里、深山幽谷也、

一小林城、東北大河流、南方池、長七十間余、廣三十間計、西大手口、東水手

口、往古從飯野通路北ニ廻り、城之西北川向ニ往還有り、今之通路

城南士小路ハ、往古外郭之内ニ有之、從大手口東北之方半町計、

榎崎山云山有、須木之兵卒據之放矢炮、因茲太守之兵及難儀云々、

此城者、永禄九年十月廿六日、義久公・忠平公・歳久主率大軍

政之、忠平公於搦手口被為負手、自夫解囲ヲ開陣有之と云々、

一鬼塚原、粥飯田、此両所者、元龜三年五月四日、伊東凶徒木崎

原敗軍ニて、鬼塚原筋・粥餅田筋二筋之道を退候付、味方此而

道を追打ニ而候、鬼塚原・粥餅田之渡追留ニて、鬼塚と飯野本

地原より東之方拾町飯野境也、両道皆小林通路也、忠平公於鬼

塚原柚木崎丹後守正家日州内山地頭、今高岡之内也、手白打落給ふ、伊東方一手之主將

其場所不詳、大鬼塚小鬼塚と云丸岡二ツ有、四方廣野ニ統たる

場所也、

一内木場、岩牟礼、此両所者、天正四年八月廿二日、高原落去ニ

付一口ニ入手裡處也、岩牟礼自麓東野尻境ハ高嶺也、西方大河

流自小林川向也、天正十五年夏、羽柴美濃守秀長兵卒岩牟礼雖

押入、大河洪水漲不得涉、故小林まで尚乱入不相成と云々、内

木場麓ハ東須木境也、岩牟礼麓ハ道程壱り、

一天正四年八月廿四日、三ノ山城敵捨而退去、依之鎌田尾張守守

之、同廿五日、忠平公三ノ山ニ御籠大軍扈從す、同廿六日、義

久公三ノ山江御越勝吐氣有、川田駿河守義朗執行、内城庭上ニ

義久公床机ニ御掛り、諸軍左右ニ列す、御三献配膳山田新助・

三原右京亮也、三献過各進上太刀、忠平公及嶋津薩摩守義虎・

嶋津右馬頭征久・嶋津左衛門督歳久・嶋津中務大輔家久・嶋津

圖書頭忠長也、及黄昏如飯野阪陣し玉フ、

須木

- 一大藏大明神 社司川野氏、
- 一誕生山 真福院 世尊寺、真大末
- 一龍鳳山 自得院 一麟寺、禪日吉田昌明寺末
- 一須木城、西大手口北大河流 自往古肥田木氏守之、文明之比、肥田木次郎太郎守之歟、元龜之比、米良筑後守守之、元龜三年五月、於本崎原戰死、
- 天正四年八月廿四日、敵棄城去、依使宮原筑前守守之、
- 一深師原、麓方三里計、東方野尻境、桑崎自麓北方此所、天正四年八月廿三日、高原落去之節、同時ニ属公之旗下ハケ所之内也、
- 一堂屋敷・八重尾・田代ケ八重・柚蘭、此所邊路番有、

高原

- 一高原、小林方當郷へ通路筋坂登り左方方城地也、西南之方通路、北東之方田地也、

天正四年八月十九日、義久公以大軍攻給ふ、耳か付之尾御本陣也、廿一日、家久公鎮守ケ尾ニ陣を取寄、城主伊東新次郎于時由と、因念佛寺頼偏而降を乞、落合豊前守・肥田木河内守を為質、此方方為人質本田因幡守親治・徳持舍人佐兩人被遣候、同廿三日、勘解由城中之人衆を列而退去、即日義久公御入城、高原・高崎・三ノ山・内木場・岩牟礼・須木・深師原・桑良崎ハケ所御手ニ入、上原長門守尚近ニ令守當城至テ、右城攻之時、小川内口・地藏院口ニ而攻合有之、猿瀬へ伊東勢此所到来陣ス、白坂之上ニ喜入摂州杯被為陣候、但伊東兵野尻を限り引退候、

一崇廟狹野霧嶋六所大権現、座主神徳院、

一東御在所向所権現、社官押領司氏、座主錫杖院、在蒲生田村、

祭神二座、伊井冉尊、

- 一高原山 法蓮寺 禪般若幻生寺末、有麓村、由緒不詳、
- 一地藏院 在右同所村、由緒不詳、
- 一真源庵 在廣原村、
- 一當郷者往古北原氏領地也、永享・文龜・弘治之比專領之、其後税所右衛門領之、又白坂下総守天文元年方押領之、其後永祿年間方伊東義祐押領之、天正四年八月廿三日方為公領、○小川内地藏院口、在麓村、高原城方東ニ當リ老町計有之、于今寺之尾と云、往古此所ニ地藏院為有之由、此邊之田地都而小川内と云、高原城攻之節戰場也、
- 鎮守ケ尾、在右同村、右城方西之方通路越向ふを云、小林之方方高原麓方通路也、同城責之時、家久・忠長之陣所なり、古鎮守大明神鎮座也、
- 山田新助入道利安地頭之節、外郭ニ取入二重城有、利安堀と云、
- 耳付之尾、左右同村、當分此名なし、耳取と云処有、其所ニ而候哉、麓方花堂之方へ通る、人家出口右之方上者尾筋有之、下ハ田地也、義久公御陣場也、城方東四町三方深田有、東南統原野、土居二重虎口一ツ也、
- 一東霧嶋山 華林寺 錫杖院、天台宗江戸東叡山寛永寺門下院、開山性空上人、開基年月不詳、天永三年壬辰二月二日、神火起而社頭并寺院焼亡矣、又文暦元年甲午十二月十八日、神火起神社佛閣焦亡矣、至文明年間始二百五十二年之間、寺院退轉畢、文明十八年丙午八月、太守忠昌公御再興、為證儀法印中興開山、從大第三世忠井法印、永祿年間伊東義祐掠取當郷、是故寺院佛閣亦為伊東ニ有、自伊東家令民部卿秀澄僧都為東御在所権現宮座主、

忠弁先住と奉忠平公命而寓居於飯野郷、然而天正四年子八月廿三日、高原郷屬公領し而後、同六年子二月廿一日、忠平公命赤塚源左衛門貞重・久留木掃部重辰・和田圓覚院・花堂大圓坊而令誅戮當住民部卿秀澄僧都、同年七月十五日、義久公有高命而快斜法印為當山中興座主、自是寺院繁茂ス、此時菱刈院ニ住居・性空上人開基已來十八世迄、天台之別院と云無本寺ニ而候處、寛文五年乙巳、將軍家綱公台嶺之御門主ニ被仰達、諸山之台健本末を定、諸寺之法流之奥旨を御極候、同年八月、東叡山御門跡輪王寺宮一品親王尊敬之直末ニ属せられ候、

一東御在所神社者御代々御崇敬有之、吉貴公已來御家督之節白銀進納有之、常番頭御代參被相勤候、

一鎮守大明神 在麓村、祭神天津兒屋命 武甕槌命 姫大神 齊主命、四社再可考、傳稱、税所右衛門勸請云々、

一高原大明神 在右同所 崇税所右衛門尉靈云々、傳稱、白坂下總守致税所某誅戮、如此勸請其靈云々、年月不詳、

一霧嶋王子大権現 廣原村、天正年間棟札有、神主安原十郎太夫、追而出緒可考、

一藥師堂 在真源庵 棟札、天正十五年卯十二月十五日、本願字姓不知、鳥集對馬守、

一廣原村、古小林之内ニ而、延宝三年高原ニ被召付候、

一水流名、古都之城之内ニ而志和地之内也、慶長九年野尻ニ被召付、其後宝永三年高原ニ付、

一王子權現、社家頭取前原仏左衛門、

一高原城、四面深谷、南西方少連平地、東方大手口

日州伊東氏據因率兵超山霧島山ナリ而侵大窪田口之村邑數度、為是

神社祭祀モ被妨多シ、故兵庫頭忠平主欲攻高原城同事、義久公市來美濃守大田・迫間甲斐守・栗野・細田武蔵守・遠矢下総守飯

忠平公并

旗下士

・玉利大炊左衛門尉・同姓老岐守等、為郷導令往高原

而同地勢後、天正四年丙子八月十六日、義久公發馬鹿兒嶋、同

十八日、

先到飯野城、議於謀忠平主而後發飯野城居之、同十九

日、陣幕既ニ成、威銳之戎卒欲攻、公敢不動兵、雖戎軍士卒等

不待命而、漸馳遂而蟻附而攻之、我兵柏原將監・間世田新左衛

門尉・濱田右京亮・長谷場長門守・上井伊勢守・伊地知伯耆守

・長谷場織部佐・長野兵部少輔・福屋日向守等進退奮戰ス、忠

平主及嶋津右馬頭征久・同左衛門督歳久・圖書頭忠長・中務大

輔家久尽筋力者也、戰死ハ三原源三郎・入佐郷左衛門尉・中將

坊・曲田某・野村右衛門尉・井尻早左衛門尉・四本半八郎・尾

辻某・宮原越中守等也、此夜義久公陣於花堂、翌日以念佛寺調

略和睦之計、依之、為本田因幡守親治・德持舍人佐人質入城中、

則日敵方落合豊後守・肥田木河内守為質来テ我陣中、鎌田尾張

守唱凱歌、同廿二日、守將伊東勘解由次官下城、其後刻義久公

入城刻、乘夜外壘悉放火去、當此時、高原・高崎・三ノ山・内

木場・岩牟礼・須木・源師原・奈崎八ヶ所皆属旗下矣、當城内

西方曲輪称白坂彦祖城、上井日記、八月廿三日、新城去渡候、

伊東新次郎番頭ニ居リ番有、

一茶臼ヶ陣、在水流村、志和地境、野岡也、南東北大流、

一鳥越、水流村ニ有、自高城郷乾之方一里、自志和地北方一里計、野岡ニ而

要害堅固之陣城也、

右、天文十年六月十六日、伊東氏陣之、北原氏陣志和地、北郷

忠相居城攻高城之節之陣場也、

一白坂之上、今此名なし、雖然、城之裏之方坂有、其上陣場有、離城一丁余、

云此所乎、

天正四年八月廿三日、城攻之時喜入抵津守陣場也、

一廣原原、在廣原村、小林境、自麓一里計、往古合戰為有之といへとも、由

緒不知、其時分城主河内右京守也と云々、古塚有、山上唱左京塚、

高崎 天和元年外城割、惣候使菱刈孫兵衛・野村左衛門也、

一延宝八年十二月廿九日、高原郷内を相分新外城ニ被召立候、地頭村尾源右衛門、

一崇廟宇賀大明神 在前田村、祭神不詳、社官頭取押領司長門、

別當幸樹院、朝倉氏先祖丹波国を負下し勸請云々、

一龍虎山 幸樹院 真高原錫杖院末寺、在前田村、

元禄七年、再興開山盛本ノママ、由緒不詳、

一海蔵寺、禪馬関田大圓寺隔庵、

一當郷者古高原之内ニ而、大牟田・前田・繩瀬三ヶ所を外城ニ被召立、号高崎候、天文年間、白坂下総守高原領之時居住當郷也、天文年間、於高城小山与北郷讃岐守忠相合戦、打負ケ白坂氏戦死、

一高崎城、在前田村、高原方を麓江通り、入口右之方式町余有之、天文之比、白坂下総守守之、其後捨當城退去志和地、於彼地戦死也、

一外達社 在前田村、白坂下総守靈社也、麓入口を三丁計有之候右方高き所也、

一朝倉山 海蔵寺、在前田村、開山耕山和尚、麓中より右之方川越也、由緒不知古寺也、城之脇ニ天文十六年未

八月彼岸日、興山和尚を為書小石有、

一小牧、在繩瀬村、上原長門守尚近墓有之候、久全源昌居士、前上原長門、天正廿年壬辰九月五日、

一水湧、在右同村、庄屋役所与南之方田地三丁計有之歟、小溝流、

慶長四年、庄内一乱之節、太守公より此所ニ関所を被立、入来院

又六重時高原地頭内之者勤番也、于時倉野七兵衛山之口東霧嶋ニ為責

入破関所、此所ニ而戦死也、関所之跡究而不詳、水湧近邊之由、其時分関之板や柳橋門之寺民致所持候、

野尻

一野尻城、麓通路筋を南之方ニ當り拾余も有之候、

天正五年、城主福永丹波守通志高原城主上原尚近、十二月七日、

尚近遣人数、伊東大煩一ノ野村大夫福永か不知隠謀防之時、忠平公駆付

政給故、即落去、翌日より戸崎城を攻、同九日攻取給ふ、右野尻を攻候付、高原之士竹内備前守足輕六十五人を列、猿瀬口より野

尻之南谷ニ到三町計、池之平山を登て外郭江乗入、城門二重破却、新城ニ攻入云々、太守之兵戸崎責落、紙屋へ被通、備を立

近邊鎗難見計玉ふ時、瀬越より少々矢軍有り、夫より竹田町を放火し、本城を過、都於郡・佐土原少々放火し、翌朝富田之城ニ押

寄ス、城主湯地出雲守降参ス、

一猿瀬、麓村之内、當郷と高原之境大河之渡口向之地ヲ去、人家有之、高原城攻之時、伊東勢此所ニ陣を取、

一紙屋村、日州海道也、在関所、日向国細嶋・佐土原ニ到、明暦三年より、境目故外城ニ被召立候、地頭桂外記被召置候、寛

文元年丑十二月十四日迄、

延宝八年申七月廿四日、地頭村尾源左衛門此代、同九年、又如元被召壘、野尻ニ被召加候、

自家系図ニ、相良日向守長泰子傳翁地頭移此地有、

一大王権現 在麓村、社官川野氏、祭神一座、猿田彦命、傳稱、

常社者金子三郎ヲ崇と云々、占棟札無之候、寛文己未棟札有り、

一岩尾山 麓村 本光寺 真大末、開山盛順、造立棟札ハ天和三年

亥二月十六日、大勸進本光寺三世勢舞沙門と有、

一長用山 右同村 真光寺 禪加久藤徳泉寺末、此寺上古野尻城内ニ

有之候、由緒不知、

一法正寺 正玄山 在紙屋村、真大乗院末、往古漆野城内ニ有之候由、

中興開山盛玄法印、

一龍水山 福万寺 在右同村、禪高原法華嶽寺末、

由緒不知、旧名長福寺、中興開山東岳和尚、

一當郷者往古北原氏領知ニ而、文明十九年之比、北原長門守伴兼

裁領之、其後天文年間、伊東義祐押領被成、天正五年十二月、

再為領地、

一白坂之上、麓村之内、麓ハ半里計西之方、

右猿瀬与拾四五町計之並松通路筋、大ニ曲候処有之、夫ハ三四

丁過、右之方四五丁計ニ廣平成所有所を于今陣場と唱、其下ニ

迫有、都而其邊を白坂と云、高原城攻之時、喜入撰津守季久陣

場也、

一南谷、右同所、一池之平山、上同、此両所究而場所不相知、右白

坂邊池有り、其脇ヲ南谷と云歟、又野尻城之南之方谷脇ニ舊池

有之、右之所を池之平山と云歟、究而不知候、右之所者、高原

之士竹内備前守足輕六拾五人を列攻登り、外郭ニ乗入城門二重

を破却ス、

一伊集院忠真誅戮之場、在麓村、此所麓町江通り走丁余、前通路ハ

左之方走丁計小路有之、十文字なり、其所ニ而誅戮ス、

一高崎城、麓ハ半里計有、紙屋村江通る通路筋城内を通る、左之方

城之屋地と相見得候、弘治元年卯十月、城主米良河内守・同出

羽守、伊東氏ニ結讎、彼方ハ雖相招此儀を廻し、紙屋城ニ引籠

不應招云々、天正五年十二月八日、太守義久公御攻落被成候、

一紙屋城、紙屋村、御両所ハ卯南方拾丁余也、天文年間、城主紙屋

主税助守之、然ニ伊東家以計策主税助事佐土原江招呼候、其銘

ニ、戸崎城主米良河内守庄内衆へ致一味、弟出羽守為人質庄内

ニ差遣候て、庄内之人数打出去川向ニ戰陣、伊東氏人数漆野ニ

張陣候、然處、伊東家以武略主税助致調合、庄内衆悉打取候云

々、

一高妻八社大明神 在紙屋村、當村崇廟也、由緒不詳、

一天正六年十月、豊後大友氏侵日州高城、于時太守義久公兎鹿府

在紙屋城聞敵之虛実、則或夜有夢想、

打敵ハ龍田川のもみちかなと云々、同十一月十日、乘夜凄風雨

而到日州財部、

一市之瀬、邊路番地、

綾 産物灸貼名帖アリ

一天正十五年十二月十日、忠平公引兵而打入當郷被掠略候、自夫

都於郡ニ入玉ふ、乗此勢敵地深く義久公御働被成候へ共、伊東

義祐防禦之術を失ひ、居城を去明穂北城ニ到る、城中野心之者

多而當城ニも不得入、無為方遙々豊後州江落行ト云々、

一 崇廟三ノ宮大明神 在南候村、社司宮永氏、祭神足仲彦天皇・息長足姫尊・菅田天皇、

一 竜智山 竜福院 法音寺、真大末、右同村、

一 嶽王山 綾光寺、禪福末、右同村、

一 古城、号龍尾城、

一 綾川、南北二流有、源西川共肥後国米良領白尾嶽より出、高岡之内入野村にて取合、到倉岡之内米原村去川二取合、那珂郡宮崎赤江之海ニ流通ス、此去川之鮎、將軍家其外之御方へ献上ニ相成候、

高岡 山一法華嶽、川一去川、

一 慶長五年、飯田・八代・内山一所被成、新地ニ城御立被号高岡候、地頭比志嶋紀伊守国貞、寛永四年丁卯迄二十ヶ年、引続宮内少輔国陸迄地頭也、

一 真金山 法華嶽寺、禪福末、本尊藥師如来、百濟国沙門呂羅安置其、又省傳教大師作共兩説有、靈地靈地也、開基年月不詳、

貴久公改當寺代天正年中、中賢和尚為開山中興、文禄三年甲午龍伯主為參觀赴京師之時、詣當寺藥師詠歌、

旅たちし行えをたのむ御佛のなひく心に身をやまかせん
ちらんほと花の南の風もかな

一 関所、在内山村之内古川村、到日州佐土原・細嶋等街道也、自先代二見氏守警也、

一 八代・田之原・野崎・上畑・法華嶽・靱木、右諸所邊路番有、

一 栗野大明神、社官富山氏、座主栗野寺、

一 宝殊山 口徳院 高福寺、真大末、

一 高嶽山 竜福寺、禪福昌寺末、竜伯公・琴月様御建立、御牌有、

一 神留山 栗野寺、真高福寺末

一 万福寺 高福寺末、

一 臥龍山 光孝寺、禪福末、

一 松尾山 本永寺、法華宗富士門派房州妙本寺末、

一 善裁坊、坊主眞高福寺院、旧号祐光寺、坊中拾貳坊、

一 栗野大明神 所祭、大己貴命 事代主命 味鋹高彦根命 少彦名命 高光照姫 大歳神 建御名方命、

例祭十月初午日、勸請年月不詳、

一 稻荷七社大明神、祭神七坐、倉稻魂命 天兒屋根命 天太玉命 倭姫命 大田之命 保食持神 玉藻前、

一 松尾山 本永寺、御切米拾石、開山日向上人曰蓮此寺者、日蓮上人文應元年庚申、身延山ニ家建立之時、法華富士門徒之本寺脇之惣門者、学頭職政所と被定置候、其後富士山ニ本寺を被立置時、学頭も右同所ニ被立置候、其時者住持大少輔阿闍利日堅、其後上總国長狭ニ右学頭を被引直之時、中興開山日朝上人ニ而候、其比西国方之末寺、本寺遠国故諸事不自由ニ付、為押仕置本寺代とて、右日朝上人被差下候旨、学頭之靈佛本尊諸遺物等被笈下、建武年中ニ佐土原圖師山ニ学頭建立ニ而候、長享二年都於郡城下池之尾ニ被建置、夫より天文二年之比、日果上人代ニ内山ニ被引直候、於此所寺家炎上ニ而、諸文書学頭之遺物等悉焼失候、其後高岡之内浦之名へ相立候、身延山ニ学頭建初之時被定置候役故、東西諸国法華富士門徒之諸寺、本永寺より支配掟仕例法にて、只今迄勉来候、

一 八代村、此所慶長五年庚子秋、惟新公濃州関ヶ原より御退陣御帰

国之砌、九月廿九日之夜陰ニ及び御到着、福嶋某宅ニ入御也、
于時稻津か凶徒所々乱入して放火之鉢、遙々御覽有、四ヶ所境
目守禦之儀御下知有而御帰城也、但此所ニ一日御滞留有之候、
一古壘、在田尻村、東南之方川流、一古壘、在內山村、
常壘ハ、伊東領之時分柚木崎丹後守守之、
一古壘、在浦多村、伊東領之時稲津四郎左衛門守之、
一梅樹山香積寺江、延宝元年癸丑、光久公御佛詣、庭前之梅御覽
有而被号月知梅、御詩作有、

月知梅

香積寺前有梅、大二十圍盤屈如蓋、不知所植之歳、蓋古代尤物
也、余偶過見之、名以月知作詩係之、

老龍盤屈歲寒枝、遠出人間托佛祠

移植春風今歷幾、當初唯有月明知

左中將源光久

倉岡 倉岡・穆二ヶ所名同、穆佐院

一川口津口番所、在糸原村、自他国之河船往通必由候通海之處也、

一崇圖師大明神、社司池田参河、祭神一座、事代主命、在糸原村、

一常盤山 硫磺院 郡山寺、大乘院末、在糸原村、

開山并開基年月不詳、

一池王山 龍泉寺、禪高岡龍福寺末、開山秀翁和尚、開基年月不詳、

一古壘、在糸原村、号池尻城、曲輪三ツ有、大手口乾之方、搦手口巽

之方也、

西南大河廻城壁、東北行程数町ニハ是又大河流、御領地領城閣
ニ近シ、慶長五年之比、伊東臣稻津掃部助押寄、當城之主丹生

備前守守之、

一壘、号糸原城、在有田村、由緒追而可紀、一古壘、在同村、号ヲシマ

下ノ城、

一慶長五年庚子九月、伊東修理太夫家老清武之宰稻津掃部祐信蜂
起、掠略人民衆向我封疆之由風聞依有之、當地頭丹生備前守、
同月廿五日ヲ籠城、池尻壘方用心敵主ニ而設防禦之備、其人数
都合七百人計と云、延岡領領内吉野・金崎・院内三ヶ所之百姓
等出人質籠當城、同十月十日、鹿兒島ヲ援兵来着ス、一番桂太
郎兵衛、二番嶋津弥太郎・本田孫六、三番永山入道・野村清七
・野村新九郎、四番鈴木伊之助抱上方、此人数附衆大勢ニて被差
遣、廿日宛相請、翌年五月迄勤番也、初十二月廿四日、糸原村
倉岡稻津兵忍入、民屋ニ火を放乱妨ス、此方士卒人々出て、
右之者共打留、或追捕と云々、翌年正月十七日、稻津か兵川崎
某を為將大勢寄来、有田村倉岡白糸邊ニ陣取而、當地之様鉢を
伺戰陣ス、敵方一首之歌を射送る、

朝夕にいもをひろふてくろふかの前の川原こやかてくわふとの
此方返歌、

をひききて伊東か家ハくつれ桶汲とたまらぬ川さきの水

同四月十日ニ、稻津か徒党當所梁瀬口ニ押寄、川を隔戰陣ス、
于時日高千左衛門・篠原兵部左衛門・黒木宮内左衛門・税所平
左衛門・同平右衛門・谷村蔵之助・田中南右衛門・池田助左衛
門・日高源内・小田原才助共倉岡等一度ニ川を渡シ敵ニ掛ル、川
野孫兵衛主從鹿兒島茂統而切て掛ル、双方入乱合戰刻ヲ移ス、税
所平左衛門被打、川野孫兵衛主從も打死ス、其外之我兵奮勇力
雖戰不叶引退、敵者弥乘勢既ニ川を可渡勢ナレハ、丹生備前・

鈴木伊之助使高岡二馬馳而援兵を乞、依而高岡方之後詰之勢、吉野・金崎・岩地野を横ニ懸立しかば、敵兵不堪して敗北す、比志嶋紀伊守ハ金崎ニて上卒を集保勢居候所ニ、丹生・鈴木之両將此所ニ來通對面有而、其後軍を引入候、

穆佐 延久二年丁酉九月、畠山治部太輔直顯・同民部少輔籠城自戦有之、

肥後国主菊地掃部政之、正平之比、肝付兼主在之、度々攻合有之、

一高城、應永十年比、元久公^{山東}之地海江田之倉虛城攻落玉ふ、依之川南之面々屬守護方、故ニ穆佐三百丁并池尻・白糸・細江諸所之押とべ、伊集院長門守久俊を被居置候、久俊ハ公之外叔也、其後久豊公籠城玉ふ、

應永十八九年之比、伊東某曾井城を攻む、久豊公將を遣し被成後詰候、其後御出馬有之候、當城ニ御座候内、西城ニ敵忍入候へ共、即時ニ打拂玉ふ、其後去當地末吉ニ移玉ふ、依之川北・川南悉伊東領ニ成、忠国公當城ニ而御誕生御座候處ニ而、杉有之と云々、

一崇廟宇佐八幡、社官野田氏、忠国公御母堂御逝去之後、崇若宮八幡、

一竜虎山 弥勒院 天正寺、真大乗院末

一洗心山 悟性寺、福昌寺末、鐘銘曰、時永徳元年辛酉黃鐘二十日、

開基大檀那伊東氏臣駿河守祐満、

開基養老元年、開山行岩和尚、中興喜冠和尚、

一穆佐城、慶長五年子九月、口州伊東氏家臣稻津掃部助者企一揆將多勢來、十月四日、逼穆佐城攻責甚急也、于時川田大膳亮国鏡強拒之能守城、稻津引兵退去、

一文安二年乙丑九月八日、伊東一家土持縣同心ニ而、穆佐城ニ寄攻落、旧記ニ有、

一又云、天文十年辛丑、長食能登守舎兄上總守之依叛、比ハ七月十九日兵乱、九月三日、飢肥衆尽ク打取、其夜四ヶ所共ニ没落と有、

一高城、本丸・古城・西之丸、合三曲輪有、往古畠山治部太輔守之、其後伊東家為押、伊集院長門守忠朗奉公命守之、其後太守久豊公御在城、應永十年五月二日、太守忠国公於當城御誕生、一自家系圖ニ、樺山三郎左衛門尉與久守之、於當城父子戦死と有、二代美濃守善久三男、

一慶長五年庚子秋、伊東臣稻津掃部助祐信起一揆、諸方ニ人数を差向よし、九月廿日比ニ風聞有れハ、穆佐・倉岡・綾・内山四ヶ所之面々其格護有之、然處、早凶徒諸方ニ兇向して乱放ス、高橋領跡江村之百姓等携妻子籠當城、地頭川田大膳亮国鏡守之、同十月十日、下野守久元・鎌田出雲守鹿兒嶋与被差越、助籠城之勢、其外從軍不少、翌年五月迄勤番有之と云々、拟十二月十三日、田野・清武^{伊東領也}凶徒等當城ニ兇向、逼城壁短兵急ニ雖責之、城兵強防之故、凶徒不叶シテ退く、翌年正月七日、稻津か党當城ニ押寄之由聞得けれハ、各評議有而、夜中ニ打立、敵地近く兵を進、備を設て敵の懸るヲ待、清武堺大塚・小松邊ニ扣へたり、凶徒等人数を分而馳來ル、其勢大勢なれハ、味方敗北し大河に追込れ、味方之士卒少々被打取、然處、倉岡之地頭丹生備前守士卒を下知して大鉄炮を打せ、凶徒之來襲を追散して被打取、此時松本主膳・海老原佐渡等^{穆佐}分捕ス、

一忠国公御誕生跡、高城本丸之下ニ有、人杉式本、枝葉繁茂ス、

貞享戊辰二月十一日、地頭原田藤之丞宗満建立石塔爐一基、

一足利直冬内室領分ニ而、為進貢取納足利治部太輔直行下向有之、

此時代、直行於鹿兒嶋野元原合戦有之候由、或書ニ見得たり、

一古文書曰、將軍家御臺御領日向國穆佐院島津庄事、島山修理亮

・伊東八郎以下直冬与党凶徒等、構城郭濫妨ニ而候間、可令退

治之由、所被仰一色少輔太郎入道也、可致合力之状如件、觀應

三年六月五日と有、以是見則將軍御臺化粧料為有之と相見得候、

一延文之比、島山治部太輔直頭楯籠之、菊地肥後守武元肥後國卒之國主

大軍囲之、直頭防戦無利而城陷云々、永禄年中、從將軍義教公

穆佐院一所ヲ、大福田寶幢寺ニ御寄進と有、旧記、

一内之八重、此所邊路番有、

一悟性寺境内古塚有、安永三年甲午芝ヲ掘穿ツ上中ニ、石を墨起

炭ヲ理、其中ニ大甕一石之蓋有、中ニ髑髏・金鈴一・香爐一有

之、依而訴官府、故記録官土川上大六・東郷朝之丞、奉 公命

來通此所問往事、古老又語此塚之由來、傳稱メ謂 義天公之塚

有此邊と云々、其後両士建古塚記、 義天公御牌御安置、

穆佐郷古塚記

安永三年在甲午正月、日州穆佐郷有掘地於悟性寺者、入七尺得

古塚、其内累石四周覆以石礫中置大甕、甕而視之有枯髑髏存焉、

又有金鈴一・香爐一、然其誌汎滅無以識其人也、先是土人傳稱

舊有 義天公塚在悟性寺焉、然而求其處則已失之矣、至是父老

來觀異之、皆意其為 義天公塚、因具其狀白諸本府、乃命太史

川上親敷・副史東郷實包往視之、則至親巡塚上、大索其内、畢

陳殉具而視之、然亦一無足徵者也、於是乃命寺僧、仍其故處營

斂瘞埋以從周文之故事、因又立石為表、而使親敷記之、謹按舊

記、以悟性寺為 義天公之墳寺也、而 龜伯公譜又載鐫刻義天

二字在穆佐之佛寺、則所謂佛寺者疑指悟性寺焉爾、由是觀之、

義天公塚在悟性寺云者、亦不為無謂矣、然今日之所得者、罕幸

墳冢既已鞠為草莽丘墟、而殘碑斷碣片言隻字無復存乎其間焉者

也、雖謂或得其處、然將何以為之驗乎哉、姑書其事于石以詔觀

者、而後有以考焉、云爾、

安永四歲在乙未月 日

一福昌寺年代記ニ、久豊公於本宅病死と有之、本宅ハ則穆佐也、

仍テ悟性寺ニ葬所あきらけし、其後伊東家兩家及鋒楯故、石塔

をかくして、五輪之内ニ 義大之二字有之を取て移福昌寺、于

今怒翁公同在御靈屋切服之石を立といへとも、 儀天公之御廟

名非左尚證據明り也と云々、雖然、若石牌ニ記時ハ將來同様之

不審在し事を恐て也、

高城 高城・山之口・勝岡三ヶ所、惣名曰三侯院、

一天正之比、北郷讀岐領之、○肝付兼重一節住之、○享徳二年四

月廿九日、北郷讀岐守持久移此城、寛正六年迄居住と云々、其

後伊東家ヲ押領ス、山之口・梶山・勝岡・野々々等也、異ニ、明應

四年、伊東家ヲ三侯と領すと云々、明應三年十一月廿五日、領

此地歟、

一天文元年壬辰十一月廿七日、北郷讀岐守忠相・島津豊俊守忠朝、

北原其等か受加勢攻此城、城主八代長門守を初三百八拾余人打

取候、

一同三年壬正月六日、伊東臣落合刑部丞兼統其八代氏、已心を忠相ニ

通し、忠相之人数を城中ニ引入、依之忠相之手裡ニ入、右城を

捨て去、故ニ忠相即當城ニ移ル、忠朝格議と有、同十年六月、

伊東・北原寄来、伊東ハ鳥越ニ陣し、北原ハ志和地城ニ陣、此城を攻、忠相城門を開切て出ル、梶山・勝岡・山之口勢等馳加り、諏訪之馬場ニて攻合、忠相勝也、同十一年八月廿日、又小山川原ニて戦、伊東・北原方、志和地城主白坂下総已下数百人打取、忠相勝利也、同十二月十六日、伊東氏方野々三谷城を忠相に返し、鳥越之城を拂て飯陣、同十二年正月廿四日、北原カ山田之城を陥ル、同五月十一日、志和地之城手ニ入、伊東・北原押領之地悉北郷家手ニ入也、

一天文三年、當城伊東方落去之砌、右山越ニて敵多亡と云々、

一下城、有水村西久保殿、一小山城、桜木村、一松尾城、山之口殿、三

ヶ所追而由緒可考、

一東霧嶋三所権現、社司古松氏、代官司上田氏、檢校守屋氏、例祭二月初酉口、座主勅詔院、所祭六座、天津彦々火・瓊々杵尊・木花開耶姫・彦火々出見尊・彦波瀲武鸕鷁草葺不合尊・玉依姫・神武天皇、

延喜式神名帳、諸縣郡一座小霧嶋神社と有、到後世五神合祭而為六座、瓊々杵尊、瓊々杵尊不合尊、迄神代三代、神武天皇を合祭り奉るハ、神皇永運之序也、性空上人崇之、

崇

一春日大明神、社人末原氏、

高九百三十五合

一春日山、三摩地院、東竜寺、大乘院末、開山舜賀法印、

高三百三十五合

一瑞雲山、吉祥寺、臨關山派大慈寺末、

高十三石

一東霧嶋山、金剛働作寺、勅詔院、大乘院末、東霧嶋宮座主、

開山性空上人、中興開山法印權大僧都及瑜、慶長十年乙巳六月二日寂、或書、人皇六拾二代村上天皇康保三年丙寅、東霧嶋創立ス、

或天曆二年己酉建立共、

高五百余

一龜石山、石山寺、福昌寺末、往古福聚寺と云、

一高城、鐵初、伊地知縫殿助秀豊也、

一古峯、慶長五年二月廿九日下城、是忠真依逆也、比志島式部少

義智入道守之、

一旧記曰、文明九年丁酉七月四日、三股・高城相受取、八月六日

祐堯・祐国三股ニ相越也、

一明應元年之比、高木長門守・同左衛門尉殖家父子守之、其後背

忠国公命、故被誅戮、

一地蔵堂、白坂下総守需を祭、

一下城、在有水村西之久保、平城也、西北河流廻、

一古陣、在石山村、里人かめか塚と云、

一古陣、右同、東之方野岡也、此陣福永丹波守陣所之由、里謠ニ傳、

一西北東之方川流れ、要害堅固之場所也、

一石山寺、本尊觀音、靈佛也、四時參詣不絶、開山夷庵和尚、應

永六年己卯開基、自中古太守公東日筋御通路之節ニ、御參詣被

遊候、

一高城者建武年中肝付八郎兼重号三侯領之、至德年間、和田土佐

守入道正覚領之、天文年中、伊東氏城代八代長門守領之、

一東霧嶋兩脇社、左乙若社、白山権現社、右十一面觀音、

右、性空上人像安置、右二社上人自彫刻也、炎上之後、新院像

彫刻、是依家久公命、佛師康嚴隅州加治木人造刻也、

一小山城、城地依洪水龜存せり、

一天文之比、伊東之凶徒三侯院内諸所ニ構要害籠城故、同六年十一月廿七日、島津豊後守忠廣・北郷讃岐守忠相相議而、発兵逼

高城、伊東兵敗走、石山越ニ追詰、主將拾九人雜兵三百八拾余人打取、所謂八代長門守^{高城}・長倉播磨守・海老原刑部少輔^其之口・川崎甲斐守^{松尾}・稻津某^{梶山}・海紅田某^{勝岡}・米良某^野城主・福永某^{下城}・宮崎宮永^{小山}等也、依惣將八代長左衛門守、打死之後當城ニ者落合刑部丞兼任籠城、

一岩井ヶ野、此所邊路番在、

山之口

慶長十九年方郷ニ被召立候、大寺主計助地頭被仰付候、文和年中諸郷方衆中七拾六人被召移候、

一北郷家世々傳領之地也、

一明應四年之比、伊東家方當城を押領ス、

一天文三年正月、伊東勢高城落去之節、當城も又捨て落去ス、

一関所、有留松村、

一崇廟の野八幡、在留吉村、社官龜沢氏・別當弥勒寺、

一桂谷山 示現院 修善寺、真大末、在山之口、開山樺大僧都頼善

と云々、中興開山尊信、

右寺境内三間四面之千手觀音堂有、棟札、天正廿年、大檀那藤

原時久と有、此觀音ハ、建武四年、土肥平三郎実重建立と云々、

一桂昌山 十輪寺、福昌寺末、山之口村、

一古壘、松尾城と云敷、慶長五年二月廿九日下城、忠真逆意之節、

倉野七兵衛守之、其外樗木本水佐・同賢助從之、倉野戦死之後

為主將、○此地山城也、西北東之方川水廻城壁、南方野岡ニ統

也、龜鶴山石城と云、

一番所、在山之口、日向瀬、上同村、切寄、飛松、上同、上古本関所

也、

一古壘、孫太郎城共云、在留吉村、出緒不詳、

一瑞應寺陣、在同村瑞應寺之上之峯、由緒不知、堀切有、

一松尾城、在花木村、三侯城共、野城也、

一豊後陣、修善寺見ゆる西之岡、堀切杯、

一下之城、在留吉村、鶴ヶ城共云、

一くぶきか城、在花木村、

一雀か城、上同

一宝生か陣、山之口古城東ニ有、

一逆谷、追ヶ谷共云、修善寺之上東南ヲ云也、

一天文三年正月七日、高城方北郷手ニ入といへとも、伊東之殘党

猶有梶山・勝岡・山之口之間、北郷方追打之逆谷ニおひて合戦

残卒皆亡、

一伊集院忠真叛逆之節、城主田中小兵衛^{本丸}・平原又七^{内丸}・水

野玄蕃・倉野七兵衛^{榑手大}、慶長五年二月廿九日、嶋津中務大輔

忠豊・北郷佐左衛門三久兩將ニ而責之、忠恒公御備を宝光寺^高

花木村ニ被立、北郷手ハ田原門^{山之口村}・於田原門鉄炮迫合有、

修善寺之住僧春朝坊等出て、奮戦ニて終ニ落城ス、

一の野八幡社 撰社 早玉宮 春日社 南地主光神 涼王社 池之主

勝岡 北郷氏世々傳領之地也、

一明應九年之比方伊東家押領、

一崇神諏訪大明神、社官兒玉氏、

一無量山 蓮寿院 長久寺、真大末、

一鷄足山 梁新寺 禪福末、開山福昌卅世漂州龍和尚、北郷一雲

菩提所之由申傳候、

一天正年間、北郷讚岐領之、其後伊集院忠棟領之、

一古壘、慶長四年、忠真都城籠城之節、此壘ニ籠兵、令使伊集院兵部少輔忠能或忠辰斎守之、同五年二月廿九日下城、

一旧記云、永正十七年庚辰、三保・勝岡城取初也と有、

一伊東家押領之時、天文之比、城代海江田某領之、其元年大文三年正月六日、伊東兵高城落去を聞て、當城を捨て去、依之北郷讚岐守忠相手裡入安堵旧領、文祿四年秋、伊集院右衛門大夫忠棟領之、其子忠真野心之後、慶長十九年為公用、

一高畑・大谷曰・巖ヶ元此三ヶ所、至日州飢肥領邊路也、

都之城

正安比者球磨相良氏押領之、其後文和四年北郷氏領之、

一奴貝池、在安永、都之城内南郷・北郷・中郷、惣名庄内と云、今本古之内

一南郷・梅北五拾町・八南郷也、都城本城ヲ云古城ハ五拾町也、上長飯・下長飯・

鷲巢・寺柱・木前・後久・宮丸・田部・安久ハ中之郷也、新地ハ上長飯也、

一

一文和四年十二月十二日、島津七郎左衛門尉資忠為勲功之賞、將軍尊氏公ヲ賜北郷、安永川東仍号北郷、永和元年、嫡子義久築地其後世々住之、

一

一應永二年之春、伊東・相良・菱刈・牛屎・渋谷已下之大敵圍之、本原を為陣營、氏久公為後詰率八百計兵、三月一日養原ニ而大合戦有之、北郷弥次郎基忠・同七郎忠宣兄弟戦死、同三日ニも又合戦有り、味方本田信濃守重親・肥後兄弟・石井某・北原彦七郎・完目藤藏戦死也、敵方相良氏頼・伊東六郎左衛門尉・池尻五郎・薩摩一揆之張本渋谷右馬助其外數兵打取也、氏久公為援軍發志布志、同所天ヶ峯ニ張陣ス、夫より平長谷ニ御陣替也、

文明八年、敏久安永ヲ又當城ニ移と云々、文祿四年乙未八月廿三日、時久入道一雲去當城移邪答院宮城、當地ハ伊十院右衛門太夫入道幸侃領之、慶長四年春、幸侃伏誅以後、其子源次郎忠真樞籠當城、翌年之春三月廿四日降参、慶長五年三月、讚岐守忠能一雲當地ヲ安堵ス、

一梶山城、應永元年甲戌二月十七日、元久公と今川幡摩守貞兼有合戦、高城々主和田土佐守・梶山城主高木長門守加勢す、北郷又次郎忠通戦死、又三月七日合戦、北郷二郎・和田土佐守・伊地知又七郎戦死也、慶長四年、忠真逆意之節、家臣野邊彦市籠當城、同五年二月廿九日下城、○明應四年之比、伊東家方當城を押領ス、天文三年正月六日、高城落去之節、伊東兵當城も又退散ス、

一野々美谷城、求磨相良氏押領之、應永元年七月、元久公密謀を以岩岩川方打取守兵取返し、樺山音久を城主ニ居給ふ、從是世々樺山家在城して、至大永元年百三拾年住此地、其後今川貞兼庄内ニ在陣ならずして、山東ニ退去と云々、明應四年比、伊東家方押領、天文三年四月、高城落去故、當城伊東勢も捨て退去、○慶長四年、忠真家臣籠城、九月十日、北郷家手勢郡城近邊宮丸村を放火、仍而都城方小松尾ニ出合迫合有、當城方野頸ニ備を出入、太守之軍對之攻合、加賀守三久下知ニ而、北郷家人數横入敵敗北ス、城門迄追入る、此時小杉丹後鎗を合、同五年二月廿九日下城、

一安永城、北郷之内前山川内村、城内金石が城と云有、寛正六年正月廿九日、北郷持久去高城、當地古江村今ハ中霧薩摩之内也摩迫ニ移居ス、其子讚岐守敏久代、當城勢田ヶ迫と云所を築、

一

号安永城と云々、應仁二年也、天正七年八月二日、北郷二郎相
久父一雲之命ニ背、當地金石城にて自害、○慶長四年九月二日、
安永口にて攻合有之、同十二月八日、敵以伏兵味方百余人戦死
也、同五年二月廿九日下城、

一山田城、初荒神山と云、北郷氏代々傳領之地也、明應四年之比よ
り伊東氏押領ス、天正元年正月六日方忠相手裡ニ入、○慶長四
年六月廿三日被攻落之、城主長崎休兵衛尉并中村与左衛門也、

兩人戦死、其後忠恒公御入城有之、九月廿九日也、同十二月四
日間垣をくれ、同五年正月四日夜間垣破、人数少々此城ニ籠ル、
一志和地城、北郷氏代々傳領之地也、○天文年間、北郷氏方押領

し白坂下總守居城之、○慶長四年七月十三日、城兵出て東霧嶋
北郷陣ニ働、八月十五日ニも又働出、北郷勢打出、丸谷ニ對し
楠牟礼之渡りニ而攻合、敵を城ニ追入也、十月十五日、太守之
軍勢城近邊陣を取寄候、十一月八日、柳川原ニ而攻合有之、城
主伊集院掃部助也、或春成一忠齋
合戦之節守之、同五年二月五日下午城、

一森田、同五年十月二日、太守公此地ニ御本陣を居給ふ、

一梅北城、天文七年戊二月二日落去、北郷氏領と成、忠貞逆意之
時日置善左衛門守之、同境内・渋谷仲左衛門等從之、取添之翌
ハ梁瀬某守之、慶長五年二月廿九日下城、○天文七年、三俣・
高城を梅北ニ被替、豊州格護と有、

一茶蘭ケ尾、北郷長千代丸陣場也、

一高木、同十月十六日、此所ニ而攻合有之、

一五本松 中霧嶋 風呂谷 枳ヶ谷 蛭ヶ嶽 柳川原 楠牟礼

此諸所合戰場也、

旧記曰、大永四年甲申五月三日、三俣・野々美谷城受取也と有、

一関所、中郷內在寺柱村、日州至鉄肥領ニ、
高拾八石四斗五升

一霧嶋山 金剛院 明観寺、天台南禅院末、荒嶽権現不動堂別當、

一神社兩所妙見、社官感應寺能登、
高四石六斗、領主持高之内方寄附

一松林山 成就院 天長寺、大末、

文祿四年十二月、於宮之城東谷建當寺、開山覚翁上人、

一長昌山 竜峯寺、禅權寺末、北郷家代々石塔有、開山起宗與和尚、

慶長元年丙午二月、當寺建於宮之城虎井村、其節開山陽傳和尚、

一慶長五年三月十四日、源次郎忠貞都之城落城ニ而、竜伯公常城

ニ御打入、同十五日唱太平也、役者岩切三河入道也、同廿日、

富隈ニ御歸陣也、忠恒公同廿二日鹿兒嶋江御歸陣也、

一天ヶ峯、梅北村西生寺、此所應安六年、氏久公志布志方発都之城

北郷氏援軍之時、御在陣也、二月廿八日、去此所平石谷ニ陣替

と云々、西生寺方東南之方十町余も可有之、御陣場ハ今茶臼ヶ

陣と云、嶺上共疊々敷計、

一西城寺阿弥陀堂額、大曼荼羅院、永仁三年乙未七月十日、正四

位下左衛門佐藤原定成、

一梶山村四德山大昌寺ニ

應永元年甲戌三月七日

捐館日山妙禪定門 覚靈

應永元年甲戌二月十七日

捐館聖安道賢禪定門 覚靈

前尾州太守哲翁忠英居上 覚靈

右、四德山大昌寺ニ位牌安置、此寺ハ北郷藤七郎久秀之位牌所

ニ而、御門前ニ久秀切腹之時腰掛之石有、開山不薩即和尚、寺

内兄弟之石塔有り、

一荒人大明神、在志和地村、白坂下總守靈を崇、
 一山田城、龍州城其云、城内、上総ヶ城・阿波城・新城・取添城・
 西梅とて曲輪四ツ有り、上総・阿波ハ本丸之内地形式ツニ割候
 所也、東北ニ大手・搦手、南ニ野頸口有、東北川流連野頸之方、
 一安永城、号霧翼城、大手南、搦手西、南西北流、西北間高シ、
 北ニ野頸口有、一乱之節、白坂永仙度々此口を兵を出ス、
 一球磨陣、安永北方村之内、在國之内、南方大河流、
 一堀之内、南郷之内、忠久公御下国之後、御居住之所と見得たり、
 一正一位兼喜大明神、祭神異躰金箱、崇北郷常陸介相久靈、
 相久者北郷左衛門督時久入道一雲之嫡男也、天正九年辛巳八月
 晦日、依讒違父意、自於安永金石城自殺、年廿九歳、法名了山
 等玄常徳寺殿、天正九年辛巳、崇相久於若宮八幡宮、慶長十三
 年戊申、号靈八幡宮、明暦元乙未十月、昇進ス兼喜明神、天和
 二壬戌八月、追尊兼喜大明神、是日方請神職長上吉田左兵衛督
 卜部兼連を進神位者也、
 一神社神社、所祭、内宮祭神三座、天照皇太神、左天手力雄神
 右萬幡姫命、外宮豐受皇太神、東方国常立命也、西方天兒屋根
 命、太玉命二坐、
 右、萬壽三年丙寅正月二十日、平朝臣大監季基勸請、同年九月
 九日、神社造立也、
 一関所、在梶山村、至日州飢肥領邊路也、
 一切寄々、在番領、梶山村也、梶山郷通路往還之要所也、北郷家臣警
 固之、
 一福留、右同、細目、右同、野頸、右同、此三ヶ所、至日州飢肥領
 邊路、在番領、

石原 大峯川内 内山 正應寺口 中野 杉木水流 前村 諏
 訪口 留木野 牧野 高野 秋丸 假屋 温川 走持 大野
 正矢谷 平山、此諸所邊路番有り、

松山 新納家九代近江守忠勝領之、天文七年七月廿三日没落、嶋津忠朝

祭米三十五升 領之、

一正若宮八幡 社司庄司左近、

一八幡山 寿福寺 蓮華院、大乗院末、開山道教、天徳元年、開基

年月不知、中興開山堯日、十一月四日寂ス、寛文之比之人也、

一靈嶽山 蒼竜庵、禪志布志永泰寺末、開山代賢和尚、

一當郷者天文之比、島津豊後守忠朝領す、天文八年七月廿五日、

忠朝從士平田新左衛門松山之城を受取と云々、有年代記、永禄

五年壬戌四月五日良兼領、本平山氏守之、肝付省鈞攻之、平

山右馬允戦死也、終為彼邑、肝付右馬頭良兼押領、右馬允塚迎

麓八幡社之前杉木立、

一古城、正八幡宮上也、永禄年間、豊州家守城平山氏守之、永禄

二年、肝付省鈞攻而拔之、平山氏遂戦死、夫より已来肝付方支

配之城と成、

池大納言頼盛四男武藏守知重男從五位下隠岐守重頼事、文治四

年戊申、後鳥羽院御宇、日州松山下向領之、旧記ニ有、

一松山城、應永廿年癸巳築之、旧記ニ有、

一天正二年甲戌三月、北郷一雲兵進発シ、向此地迫合有、

志布志 近江守忠統系譜、天文十八年丙午、易飢肥於救仁郷即大崎領四邊原也

十一年下有、九代近江守忠勝迄領之、

一 往古救仁院と云、

一 榆井頼仲領之、其後新納時久領之、

一 松尾城 廣朝之城と云、かり屋方二丁余も可有之、西の方方少シ北之

方による川上之方也、

畠山治部太輔直顯依謀計也、已後新納時久々世々此城ニ住ス、

○應永八年、本田忠親久照を大將とベ、向川原之下宝満寺ニ攻

入、実父近江守犬馬場ニ打出合戦、此日野邊薩摩九郎從兵熊田

原兄弟拔群働戦死、其後兩人之像を彫刻ベ、宝満寺之二王トス、

○天文八年七月廿六日、新納忠勝没落、豊後守忠朝領之、○惣

廻り九町十四間、高廿七間、往古榆井頼仲遠江守居城也、當城

守護神蔵王権現社有、別當明星院、例祭十一月十九日、

一 内城 大野 久尾口 中野 久尾口、内城三丸也、應安之比

氏久公此城ニ被成御座候、嘉慶之比、元久公去此地鹿兒嶋ニ移

給ふ、

○惣廻り拾四丁廿四間、高四拾七間、堀切等所々ニ有、此城五

口有、所謂火口・西谷口・沢目記口・向川原口・小測口也、

内城ニ中古新納惡四郎実久男久顯在城也、

一月野、大永三年十二月七日、勝久公為伊地知縫殿介、重岡・吉

田兩人為將被遣、被責新納家之節、此地ニ出張合戦有之、戦死

七百三拾八人と云々、守護方敗軍也、

一月野村、大永二年十二月七日、勝久公為伊地知縫殿介・重岡・

吉田大將ニ而被差向、新納近江守忠茂ニ合戦、守護方敗軍也、

右兩人其外七百三拾八人戦死、右之場所不詳、當村之内大崎・恒吉

伊屋松と申所有、其所三千人塚連塚壱ツ有、右之邊を合戦場と

云、然とも究而不詳、此所共ニて候半哉、又慶長四年七月三日、

庄内一乱之節、於當村合戦有、此所ハ下岡と云所也、庄屋役所
之上也、當村庄屋若松某を庄内之人數取卷、都而廿三人打取と
云々、

一 西山、應永卅一年、菊池重朝使節立田某來通之時、馳走ニ大追
物有之、此時於安楽川々遊有之、

一 蓬原城、救仁郷氏城也、国合合戦已後、氏久公被攻取候、

一 夏井、在夏井村、天文七年戊四月二日没落、忠朝領と成、

一 鹿谷、此所邊路敷、一八郎ケ野

右三ヶ所、日州福嶋・延岡通路、依為境目在關所、夏井勤番十

人、加番式人、當郷大番隔月ニ壹人ツ、順番ニて候、

一 津口番所、自他国之商船往返之要津也、

一 蓬原臺、蓬原村、救仁郷某守之、国合原合戦之後、氏久公御責城

被成候、其後天文十五年丙午七月十三日、肝付省鈞法印責而拔

之、省鈞系譜城主救仁郷藏人介頼世系圖ニ有、守之、其後大野出

羽守・伊集院筑前守久利地頭也、天文之比敷、

上之城・中之城・下之城として三丸有之、西南之方田地、北東

之方大川有、

一金丸城、蓬原村方西之方四五丁も可有之、

一元祖四郎左衛門尉頼綱号救仁郷已來六代相統而守之、氏久公責而拔

之、天文十五年丙午、肝付河内守兼統責取之時ニ、城主救仁郷

藏人介頼世下城矣、

但救仁郷家系圖を以按するに、源姓足利一流近江守満頼号渡川、兵衛佐、

為九州之探題應永三年比下向九州、其後下日州救仁郷院居住、

其子満氏嫁救仁郷肝付之支族ニ而氏之女、救仁郷氏ヲ冒シ姓改

源と見得たり、然則統救仁郷遺領三百五拾丁構居住蓬原、子

孫連統而守之たるなるへし、満氏ハ四郎左衛門頼綱同人之様ニ見候得共、同人ニ而ハ有之間敷哉、救仁郷氏へ入響之筋なるへし哉否哉、同人歟異る追而可考、

右蓬原村ハ、往古一所之様ニ有之、地頭領主代々居住有之、地頭伊集院肥前守久信迄ニ而、文禄元年壬辰、在郷と相成候て野村加賀守三年程知行有之、其後御蔵入高ニ相成、右松安右衛門代官相勤候者文禄三年甲午也、

一向江川原、麓川向宝満寺之下也、古合戦前ニ記ス、永禄三年庚申、應永六年十二月三日、元久公ヲ菱刈安藝守久隆へ、當地之内十五町を給為料所矣、

一安楽村、建久之比、安楽平九郎為成^{救仁院領之歟}、天文七年二月廿日落去、中朝領と成、又同八年四月廿一日落去、

一天文七年戌十一月十九日、豊州志布志ニ御移と有、

家久公大慈寺へ御光臨御立之節、住持龍雲和尚中途迄付送、

公古松之下ニ御休被遊御詠歌、

たゝせねやちきりなれたる秋ならん千とせの松の陰のやすらひ

右御詠歌を和し奉りて

龍雲

平原沙塵又層巒 今日送君思万般

獨立亭々松樹下 高欲一詠和皆難

右御詠歌ニよりて千年松と名附候由、六月城之傍ニ有、

一文禄五年七月廿五日、近衛信輔公御帰洛之節、志布志へ被成御

着候、廿五日志布志江御着被成候、大慈寺といへる寺御旅宿となる、彼寺之坊主参扣、則和漢之あらましあり、拙子へ発句つかふまつるへきよし、近衛様ヲ尊意之まゝ仕りぬ、

松の木ふかき所なれハ

浪の聲や松に入江の秋の海 玄与

芦花招釣船 杉

亦御出舟を祝侍りて

追風も有明の月の船出かな 彦与

志布志江御逗留候間、相良吉右衛門尉・福岡久五兩人御旅のとちちかの湊と云浦ニ、夜更て御船を留らる、末略ス、

一將軍義詮為鎮於三州乱、朝山出雲守師綱・同小次郎重綱を為上使、明德二年下向于當国、太守元久公於大慈寺對顔有、進成簇

催和漢會也、
本書ニ有、此条何ノ条ニ入コトヲシラス
一十二月廿日、肝村之与党卒多勢責於志布志城、于時嶋津豊後守

一族領三郎五郎武清、向江川原於地藏堂前相戦三度、敵ハ伊集院三河守^{肝付}与党と旧記ニ有、

一西谷口、麓川通路也、地頭飯屋方西方、麓ニ下ル通路小川流ル、其平を西谷と云、永禄元年戊午六月六日、於此所龍三郎五郎武清合戦与業

丸伊豆^{肝付}与党矣、或弘治二年丙辰、八月二日共、武清覺書ニ有之、

一安楽壘、本通路筋川上之方拾四五丁ニ有、山口大明神之宮方西小シ北ニ當リ亭々余も可有之歟、堀ニツ有之、其内ニ又堀之有、永禄五年六月良兼責取之、天文十三年四月廿日、肝付省釣知行すと有旧記、

省釣譜ニも、右之口其落城ニて可有之歟、又安楽川ニ而龍三郎五郎武清覺有之候由、武清覺書ニ有、

一沢目木口、天文廿二年癸丑七月十日、此所ニ而追合有、平山武清之覺書ニ、志布志沢日本ニ而征矢仕候と有之、

一山假屋、^{大性院}境内廣サ五反計、傳云、往古天智天皇行宮之跡と云、志布志屋敷上也、

高六拾四石余

一蜜巖山、丈陸寺、大性院、真大乗院末、開山良範法印、開基年月

不詳、本尊阿彌陀如來、行基菩薩寺内在天満宮、例祭十一月廿五日、

為新納惡四郎久顯像代、天文三年甲午八月廿八日、新納近江守

忠勝建立之佛鉢之内ニ、天文三年甲午八月廿八日、藤原忠勝と

有、

内城ニ有、一三寶荒神社、別當九品寺、石之小祠、新納惡四郎久顯之守護神と

云傳、例祭十一月十三日、

一留ノ城戸、内城ノ門ノ場所、一隱井戸、上同所、當城用水也、

一若宮大明神社、山口六社之内、持統天皇之靈廟也、例祭正月始戌

日、市渡として山口社之神輿此所ニ行幸有而祭礼有、

一腰掛之石、弓場塔之内壇有、長毫丈許、傳稱、天皇帝往古御通行之

砌、暫御腰ヲ被掛候由、依之遺跡に、今山口宮市渡之節、此通

路之馬場江神輿ヲ被止休息シ玉フ石也、其時獅子舞有、此時宝

満寺方三層戒を授給ふ旧式也、

一時鐘、假屋之上内城矢倉之場所也、明和元年甲申建立、

一高城、松尾城南大手之上、一新城、高城之西海陸寺上、両所城、惣廻

り九町廿六間、高サ廿七間四尺五寸

一前川、大河也、源内之倉村之内中間と云山中方出ル、周流五ツ、

十二月方二月比まで白魚海中方登し、當地之名産也、

一秘山、蜜教院、寶満寺、律宗南都西大寺末、薩陽門首、勅願所、開

山信仙上人、又者英基和尚、相州鎌倉極樂寺開山忍性菩薩之弟

子、正和五年丙辰當国ニ下向、當寺を建立、花園院勅願所也、

且又足利左兵衛督源直義日本六拾六州ニ塔婆を一キツ、立、其

内之一員也、仍往古々遂院參、然処ニ其事及中絶、後水尾帝之

御宇万治年中、仙秀和尚上洛有、往古之院宣等をさゞけ、東山

泉涌寺ニ倚頼ニ而、勅修寺前大納言經廣卿江蜜奏シ、訴天聽處

願相達、經廣卿方其旨趣を被相達、万治二年十二月十五日請院

宣ヲ、同十九日院參有、是方相統而如先規院參有之也、

一當寺大門仁王石像者、應永八年之比、凶徒等上総介伊久之三男

北又三郎久照を大將ニ取立、日洲櫛間方発向し向ヒ川原ニ攻寄、

已ニ當寺邊迄乱入す、于時松尾之城代新納越後守実久庄内表出

陣之留守也、故城中之殘兵等紙旗を諸所ニ立、大勢籠城也、

謀故、敵急ニ不近得、其間ニ実久急を聞速馳歸り、犬之馬場ニ

向陣を取、川を隔迫合有之之時、野邊薩摩九郎が從兵熊田原兄

弟拾八才・拾六才之若武者、共ニ遂テ戰死諸人憐之、為二世安

樂兄弟之像を仁王彫刻シ建當寺、此合戰三月三日也、因茲後年

其節之勝利を祝し、三月三日ニ當郷ニ限り昇を立る事其遺風也、

又六七拾年前迄ハ、三月三日ニ大演小演双方川を隔立合、互ニ

磔を打合戲ル事有り、是又合戰之遺風也云々、今其事断絶ス、

本尊如意輪觀音運慶作、此觀音靈驗新也、白他国之男女參詣不

絶、平産之符當寺方出ル、花園院御影像一幅、此尊像元來御自

畫也、因記云、玉鑑和尚之時ニ至り、安永七年戊戌六月廿六日、再び參内

之勅を蒙候云々、

繪所ニ而写之、讚ニ曰、

傳如來正法 半玉鳳禪宮楷首

花園亭 萬年護日東

妙正寺雪江依所望書之、但八之宮良純親王御讃と云々、

佛舍利、舍利塔龍之彫物金、後藤作之由、曆應三年庚辰正月一

日、足利左兵衛督源朝臣直義寄進狀并塔婆料寄進狀等有り、龍

虎絵二幅秋月筆、花鳥絵二幅呂紀筆、當寺寶物也、

一寶満寺 正和五年丙辰開基、開山英基和尚、花園天皇勅願所、
本尊如意輪觀音、運慶作、元応二年南都西人寺より勅使、佛舍利ハ曆應
三年、足利左兵衛督源朝臣直義、奉院宣一國一基之塔婆を建安
置之、其一ニ而候、

一新豊山 永泰寺、中興開山代賢和尚、本尊釈迦如来窓松、此本
尊元来日州福嶋大陽寺ニ有之、當寺ニ引移し、大陽寺ハ豊州家
之寺ニ而、彼家之位牌等同敷引移し、貴久公御牌立、永泰寺殿
大中良等庵主、太守貴久公依遺命、三州為御守護義久公御代當
寺江御安置、即永泰寺殿と奉号候、御牌銘ハ義久公於御前福昌
寺代賢和尚書之と云々、

一向川原、寶満寺門前より永泰寺之下通りを云、

一有明浦、此邊之惣名也、海上眺望絶景也、安永三年午三月半比
遊行五十尊如上人當地江巡行、此所ニ而、

たくひなや春も名残の月のかけなミ白砂の有明の浦
當浦鯨名物、其外魚貝類多シ、海邊馬蘭草ニ而等を作壳、名物
也、

一権現嶋、海中ニ有、波上権現社有、例祭九月九日、別當寶満寺、
此嶋至て高ク、當浦之波除と成、

一金瀬、右嶋より三丁程進ニ有、嶋名物也、
カキ

一檳榔嶋、海路二里、嶋廻り一里余、草木竹茂生ス、檳榔木多シ、
故島之名とす、若葉を取、團扇・笠等を作ル、此地之産物也、
魚類・鮑・蠣・榮螺・なからめ類多シ、嶋頂ニ檳榔御前社有、
天智帝二ノ后橘姫、乙姫宮之靈社也、例祭正月中日、山口六社
之内也、

一すられ嶋、同濱、権現島より四丁余、此所海邊絶景也、春季遊戯

之輩不絶、赤海松・青ミル・曲太・菊海苔・海雲等名物也、

一平瀬、夏井濱之沖三丁余ニ有、五六反程平ニ而、瀬之上ニ濱有、
公此地江光臨之節者、此瀬ニ渡遊之先規と云々、鮑・なからめ
海草類名物ニ而、平日此瀬ニ渡る事を禁ス、

一飯盛山、夏井濱より東ニ有、公此地江光臨之節、此山上ニ飯殿を
營、是より自他國之境目を遠見有、狼煙を揚て國界之限を備上覽
と云々、

一丸山境之松、此所志布志と秋月領福嶋之界ニ有、大木之古松也、
一福寿山 無量院 海徳寺、本尊阿弥陀如来、開山其那和尚、ニイ
説阿上人、
遊行七世、曆應元年戊寅建立、

一龍興山 大慈寺、開山玉山和尚、勸諭佛智大通禪南禪寺開山大明國師
法嗣也、生國信濃國井上氏之人也、曆應三年庚辰草創、施主大檀那榆
井遠江守頼仲建立、當寺初隰州肝付郡ニ有而号帝釈寺、頼仲常
地ニ引移て改大慈寺、其後頼仲畠山礼部ト合戦、軍敗レ當寺内
寶持庵ニ馳入自殺ス、其石塔今ニ有、辞世之頃、
本尊千手觀音運慶、江臨大明神、小祠有、傳稱、新納惠四郎久頭
之靈を崇ム、開山堂卷簾ト額有南岳悦山筆、觀應二年辛卯五月廿
五日、開山大通禪師入定之所也、

一大慈寺往古在高山郷、号帝釈寺、依勸願曆應三年創建、開山玉
山和尚、勸諭佛智大通禪師井上氏之人也、給廣惠之二字、大慈廣
惠禪寺と号、大檀那榆井遠江守頼仲建立、

一即心院、塔頭、開山剛中和尚大慈寺、氏久公剛中和尚御婦依有之、
當院江御廟所御牌等御安置、御靈骨者大始良龍翔寺江奉納候、
御牌名前奥州太守齡岳久公大禪伯と有、敬外欽公大姉御前様、
溪月宗江大姉御姫君、御位牌有之、此姫君厄ニ被為成、龍翔寺御

住職被成候、御靈廟二ツハ、氏久公并御夫人御靈廟也、

一船磯、當時松原井田地等有、昔ハ磯邊也、天智天皇當國臨幸之時、御船初て此所ニ着シ、故此名有と云々、

一天宮大明神、在下安樂村、例祭正月末日、天智帝船磯ニ御着船之時、老たる夫婦之者有、帝一宿シ給ふ、餉參する貯なくて鮑菜螺類之海物を揚而捧候由、此遺風ニて、于今山口宮正月之祭礼ニ鮑さくい等之作物を供し奉る也、右二人之老者を一之宮と崇と云々、

一口宮、正一位山口六社大明神と号ス、在上安樂村、別當千手院、大祭正月、九月兩度中ノ午日、此外年中四拾壹度之祭礼有之、當社者人皇三十九代天智天皇之宮也、又倭姫・玉依姫・大友親王・二之宮女・持統天皇及乙姫宮二ノ后已上六座を諸所に分座して六所大明神と号ス、然者大同二年丁亥、宮を安樂ニ遷シ六社を一所ニ崇、山口山王六社大明神と号ト云々、

一濱殿宮、本社ヲ壱丁程ニ有、此宮正月・九月之祭礼ニ、本社之神輿行幸祭事有之所也、

一鎮母大明神、山口六、中安樂ニ有、天皇一ノ后倭姫之靈社也、大友皇、祭礼正月末日、打植之祭と云、子御母

一中之宮大明神山口六社之内、下安樂ニ有、玉依姫靈社也、例祭正月酉ノ日也、

御在所嶽、或顯姓平トモ云、田之浦ニ有、天皇此所之山上ニ飯宮ヲ作り給ふ、依而此名有、天皇崩御之後、和銅二年己酉六月、此嶽ニ靈廟を立て山宮大明神と号ス、今田之浦村ニ有、天皇廟石小祠當山絶頂ニ有、

一山宮大明神、在田之浦村、山口六社之内、天智帝之靈社也、例祭

正月・九月卯日、祭前中日磯狩有之、祭ノ日掛神前春ノ狩宮谷秋之狩、御在所嶽也、

一安樂川、源自都城尾平野山中流出、經八里余之行程而當地海ニ入、此川鮎・鯉等名物也、

一天文五年丙申、此年志布志弓矢初、閏十月廿八日、横峯合戦、豐州衆拾八人打死と有、大横峯後方を云歟、追而可考、

一口口大明神、所祭天智天皇一座、

一勸請年月不傳、傳曰、和銅二年六月、志布志之内田之浦村御在所嶽ニ祠を建つ、天皇崩御之地と云、大同二年、同郷安樂村ニ遷坐し山口大明神と奉称也、近世授神位正一位、例祭正・九月中ノ午日、

一當社之敷地ニ古ハ白馬不生立、山野ニ近方の白馬常ニ殺せ、其此敷地ニ不得入、天智天皇白馬ニ乗て山科野ニ入給ひて昇進被成とし云、山之片踏落たるを以、御廟野とて祭之と云、志布志ハ往古ハ救仁院家領之、文治・建久之比、救仁院平八盛直領之、其後仁礼遠江守頼仲官方一捍領、新納近江守時久領、代々領之、近江守忠勝天文七年七月廿六日、嶋津豊後守忠將豐州忠勝を攻

亡而領之、永祿五年五月廿八日、肝付左馬頭良兼領と成、

一鈴書良兼譜ニ有、永祿五年壬戌、肝付省鈞當城ニ居て、同九年丙寅死去後、肝付三河守入道竹葉為地頭、其間八年、天正元年癸酉正月六日、国合原戦死、又肝付治部左衛門為地頭、南郷為誅軍勢指向処、治部左衛門遂戦死、其後鎌田出雲守地頭、其次鎌田刑部左衛門、其次喜入大煩介久正、其次樺山權左衛門尉久高、川上因幡守久国、至天正年中為地頭持、

慶長十五年三月吉日、地頭右松安左衛門祐盛、野井倉社棟札有、

同十四年三月右同断、

一上占教仁院家領之、元暦・文治の比、教仁院平八盛直領之、背忠久公之命謀反人之張本也、可静此等之逆意旨、從頼朝公賜御教書於忠久公也、

一川原田 多登古 大河内 摩尼波 新地 飛志田 加忍後谷

此諸所邊路番有り、

平田氏覺書ニ書

一大之馬場、右、麓假や之下馬場也、古戰場、

一安樂境大坂川渡、豊州内飢三郎五郎覺書の内に働之趣相見得候、志布志と相尋候へハ、上安樂之内伊崎田村境大廻の渡にて、川の渡り有之、右所ニ有、

一向江川原、一下安樂渡り、右三郎五郎覺書ニ有之、是ハ通路筋下安樂之事歟、

右、麓川向宝満寺之下也、古合戦の事ハ前ニ記す、永祿三年庚申、肝付氏多勢率志布志之城を攻、時嶋津豊後守一揆飢三郎五郎武清、向江川原於地藏堂前ニ及三度相戦、敵ハ肝付方伊集院三河守、

一山口大明神

右、大智天皇并一ノ后倭姫、二ノ后玉依姫、天皇之太子大友皇子、皇女持統天皇、乙姫宮^{二ノ后}以上靈社を号山口六宮大明神、玉依姫を本國へなかし、天智天皇三年甲子十五日也、天智天皇四年乙丑四月上旬、和州長津宮を忍出、供奉臣、岡本・池田・山口・紀野・柳田・上野・岩下已上八人也、御船志布志浦着、その地を舟磯と云、安樂村の内内堀有之所也、新内堀、一宿し給ふ宿主、今の一ノ宮是也、同年乙丑五月朔日、天皇校閲ニ行幸座、五月五日と九月九日迄五ヶ月之内、十六才ニベ夫婦ニ成玉ふ、

妊同五年丙寅五月十八日生乙姫宮と云々、天皇玉依姫ニはなれ、再志布志ニ幸座ニ田之浦、麓川^{三北}北の山津、山河腰掛石有、同年和州長津岡ニ還御、和銅元年六月十八日、一ノ宮を建立す、号西宮大明神為之基、以来田之浦山河ニ天皇座ス、其地御在所和銅二年酉六月靈社を草創、四山宮大明神、天皇之太子大友之皇子、白鳳元年壬申七月薨御、同年八月靈社を草創、列山口頭故号山口大明神為之基、以来建六宮、山口六宮大明神、大同二年丁亥六月、山宮社を迁安樂地、

一天智天皇并大友皇子靈社之事、和銅二乙酉、田之浦山宮大明神俗号御在所、天智天皇靈社、薨御及卅八年二ノ后玉依姫草創也、大友皇子靈社を同年后之建立也、

一光明天皇奉勅、八月下旬岡本意美丸志布志浦下着而、件両社傳神祿付屬祭之職、

一和同二年己酉九月吉日、右兩社依草創、天皇供奉之臣八人奉詔下着、勤社役、

一延長五年亥十二月廿六日、外從五位下行左京大夫阿刀宿祢忠行、

一安和元年戊辰二月、神領之事五百丁、

一寛正六年己酉仲秋下旬、台嶺門徒勤供花藏法、置於大般若一部、一文永三年丙寅、岡本伊与常丸代再興、○文永四年乙卯三月十二

日再興、神主岡元親忠代、神鏡六面、本地六觀音、或大權現會大明神改、大旦那藤原氏、公家久經、勸進僧良榮、佛師榮、

一乾元元年再興、神主岡本親世代、○康永二年癸未十二月七日再興、岡本清季代、○明德三年壬申十一月十五日再興、岡本刑部季清代、○永享二年庚戌再興、岡本季輔代、○文正元年丙戌八月十一日再興、岡本季朝代、大旦那嶋津修理亮立久御代、○明

應六年乙巳二月十三日再興、岡本季康代、○永正四年丁卯七月日岡本季慶代、且那新納近江守忠武代、○同十四年丁丑拾月吉日四足堂再興、岡元季清代、○天文廿一年壬子十二月廿九日宝殿再興、大旦那義久公御代、神主岡本山城守季親代、導師大姓院盛秀、○文祿四年乙丑八月廿五日御藏入二成、義久公御代、

藏役福崎新之丞、

下安樂江曾

一稻荷大明神、右同年中建立と申傳ふ、

安樂江曾

水神、右、寛永三年安樂村牛馬なやみ、其外田溝崩殊之外荒、故安樂江曾二名中勸請と申傳、

一白鳥大明神、文和元年建立と申傳、

一早鈴大明神、右同、

律宗都西天寺木

一宝満寺、秘山、蜜教院、聖武天皇之本朝為鎮護御造宮、

一不動・毘沙門二社、右両国御代、御代官上肥次郎殿・土屋三郎

殿向人也、形代之由書附二相見得、申傳二も有之、焼失之節二

社共二やく、

右、頼朝公御願所、當寺本堂御建立、本堂御形代御安置有之、

鎮守竊岡八幡御勸請有之、本堂之儀者九州御造宮被仰付由、土

肥次郎殿・土や三郎殿下之節當国江御代官之由、古書相見得、

申傳二も有之、○一本堂棟木、相模守右京大夫頼朝將軍と、古

書付二相見得、申傳二も有之、

一頼慶上人、右山門法師將軍の御叔父二而、其山の開山と古書付

二相見得、申傳二も有之、

一鎮守、竊ヶ岡八幡、正社舍金、右自關東鎌倉宮木と申社人被仰

付、奉守當地御勸請被成候と、云傳・古書付も有、

一高五石五斗九升七合

右、慶長六年五月三日、鎌田出雲守政近・平田太郎左衛門尉増宗・比志嶋紀伊守國貞・圖書頭忠長在判新地目録二而被下、右者大神御筆之御影、黃門様御代御屋形江可差上旨蒙仰候間、當寺第一ノ宝物二而、殊ニ禁裏御祈禱抽丹精候様被仰付詔を以御断申上候処、右御影代りニ者、木像御勸請可被遊之御事ニ而差上候處、いよいよ御勸請有之、奉崇社頭古來之御祈禱申上來、且又右御影差上候為御返礼、右高被成下候処、元和年間寺社知行被召上候節被召上候、○一忠昌公當寺江御止宿、其節肥後国主菊池肥後守使者到来、於光明院御對面被遊候と申傳、

一勸願所大菩薩、為名代鎌倉遊樂寺開山忍性菩薩眞正誓之弟子信

仙上人江院宣被成下、下向建立當伽藍安置、正和五、自鎌倉將

軍家被相渡、傍添證文明鏡也、其後醍醐院鎌倉執權相模守守時

朝臣御教書并寺領御寄附御下知高、自元享年中到正平・嘉應通

畑焉也、又光明院御宇元弘年中、就當兵乱人民不飯敬、刺抑妨

の問経奏聞、依之被成下候綸旨、於當国大寺天三木之趣、誠以

嚴重也、自御宇建武年中、如先代不可有相違之旨、將軍家御下

知狀分明也、然而先年寺家炎上之時、不幸而證文悉焼失、後水

尾院御宇万治元年、仙秀焼失二付院宣、就東山泉涌寺属勸修寺

大納言經廣卿、繼日之院宣之義奉望、則自當国嶋津筑前守・伊

勢兵部少輔・新納右衛門・町田勘解出被遣連署於泉涌寺、万治

二年、泉涌寺呼持明院岳長老・戒光寺住持天主西堂・来迎院住

持月峰上座連署持參、于時勸修寺殿繼目之院宣儀被達 天聰、

無相違被出候旨、前大納言殿御奉仰渡候、同年十一月十五日、

明岳老并天主仙秀相共參候于勸修寺殿奉請、故右中并孫慶朝臣

被仰渡畢、同十九日院宣被仰出、

一元應二年庚申、自南都西大寺下向、願主ハ道海・光信・信長之三人也、道海ハ俗名仲津川勘解由左衛門、光信ハ原田入道、信長ハ姓名不知、三人土所不相知、右尊像運慶一生涯不意之逸作ニ而、尊像相成り不能離、其側直ニ奉守于當寺、尤當寺ニ而死去す、廟所有山中、

一高三拾貳石六斗八升貳合九夕老才

右、勘解由左衛門當近所の間寄進之旨、寄進狀相見得候へとも何人とも不相知、

一熊野権現

慶長年間社頭及大破、座主光明院ヲ再興企之処、同十二年六月朔日、樺山権左衛門久高・圖書入道御書付を以、御領國中江被仰渡勸化を以再興、

一下馬札、勅許を以相立候由申傳、

一無量山 海徳寺、開基ス遊行七世訖阿上人也、寛永六年己巳二月中旬焼失、當寺十七代覚阿、家久公江申上、兩奉行喜入撰津守・川上式部太輔被遂下知御再興ニ付、遊行三十五世上人書付有之、

一大慈寺 山号龍興院、

右開山玉山和尚也、入唐いたし帰朝之時、大始良濱田村江着船にて、寺庵を結び号春海庵、無間も大始良龍翔寺を建立、其後榆井頼仲高山帝釈寺引移し号大慈寺、

大崎

一肝付越前守兼光、河内守兼忠三男、彈正忠家祖

一新納近江守為領地之處、天文八年三月廿九日、豊後守忠朝攻取

之、七月廿五日、忠朝臣平田新左衛門受取當城、四月廿一日、同所安樂を攻取、同十三年甲辰十月廿一日、肝付省鈞出馬ニ而、

同廿日手裡ニ入、
宗祭三斗五升
一妻万五社一ノ宮、社司篠原権左衛門、祭神一坐、立連主命、追而可考、鹿嶋・香取・諏訪・春日八而五神殿、児湯郡妻方八社之由、

飯熊山、往古志布志春日村江鎮座、天文二年當所ニ遷座、

一新熊野三所人権現 別當蓮光院、

一如意山 宝捧寺 多門院 太乘院末 開山不詳、中興開山傳瑜法

高四石

一飯山 心慶寺 福昌寺末 文明年中、肝付越前守兼光建立、

高四石八拾三石五斗五升余
一飯山 飯福寺 照信院天宮宗本山、山伏薩摩日裂婆頭、飯熊山別當職、

開山覚進上人、弘安三年、叡山方来ル新熊野権現を建立之由、其後歴数代救仁郷藏助頼世ノ弟也、朝元法印別當職相續ニ而、日本國中本山廿八人之先達所、往古方勅任也、朝元別當職の年

高百石余
月不詳、

一中之坊 救仁郷氏 飯熊山坊中、

一大崎城 肝付越前守兼光守之、文明十五卯十月二日死當城、

一出田古壘 出田小城と云、有龍沢、仮や方拾丁余東之方、三畦計残る、往古九畦計為有之由、外ニ西方壹間計曲輪有之、南ニ堀有之、右城ハ藥丸彈正少弼一肝付族為守之歟、

一戰ヶ崎 自出田壘東方一丁計申良方志布志之通路也、四方田地ニ而、中一筋之通路占松数本繁茂、長一丁余、横十七八間位、左右茅原也、

右、大野出羽守兼丸彈正少弼合戦之場也と云傳、首塚并六地藏など有之、但右合戦ハ天文廿三年甲辰八月十八日之事歟、

一下村 有藥丸村之内、往古之陣場と云傳、由緒不知、

一天守屋 菱田村、榆井頼仲志布志押領の時合戦為有之由、

一野御屋 由緒不詳、

一古日記云、天文七年戊三月十六日、肝付家領之、

一龍沢 或龍祖頭 此所天文廿二年、嶋津豊後守忠朝從兵饒三郎五郎武清、与肝付之兵卒致合戦、抽軍功の場也、救仁郷氏ハ肝付之族なり、

飯隈山別當系圖

朝元 良朝 慈朝 傳朝 朝清 朝義 朝實 朝安

朝安二重敷、

一梅谷坊良朝二男 一門や坊梅谷坊元祖二男 一桜井坊良朝二男

一松尾坊桜井坊元祖二男 一拾宝坊良朝二男 一榎木坊傳朝二男

一桐樹坊朝清二男 一池之坊朝清二男

一大崎ハ肝付越前守兼光宗嫡河内守兼忠三男也、嫡家依不和、心ヲ叛守護

文明比敷、領之、新納家^{志布志}領、又嶋津豊後守忠朝攻取之、大

文十三年申十二月晦日ハ肝付河内守兼統領之、天文年中、肝付

氏没落後為地頭持

一文明十八年比、新納近江守忠統^五代領之、天文八年比、雖為守護

領、其後又新納近江守忠勝^八代ハ肝付河内守兼統領之、天文十二

年比ハ再為守護領、比志嶋美濃守国守被補地頭職、持留之村二

之宮大明神、大永六年戊十一月棟礼、大檀那藤原忠勝・忠重と

有之、

一大崎ハ文明年間、肝付越前守兼光、肝付家嫡不和ニ而、高山を

落大崎を領、其後志布志ハ新納家ヲ領する之処、嶋津豊後攻取

領之、天文十三年申十二月廿一日ハ肝付河内守兼統出陣ニ而、

同晦日攻取之領地と成、右事ハ肝付古系圖兼統譜ニ有、同年間

城頭ハ伴兼活と云人也、右地頭之事、天文廿二年癸丑三月六日

妻万五社大明神棟札ニ有之、肝付没落之後、天正の初地頭職被

補、比志嶋美濃守国守死去之後、新納五郎右衛門尉久曉也、妻

万五社大明神^{村聲}、右立速主尊ヲ崇と云、然とも是ハ実正不知、

神代之系圖ニハ不相見得由也、五社ニハ鹿嶋大明神・香取大明

神・諏訪大明神・春日大明神を立敷、舊日州兒湯郡妻万と申所

之出也、天文年間志布志の内春日村野間と申所江鎮座有之、天

文二年ニ當分之地へ遷宮為有之由、

社檀造立當主君伴良兼公、曰隱古兼統公急成首般之乎、巧卒盡

落成之、指掌調造立ノ也、地頭伴兼活、同兼秋、天文廿三天癸丑

三月六日、遷宮師高山宗寺權大僧都法印快慶、大勸進橋本坊稔

朝、大工古山藤原吉資、池ノ坊海澄、小工某、鍛冶佐伯為重、

一心慶寺 山号大崎山、假宿村、施主肝付越前守兼光、

○多門院 如意山 奉持寺、假宿村、開山不知、中興開山傳瑜法印、

○翁松寺 山号大龍山 開山真翁慶觀和尚道切也、永正十年癸酉

仲春、當乾之方、真大松幡屈之形似青龍、其樹下宿ニ而座禪樹

上、于時老翁登松葉、慶觀問云、是何人、老翁答云、我是山守

護神也、慶觀則三拜、老翁化去、于時其跡木像乘松葉、慶觀折

枝葉取之、則一寸之大黑天也、慶觀之創建之前瑞也、開闢号大

龍山翁松寺、大黒天松葉為當寺宝物、

一秋月之絵 龍一幅 宝物之所、地頭高橋氏ヲ所望、白銀三枚被遣、

一鷲之絵 島津圖書所望、取次高橋七郎右衛門、

一唐之大鏡一口并雪舟筆屏風拾式枚

右、上方目利九右衛門依所望遣、其礼表とハ白銀三百目送、右

銀を以高拾三石買取、四分一ハ被召上、残高九石七斗に今當寺ニ有之、

一肝付家古系圖拔書

△兼元 島津元久御上京之御供、加治木陣中ニ而死去、加治木事畢ヲ、兼忠若年之比加治木渡進、

△兼久 三郎四郎河内守、文明十九年二月廿五日、十五歳ニ而山城洛、同年九月廿三日庚申肝付入部、年五十一死去、兼興妻相良長好之女、後妻島津忠朝舎弟久惣舎弟女子、于時大永四年甲申十二月三日串良知行、享祿三年庚寅五月三日鹿屋城令知行畢、于時天文二年壬巳四月五日、四十二死、

△兼統 天文十三年甲辰八月廿三日、三十四ニ而人道、法名權大僧都省鈞、官位御門跡殿院殿申談、于時天文七年戊正月廿六日高山岳知行畢、仍称寢寢清就為弓前同心、彼在所者渡畢、其後後年對當家有隔心、于時天文十一年壬寅二月、^{此ヲシテ}行畢、

同年同日百引知行畢、同年二月三日平房知行畢、于時天文十三年甲辰十月廿一日至栗陣、同卅日大崎知行畢、廿六日西保知行畢、同日野里知行畢、同年四月廿一日救仁院之内安樂知行畢、仍△翌年己巳七月市成知行畢、于時天文十五年丙午二月二日大始良知行畢、同年七月十三日蓬原知行畢、于時天文十七年戊申四月恒吉知行畢、同十六日牛牦・邊田・二川知行畢、三ヶ所同前、

△良兼 三郎左馬頭、永祿四年辛酉五月四日癸卯廻城知行畢、同五年壬戌四月五日戊午松山城知行畢、同五月廿八日壬子救仁院知行畢、同六月安樂之城知行畢、○永祿十一年戊辰五月三日福島之城知行、

長五尺計

革緒



八幡大菩薩



幅一尺五寸計

長壹尺四寸計

幅六寸



役所同前

諏訪上下大明神
八幡大菩薩
四十九社大明神

右二品、古肝付氏所持之旗并指物之由、右絹ハ沙・綾杯之樣ニ相見ゆる、外ニ産生衣布と見ゆる并小キ小袖有之、是ハ袖杯之樣ニ相見ゆる綿人也、

一古城 飯宿村、假や三ノ間有之、西之城・北之城・南之城、城主ハ前書記處ニ而可有之、

一出田小城 龍原と有之、龍沢と云、麓假屋ヲ十丁余も可有之東之方江當ル、城地くづれ三畦計も可有之、本ハ九畦余為有之由、所名寄帳相見得、小城と有之、高きかけ也、小川渡る、外ニも西脇之方へ壹反計、是も城地と相見得、南之方へ堀有之、此城ニハ肝付家藥丸彈正籠たり、

一戰ヶ嶋 俗ニ越ヶ嶋とも云、

右出田之小城ハ東之方壹丁計も可有之、串良柏原ヲ志布志江之通路也、串良川東境ヲ爰迄三拾丁計も有之歟、又爰ヲ藁田村志布志境迄廿二三丁も可有之、戰ヶ嶋ハ四方田地、其中之通路筋ニつゝ、き大松幾本も有之、翌壹丁横十七八間之間、通路之双方ハ茅杯はえり、大野出羽守・藥丸彈正合戰之場と申傳、右之場

ニ塔有之、六地藏なと有、當分崩れ少々残れり、出田之古老とも骨杯為見と云々、右之合戦ハ天文・弘治年間ニ而可有之歟、平山三郎五郎武清覚書之内、天文廿三年甲寅八月十八日、大崎之内龜沢ニ而分捕と有之、

肝付省鈞譜ニ、天文十三年甲辰十月廿一日到乘陣、同晦日大崎を知行と有之、又豊州家之臣龜三郎五郎覚書之内ニハ、天文廿三年甲寅八月十八日、大崎之内龜沢ニ而分捕と有之、又志布志山口大明神神主岡元系圖の内ニ、岡元助兵衛季慶、弘治年間大崎龍原ニ而打死と有之、弟富岡左衛門二郎大崎龍原ニ而戦死、敵方北郷左衛門・同彈正と有之、此系圖不慥系圖ニ而候得共、弘治年間大崎龍原合戦之事付合いたし候得者、弘治年間ニ合戦有之候者隨成事ニ候、或人書集之内ニ、藥丸出雲入道孤雲子ノ彈正ハ、大崎之内井手田ノ城大野出羽守ニ掛合將之、互に戦死と有、永祿四年書記有之、右合戦を考候ニ、天文廿三年甲寅年歟、又ハ弘治年間歟、両度之内可成歟、志布志蓬原城権現座主書付之内、天文十八年、蓬原地頭大野出羽守之事有之候ヘハ、天文十三年の合戦ニ而無之管候、

一下村 益丸村、合戦之時陣場、

一天守城 菱田村、菱田川上之方、通路筋六十丁計も可有之歟、西南之方ハ畠地江田地ひくし、城ハ高有之、蓬原城境、西南之方ハ當分ハ小なへ竹山也、堀有、

右、榆井頼仲志布志押領之時、戦為有之由、

一城御城 永吉村 由緒不詳、

一二之宮大明神 持留村、神祇建立之年間不知、

棟札、奉再興二之宮大明神宝殿一字、大檀那藤原忠勝・忠重、

大永六年戊十二月 日、地頭山口義之真行、
字不知推察也
家久公御代元和二再興、當領主伊地知清右衛門重豊と有之、

琉球国 在番支配也、慶長十四年三月征當地、五月諸軍帰朝、

福昌寺年代記云、永正四年日本方琉球近年ハ不和、

為和融琉国天王寺入我朝着志布志、翌年遣人隅安樂守於琉国、

一古日記口、慶長十五年庚戌、中山国檢地衆被相渡、置目等之改

新儀、同十八年癸丑撰八月吉日良辰、琉国守事之備有帰郷、

一古年代記曰、文明十三年辛丑八月六日、琉球国文船来、

一永正十三年丙子、琉球国文船四月廿八日着薩府、使者謝那大屋

子、使僧号天王寺、船式艘式百人、

一同十四丁丑丙子年、同琉球国船式艘文船使者取扱也、一年内兩

度也、

中山国七社権現本地垂跡

一波上山三社大権現

弥陀薬師千手観音

一仲山本州一品三社大権現

弥陀薬師十一面観音

一馬明山八幡三社大権現

弥陀釈迦勝軍地藏

一那智御山日露三社大権現

弥陀薬師准旺観音

一大慶山末吉熊野三社大権現

弥陀薬師観音

一天久山玉内三社大権現

弥陀薬師十一面

武備志云、大琉球国朝貢不時、王子及陪臣ノ子皆入大学、読書礼儀甚厚、

小琉球国 不通往来不曾テ朝貢、

一狭衣ニ云、うるまの嶋と有、下註ニうるまとは琉球国なると記

ス、

宇留間嶋 松葉集末勘

千裁 公信公

おほつかなうるまの嶋の人なれや我ことの葉を知らほなる

夫木 中務

なかめはやことの葉たにもかはるなるうるまの嶋の秋の夜の月

玉吟 家隆

よそに聞うるまの嶋のうるまへはいひたにはるて思ひ絶なん

大島 喜界 徳之嶋 沖之永良部

此四島、往古与琉球国附庸之嶋也、慶長十四年比ヨリ為公領、
代官支配也、

既刊史料名

集	史料名	集	史料名
1	薩藩政要録	17	鹿児島縣地誌(下)
2	丁丑日誌(下)	18	薩藩舊士文章
2	" (上)	19	薩藩先公貴翰(乾)
3	薩摩国新田神社文書	20	" (坤)
4	一向宗禁制關係史料	21	小松帶刀傳・履歴・記事
5	薩摩国山田文書	22	小松帶刀日記
6	諸家大概別本諸家大概職掌紀原御家譜	23	新修舊鹿児島藩領國・郡・郷・村・浦・町附(上)
7	薩摩国阿多史料	24	" (下)
8	山登御道中日帳御下向列朝制度	25	「三州御治世要覽」(三五三八)
9	明治元年戊辰戰役關係史料	26	桂久武日記
10	伊能忠敬の鹿児島測量關係資料並に解説	27	明赫記
11	管窺愚考・雲遊雜記簿	28	要用集(上)
12	川上忠塞一流家傳	29	" (下)
13	本藩人物誌	30	桂久武書翰
14	薩陽過去帳	31	本藩地理拾遺集上(薩摩国)
15	備久公御養子御願一件抄	32	" (大隅国・諸縣国)下
16	鹿児島縣地誌(上)		

鹿児島史料刊行委員会委員

五十音順

唐鎌祐祥	松陽高等学校教頭
川越政則	元南日本新聞社社長
芳即正	鹿児島純心女子短大教授
桑波田興	鹿児島大学教授
五味克夫	鹿児島女子大学教授
小西四郎	元東大史料編纂所教授
犀川碓吉	元甲南高等学校校長
晋哲哉	元維新史料編纂所員
竹内理三	元早稲田大学教授
原口泉	鹿児島大学助教授
福満武雄	鹿児島新報社取締役
宮下満郎	甲南高等学校教諭
桃園恵真	鹿児島大学名誉教授
山田尚二	西郷南洲顕彰館館長

第三十二集

本藩地理拾遺集 下

(大隅国・諸縣国)

平成四年九月

発刊

鹿児島市城山町五一

鹿児島県立図書館

印刷

鹿児島市下田町一八七九番地

㈲ニッセイ印刷

電話 四三二六二七七

